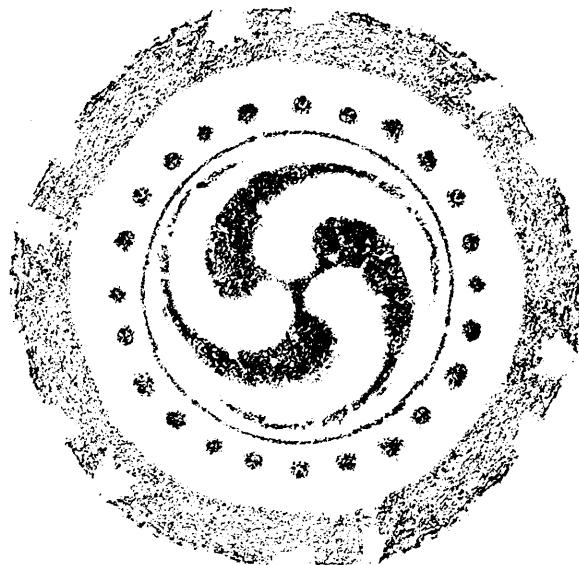


た げ
多氣遺跡群発掘調査報告

—一志郡美杉村上多氣所在—



1993・3

三重県埋蔵文化財センター

序

伊勢の国の中でも山間部に位置している美杉村には、数多くの秘められた文化財が眠っているといわれています。そのなかでも、上多気・下多気地区には著名な「北畠氏館跡庭園」があり、全国から観光客が訪れるといっています。

この上多気・下多気は、かつては2地区を含めて「多気」と呼ばれた地域で、南北朝時代から戦国時代にかけての大名・北畠氏が本拠地を置いたところであります。北畠氏は中・南伊勢を中心に、南伊賀・志摩および東紀州の一部さらには大和宇陀地域までをも何らかのかたちで支配していた大名であります。そのような点からすれば、当地は、いわば当時の北畠氏支配地域内の中心として存在していたものとも言えるもので、その歴史的価値はとても高いものであるといえるでしょう。

上多気・下多気には、現在もいくつかの北畠氏時代の旧跡をみることができます、開発は少なく、それに先立つ発掘調査の機会もありませんでした。自然に満ちあふれた落ち着いた景観を保持しています当地は、そのためもあって交通事情は決して良くはなく、早急な交通網整備が望まれていました。今回の発掘調査はこのような地元の要望の高い国道368号線の道路改良事業に先立って行われたものであります。

今回の調査は、決して規模の大きな調査ではありませんでした。しかし、多気の、ひいては北畠氏の歴史学的な解明のための一助となるような成果であったと思います。この調査によって得られました結果をひとつの資料として、北畠氏が形成した「都市遺跡」への関心が高まって、文化財保護の重要さを考えて頂ければと思います。

調査に際しましては、美杉村教育委員会、地元上多気・下多気・八知の方々、および美杉村建設課・県土木部道路建設課・久居土木事務所の関係各位からは、多大な御協力とともに暖かい御配慮を頂くことができました。文末とはなりましたが、各位の誠意あるご対応に、心からの御礼を申し上げます。

1993年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 久保富子

例　　言

1. 本書は、国道368号線道路改良事業に伴い緊急発掘調査を実施した美杉村上多気字土井沖地区に所在する遺跡群の発掘調査報告書である。
2. 今回調査した土井沖地区には、縄文～弥生時代の遺跡である土井沖遺跡のほか、南北朝～戦国時代にかけての大名である北畠氏が関係して整備したと考えられる都市遺跡の一部を構成している大蓮寺跡・法光寺跡が所在している。これらは、土井沖遺跡とは全く別の遺跡として把握されねばならないものである。したがって、今回はこれらの遺跡の総称として「多気遺跡群」と呼称している。
3. 調査は、平成2年度と平成4年度の2次にわたっている。平成2年度は立会調査、平成4年度は本調査である。調査の体制は以下の通りである。

＜平成2年度＞

調査主体　　三重県教育委員会
調査担当　　三重県埋蔵文化財センター
　　　　　　調査第1課第2係長　田中喜久雄

＜平成4年度＞

調査主体　　三重県教育委員会
調査担当　　三重県埋蔵文化財センター
　　　　　　調査第1課　技師　伊藤裕偉
　　　　　　主事　　浜口　元
　　　　　　研修員　竹田憲治

4. 調査にあたっては、美杉村教育委員会、地元上多気・下多気・丹生保・八知の方々、および美杉村建設課・県土木部道路建設課・久居土木事務所からの協力を得た。
5. 報告書作成にあたっては、乾　哲也氏（和泉市教育委員会）、上原真人氏（奈良国立文化財研究所）、奥　義次氏（三重県立松阪高等学校）、亀井明徳氏（東洋大学）、駒井正明氏（財）大阪府埋蔵文化財協会）、佐川正敏氏（奈良国立文化財研究所）、坪之内徹氏（奈良女子大学）、中野晴久氏（常滑市歴史民俗資料館）、西山　克氏（京都教育大学）、藤澤良祐氏（瀬戸市教育委員会）、および駒田利治氏・田村陽一氏・小林　秀氏・穂積裕昌氏（以上、三重県埋蔵文化財センター）のご教示を得た。
6. 当報告書の作成業務は三重県埋蔵文化財センター調査第1課および管理指導課が行い以下の方々の援助・協力を得た。写真は、遺構関係は伊藤・浜口・竹田が、遺物は天野秀昭が撮影した。執筆および全体の編集は伊藤が行った。
足立純子　石橋秀美　岩崎道代　尾家　恵　柿原清子　川方裕美　北山美奈子　楠　純子　倉田由起子
小林佳代子　須賀幸枝　杉原泰子　瀧川ひとみ　武村千春　田中美樹　豊田幸子　中村美智代　中山豊子
西山秋子　浜崎佳代　林由起子　藤村美智子　前村浩子　松井美幸　松月浩子　森島公子　脇坂栄子
7. 挿図の方位は、全て座標北で示している。当調査区は国土座標第VI系に相当する。
8. 写真図版の遺物番号は、実測図の番号と対応している。写真図版は、特に断らない限り縮尺不同である。
9. 当報告書での用語は、以下の通り統一した。
なべ……………「鍋」および「堀」があるが、「鍋」を用いた。
わん……………「椀」「碗」「塊」があるが、「椀」を用いた。

10. 当報告書における掘立柱建物の断面図は、その建物の柱穴のみを抽出したうえで表現したものである。
11. 当報告書の遺構は、全て通し番号となっている。そのため、煩雑となるような挿図では、「S」あるいは「SK」などの記号を省略したものがある。
12. スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本文目次

I.	前言	(1)
1.	調査の契機	(1)
2.	調査の経過	(1)
3.	調査の方法	(3)
II.	位置と環境	(4)
1.	地理的環境	(4)
2.	歴史的環境	(7)
III.	調査の成果－層位と遺構－	(11)
1.	大蓮寺調査区	(11)
2.	平成2年度調査区	(33)
3.	法光寺調査区	(37)
IV.	調査の成果－出土した遺物－	(42)
1.	大蓮寺調査区の遺物	(42)
2.	平成2年度調査区の遺物	(61)
3.	法光寺調査区の遺物	(63)
V.	調査のまとめと検討	(77)
1.	出土土器に見る多氣	(77)
2.	中世寺院と瓦について	(80)
3.	大形掘立柱建物とその周辺	(82)
4.	多気に見る中世地方政治都市のあり方	(83)

写 真 図 版 目 次

P L A T E 表紙 多気全景
 P L . 1 大蓮寺調査区遺構 (1)
 P L . 2 大蓮寺調査区遺構 (2)
 P L . 3 大蓮寺調査区遺構 (3)
 P L . 4 大蓮寺調査区遺構 (4)
 P L . 5 大蓮寺調査区遺構 (5)
 P L . 6 大蓮寺調査区遺構 (6)
 P L . 7 平成 2 年度調査区遺構 (1)

挿 図 目 次

- fig.1 大蓮寺調査区小地区設定図 (3)
 fig.2 多気周辺地形図 (4)
 fig.3 多気地区内中世遺跡位置図 (5~6)
 fig.4 大蓮寺・平成 2 年度調査区周辺地形図 (10)
 fig.5 大蓮寺調査区土層断面図 (12)
 fig.6 大蓮寺調査区平面図 (13~14)
 fig.7 竪穴住居 S H117 平面・土層断面図 (15)
 fig.8 掘立柱建物 S B196 ~198 · 202
 平面・断面図 (16)
 fig.9 掘立柱建物 S B199~201平面・断面図 (17)
 fig.10 d21グリット pit9銅製椀? 出土状況 (17)
 fig.11 土坑 S K 1 平面・断面図 (17)
 fig.12 集石土坑 S K 5 · 6 平面・断面図 (18)
 fig.13 石組遺構 S K 11 関係実測図 (19)
 fig.14 石組遺構 S K 38 平面図 (20)
 fig.15 磁石建物 S B204 平面・断面図 (20)
 fig.16 掘立柱建物 S B205,208,209
 平面・断面図 (22)
 fig.17 掘立柱建物 S B206,207 、柱列 S A210,211
 平面・断面図 (23)
 fig.18 瓢状石組 S K 172 平面・立面・
 土層断面図 (24)
 fig.19 石組遺構 S K 185,186 平面・立面図 (26)
 fig.20 石組遺構 S K 102, S K 99 平面・立面図 (27)
 fig.21 石組遺構 S K 101 平面・立面図 (28)
 fig.22 石列 S Z 88 遺物出土状況 (29)
 fig.23 石列から想定した区画概念図 (30)
 fig.24 土坑 S K 83 遺物出土状況および

表 目 次

- tab.1 大蓮寺調査区検出遺構一覧表(1) (40)
 tab.2 大蓮寺調査区検出遺構一覧表(2) (41)
 tab.3 工房跡周辺出土土器構成表 (47)
 tab.4 大蓮寺跡周辺出土土器構成表 (49)
 tab.5 出土遺物観察表(1) (66)
 tab.6 出土遺物観察表(2) (67)
 tab.7 出土遺物観察表(3) (68)
 tab.8 出土遺物観察表(4) (69)
 tab.9 出土遺物観察表(5) (70)
 tab.10 出土遺物観察表(6) (71)

写 真 目 次

- pho.1 「大蓮寺前住持」の墓石 (8)

P L . 8 平成 2 年度調査区遺構 (2)
 P L . 9 法光寺調査区遺構 (1)
 P L . 10 法光寺調査区遺構 (2)
 P L . 11 出土遺物 (1)
 P L . 12 出土遺物 (2)
 P L . 13 出土遺物 (3)
 P L . 14 出土遺物 (4)

- fig.25 土坑 S K 103 遺物出土状況 (32)
 fig.26 土坑 S K 152 遺物出土状況および
 土層断面図 (32)
 fig.27 平成 2 年度調査区平面・断面図 (35~36)
 fig.28 法光寺調査区位置図 (37)
 fig.29 法光寺調査区平面図 (38)
 fig.30 法光寺調査区土層断面図 (39)
 fig.31 竪穴住居 S H117 他出土繩文土器 (43)
 fig.32 出土弥生土器 (44)
 fig.33 工房跡周辺出土遺物(1) (45)
 fig.34 工房跡周辺出土遺物(2) (46)
 fig.35 南伊勢系土師器皿類分類図 (48)
 fig.36 土坑 S K 97 · S K 174 他出土土器 (50)
 fig.37 土器群 S Z 90 · 土坑 S K 191 他出土土器 (51)
 fig.38 石列 S Z 88 · 石組遺構 S K 185,186
 他出土土器 (52)
 fig.39 遺構外出土遺物 (53)
 fig.40 遺構外・ピット他出土遺物
 および硯・円形加工品 (54)
 fig.41 大蓮寺跡出土軒丸瓦復元図 (55)
 fig.42 大蓮寺跡出土瓦(1) (56)
 fig.43 大蓮寺跡出土瓦(2) (57)
 fig.44 大蓮寺跡出土瓦(3) (58)
 fig.45 大蓮寺跡出土瓦(4) (59)
 fig.46 大蓮寺調査区出土金属製品 (60)
 fig.47 平成 2 年度・法光寺調査区出土土器 (62)
 fig.48 法光寺跡出土軒丸瓦復元図 (63)
 fig.49 法光寺跡出土瓦 (64)

- tab.11 出土遺物観察表(7) (72)
 tab.12 出土遺物観察表(8) (73)
 tab.13 出土遺物観察表(9) (74)
 tab.14 出土石製品観察表 (74)
 tab.15 出土円形加工土器片一覧表 (74)
 tab.16 出土漆器一覧表 (74)
 tab.17 出土瓦観察表 (75)
 tab.18 鉄滓出土地点一覧表 (75)
 tab.19 出土鎔貨一覧表 (76)
 tab.20 出土金属製品観察表 (76)

I. 前 言

1. 調査の契機

国道368号線は、松阪市から名張市に至る幹線道路である。かつては「伊勢本街道」として賑わっていた道に相当する。しかし、近年の交通事情の大きな変化により、急峻な山間部を縫って走る現道では自動車による通行にはかなりの難所であった。また、美杉村の地域振興のためにも、早急な交通網整備が必要とされていた。

この道路改良事業は、すでに美杉村奥津管内から上多気の飼坂トンネルを下った県道嬉野飯高線と交差するところまで完成しており、今回の調査地付近が今年度の対象となった。

美杉村には極めて重要な埋蔵文化財を包蔵するところが各所にあることは、すでに周知の事実である。そのなかでも字上多気・下多気の存在する「多気」は、かつて伊勢から伊賀・大和の一部などを領有していた大名・北畠氏が本拠地としていたところであ

り、中世遺跡としての価値が極めて高いことが予想されている。

今回の道路改良事業予定地内における埋蔵文化財の範囲を確定するために、平成2年12月4日～5日に当センター調査第1課第2係長田中喜久雄を、平成3年7月20日に当センター主事増田安生を、それぞれ担当者として試掘調査を実施した。その結果、大蓮寺跡・土井沖遺跡に相当する約2,300m²（大蓮寺調査区）と、法光寺跡に相当する部分約450m²（法光寺調査区）が調査必要範囲として確定されたに至った。

なお、調査必要範囲の一部については、排水の関係から先立って調査を行う必要が生じた。そのため、平成2年12月29日～平成3年1月16日にかけて田中喜久雄を担当として約400m²の調査を行った（平成2年度調査区）。

2. 調査の経過

今年度の発掘調査は平成4年5月15日から開始し、同年8月27日に全て完了した。最終的な調査面積は、大蓮寺調査区で1,490m²、法光寺調査区で360m²の計1,850m²である。

大蓮寺調査区では人力ではとても動かせないような礫が多く、調査が難航した。また法光寺調査区では、植林されていたため、抜根作業に苦心した。しかし、作業に邁進していただいた地元各位の熱意と暖かいご配慮によって調査は恙なく進行し、終了することができた。特に、宮崎洋史氏、奥野友一氏には格別のご支援とご配慮を頂いた。また、調査に参加していただいた方々の終始変わらぬ熱意と誠意には、言葉に尽くせないものがあった。ここにご芳名を記して感謝の意を表したい。

（現地調査作業員）

尾田とし 菊田けい 嶋野モトエ 鈴木裕子
竹岡ひで 田中清美 長谷川みか 長谷川元枝

平尾しげみ 平尾りん 三鬼幸枝 宮崎久美子
武藤たけ 村林芳美 安野ぎん 石橋直三
京条守太郎 黒田辰郎 五明 正 芝山元次
鈴木喜三郎 高田俊和 竹岡鶴次 田中隆三
田中久一 辻村良和 鳥谷尾税 溝畠 昇

なお、調査の経過は以下の日誌抄を参照されたい。

調査日誌（抄）

- 1992年5月13日 道具搬入。
- 5月15～18日 表土掘削。
- 5月19日 地区杭設定。
- 5月21日 大蓮寺調査区人力調査の開始。パワーがあり、作業の進捗が速い。
- 5月25日 砥石の出土が多い。多気小学校の生徒が見学に来る。
- 5月26日 石組遺構SK11の検出。付近には円形の土坑が多いが、遺物はあまりない。

- 5月27日 焼土混じりの土が多くなってくる。SK 11の清掃。
- 5月28日 重機掘削の途中、調査区西端で縄文土器出土。
- 5月29日 e18 付近から弥生土器出土。
- 6月1日 e17 付近で弥生土器多く出土。
- 6月2日 d21pit9 から銅製の小椀出土。15ラインまで進み、土器の出土が多くなる。
- 6月3日 20~25ラインのピットの精査。北宋錢の出土が多い。
- 6月4日 13・14ラインに至り、土器が多量に出始める。ほとんどの人が竹ベラをもっての調査となる。
- 6月8日 SK83から土器がまとまって出土。SK 87（石組遺構 SK101 の上層埋土）内から、漆器の破片出土。
- 6月9日 6・7ラインの調査に入る。瓦の出土が多い。
- 6月11日 3~9ラインの出土遺物は16世紀代のものが多い。
- 6月12日 壁穴住居 SH117の調査。縄文土器がある。6・7ラインあたりから明錢の出土がある。
- 6月16日 軒平瓦の良好なものが出土する。
- 6月19日 法光寺調査区の草刈りをする。
- 6月22日 大蓮寺跡付近から、漆器2個体分出土。法光寺調査区の調査をはじめる。下段にトレンチを入れるもの、遺構はなく、遺物も山茶椀片1点のみである。
- 6月24日 SK102がSK101と同様、石室状となつた。
- 6月25日 d8pit2から、硯出土。
- 6月26日 SK172の検出。法光寺調査区から、瓦が出土。また、上段部分の裾には石列が存在するようであることが判明。
- 7月1日 航空測量の現地説明を行う。
- 7月3日 大蓮寺跡付近から、「朝鮮通寶」出土。
- 法光寺調査区からは、軒丸瓦の良好なものが出土する。
- 7月7日 航空測量は（株）アジア航測が落札。
- 7月9日 大蓮寺調査区の調査がほぼ終了する。
- 7月10日 法光寺調査区から瓦質土器の風炉が出土。
- 7月15日 大蓮寺調査区の航空測量のための清掃を行うものの、16時に無情の雨が降る。
- 7月16日 8時から作業に入り、清掃をする。本日航空測量が無事終了。
- 7月21日 法光寺跡の土壇の裾がほぼ決まる。
- 7月22日 法光寺調査区の掘削・株取り。
- 7月23日 遺跡の現地説明会の記者発表。法光寺調査区がほぼ終了する。
- 7月24日 調査区の土層図作成および現地説明会の準備。
- 7月25日 現地説明会。約100人の参加があった。
- 7月27日 大蓮寺調査区の村道下の調査開始。搅乱があり、残りはあまり良くない。SH117の礫群下から炉を確認。
- 7月29日 SK185を中心に、村道下の調査・清掃。本日に掘削作業が終了した。
- 7月30日 村道下の遺構実測。
- 8月6日 遺構実測。
- 8月7日 SK172・152の遺物取上げ。
- 8月10日 SK172の石組の東切れ目に、粘土のはいったピット状のものが出る。
- 8月11日 法光寺調査区の平板測量するものの、午後は雨で中止。
- 8月12~19日 盆休みとともに雨降り日が多く、調査中断。
- 8月20日 SK101の奥壁が2重になっていることが判明。
- 8月21日 法光寺調査区の平板測量のつづき。
- 8月25日 SK11の実測。本日に現地での調査は全て終了した。
- 8月27日 道具の撤収。

3. 調査の方法

a. 小地区設定について

今回の調査は、大蓮寺調査区と法光寺調査区の2か所に分かれていた。調査時点では、大蓮寺調査区については「土井沖遺跡」、法光寺調査区については「土井沖遺跡B」と仮称し、それぞれ別個に小地区設定を行った。小地区は4m×4mの正方形を1グリットとして行った。大蓮寺調査区の小地区設定はfig. 1に、法光寺調査区の小地区設定はfig. 29に示している。なお、この小地区設定は座標軸とは全く無関係である。

b. 遺構図面について

遺構図面の作成は、大蓮寺調査区は航空測量、法光寺調査区は1/100の平板測量による。遺物出土状況や石組土壙などについては個別遺構図を作成している。航空測量図は1/50を基本としている。個別遺構図は1/10を基本としているが、各遺構・遺物の状況によって違った縮尺のものもある。

現地において遺物出土状況図作成の後に取り上げた遺物は、現場で取上げ番号を入れている。土器類(瓦を含む)は「p」、鉄製品は「i」、木製品は「w」をその頭に付加している。

c. 遺構の名称について

遺構は、各調査区毎に通し番号としているが、ピットは各小グリッド毎で番号を与えていている。また、各遺構の形態によって頭に付ける略記号が異なっている。その付け方は、以下のような方法を原則としている。

S A	柱列
S B	掘立柱建物・礎石建物
S D	溝
S H	竪穴住居
S K	土坑・石組土坑
S Z	落ち込み・石列・土器群など
p i t	ピット・柱穴

なお、大蓮寺調査区では、比較的大きなピットがいくつもあり、調査時に「S K」としているものがある。これらは今回の報告ではあえて変更せず、遺構一覧表の「遺構の性格」の項に触れておいた。

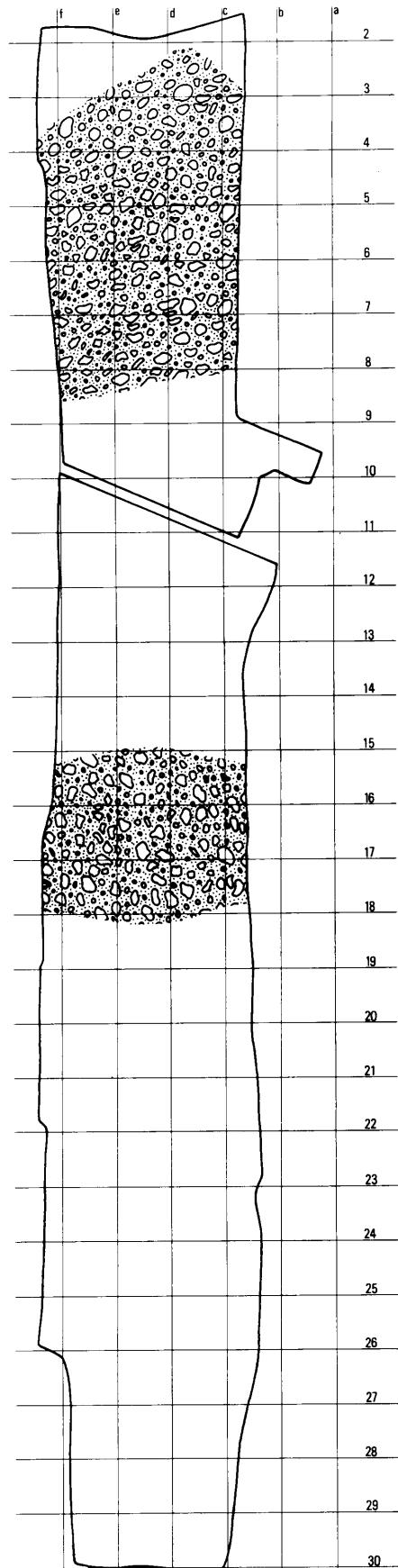


fig. 1 大蓮寺調査区小地区設定図 (1 : 500)
※スクリーントーンは磐層基盤部分

II. 位置と環境

1. 地理的環境

今回の調査地は、行政的には一志郡美杉村上多気字土井沖である。この上多気は八手俣川水系によって形成された谷の上流部に相当し、下流部には下多氣がある。上多気・下多氣は、かつて行政的にはそれぞれが別の村として所在していた。しかし、この2地区は地形的に連続し、この2地区で一定のエリ

アを形成していることは明白である。したがって、当地の地理的・歴史的環境を述べるに際しては、上多気・下多気を切り離して考えることはできず、この2地区の総称として「多気」の名称を用いることとする。

多気は八手俣川水系によって形成された盆地状を

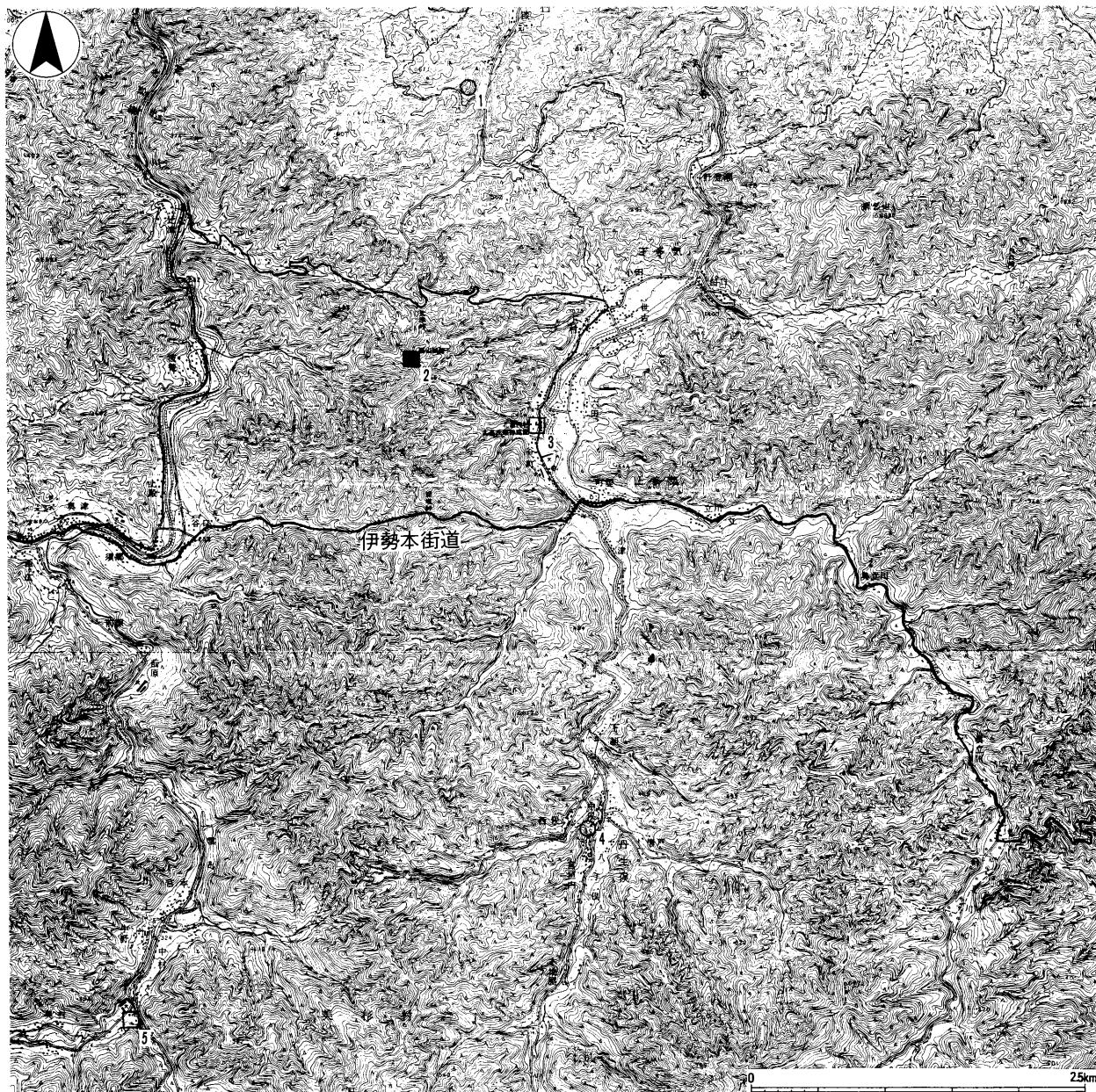


fig. 2 多気周辺地形図 (1 : 50,000) (国土地理院『伊勢奥津』『宮前』1/25,000から)

1. 漆経塚 2. 霧山城跡 3. 北畠氏館跡 4. 伝赤松教康墓 5. 川上館跡



fig. 3 多気地区内中世遺跡位置図 (1 : 10,000)

呈する谷で、平地部の標高は約330～340mである。八手俣川水系は、丹生俣地区から流れる八手俣川本流と、立川地区方面から流れる支流の立川川とが、今回の大蓮寺調査区付近で合流し、下多気に向かって北流する。多気に向かっては、この八手俣川本流のほか、小規模な河川が多く流れ込んでおり、これらの河川活動によって、この谷が形成されたものと推察される。

多気は峠を通じて各地とつながっている。北東方

向は白口地区から白口峠を越えて一志郡嬉野町に、南東方向は立川地区から仁柿峠を越えて飯南郡飯南町に、南方向は小津地区から丹生俣地区を経、庄司峠を越えて飯南郡飯高町に、西方向は飼坂峠を越えて同村奥津地区に、また比津峠を越えて同村比津地区に通じている。飼坂峠から仁柿峠に至る道は、近世には伊勢本街道として機能しており、畿内地方からの参宮客によって賑わいをみせていたという。

ここでは、多気の中心的時期である中世について見てみよう（fig. 2・3）。

南北朝動乱期に、南朝方の一大軍事的勢力として活動していた北畠氏が、伊勢国司として伊勢に入部してきたのは、いくつかの見解こそあれ、南北朝期の14世紀中葉から後葉にかけてのある時期であったことは間違いない。その後、織田氏による伊勢侵攻によって滅亡するのがおよそ16世紀後半である。したがって北畠氏は、およそ200年の間伊勢における大名領主権力として存在していたことになる。しかし、彼らが何時の時点で多気に入部したのかは、確実な史料もなく、類推の他ない。後述するように、15世紀初頭には確実に文献史料中に登場することから、その時期よりは若干前と考えておくのが本来的であろう。

では、北畠氏が入部する以前の多気は一体どのような状況であったのだろうか。この点についてもほとんど解明していない。しかし、著名な漆経塚（fig. 2の1）が形成されていることを考えると、ある程度人が居住していたことが考えられる。須原・六田地区で行われた発掘調査では、12～13世紀代と考えられる瓦器碗が出土している。しかし、これ以上この時期における状況を示すものは現在までのところなく、今後の調査に期待せざるを得ない。ただ、少なくとも目立った集落が形成されていたわけではなさそうで、北畠氏入部以前にはかなり漠寂としていたものと考えられる。

では北畠氏に関連すると考えられるものがどれほど明らかになっているかというと、それも大部分が今後の研究を待たねばならない状況にある。ここで

2. 歴史的環境

はある程度判明しているか、推測が可能なものについて述べておく^②（fig. 3）。

a. 館跡

多気には、明らかに館跡と考えられるものが2か所ある。ひとつは北畠氏館跡で、もうひとつは六田館跡（仮称）である。

北畠氏館跡（A）は多気中央にある。現在はその大部分が北畠神社となっている。丘陵裾の浸食台地を利用して形成されているもので、当初は図示した部分約14,000m²が館跡として機能していた部分と考えられる。館跡南側には国指定史跡及び名勝として著名な「北畠氏館跡庭園」がある。この館跡がいつの時点で北畠氏によって造成されたのかは未だ判然としないが、過去2回の調査（緊急調査を含む）によって、15世紀中葉～後半の遺物が出土しており、この時期には確実に機能していたものと考えることができる。

六田館跡（B）は多気中央、北畠氏館跡とは八手俣川を挟んで対面に位置する。「東御所」の伝承がある。現在は南北約70m、東西約50mの長方形の台地部を認めることができ、その周囲には一部堀状の窪みが認められる。太平洋戦争後間もなくの航空写真を見ると、この台地部の周囲に土壘状のものを認めることができ、館跡であることを示している。

なお、『伊勢国司記略』^③で「藤方屋敷」とされるものがこれに相当するものと考えられる。

b. 寺院

多気の寺院は、近世絵図面には21ヶ所、近世の文書では28ヶ所の寺院のあったことが示されている。しかし、現状で現地比定できる寺院は、fig. 3に示

したように14ヶ所である。このうち、現地踏査によって確認できた寺院跡について概観する。

①伝金国寺跡 下多氣字小田に所在する。丘陵尾根を整地して築造していると考えられる。平坦地が最低2面あり、上段は本堂跡かと想定される。上段の平坦地北隅には無縫塔・五輪塔および相輪片がある。下段の平坦地には石垣が認められるが、それが当時のものかどうかは分からぬ。北畠氏の菩提寺とされており^⑤、宗派は曹洞宗と伝えられている。

②西向院 下多氣字上村に所在する。現在も寺院として存在している。境内には無縫塔・五輪塔・宝篋印塔がある。現在の宗派は天台宗真盛派である。

③伝福寿院跡 下多氣字上村に所在する。現在は保育所の用地となっている。南面にはかつて堀が存在していたらしい。

④伝鎮福利院跡 下多氣字瀬古に所在する。かつては五輪塔が多く認められたらしいが、平成4年の踏査時点には全く認められなかった。寺院推定地の背後の丘陵は人為的に切断されており、水路が通されている。なお、寺院推定地の北側の一段下がったところには、かつてこの部分にあったという精緻な石製の祠が祭られている。

⑤光榮寺跡 上多氣字六田に所在する。寺院域は判然としないが、南西隅は六田館跡に道を挟んで接するので、西・南方向には図示した範囲以上は広がらないものと考えられる。この南西隅には無縫塔・五輪塔が認められるとともに、石碑がある。石碑の表面には「孔休意法師」、側面には「光榮寺 享保二丁酉七月□日」の銘文がある。宗派は不明である。

⑥六田廃寺 上多氣字六田に所在する。寺院の伝承はない。しかし、穴太積みの石垣があり、後述の例から寺院跡の可能性が最も高いであろう。

⑦伝慶正寺跡 上多氣字六田に所在する。丘陵間を利用して平坦地を築造しているようである。五輪塔・石地蔵がある。

⑧慈恩院跡 上多氣字馬場に所在する。「慈恩院」の旧字名が残っている。丘陵裾を整地して平坦地を成しているようである。五輪塔および相輪片がある。現地踏査時に、瓦片および15世紀末頃の瀬戸産擂鉢を採集した。

⑨伝長泉寺跡 上多氣字町屋に所在する。丘陵裾

の平坦部を利用している。範囲は不確定である。

⑩聖光寺 上多氣字町屋に所在する。現在も寺院として存在している。境内には多くの五輪塔や石地蔵があるが、その多くが移転されたものと思われる。なお、現在共同墓地に移転されている石幢（『美杉村史』では「複制六地蔵石幢」としている）が存在していた場所は当寺院の墓地であった場所である。現在の宗派は浄土宗である。

⑪大蓮寺跡 上多氣字土井沖に所在する。「大蓮寺」の旧字名が残っている。寺院域は判然としないが、西端には「大蓮寺前住持」と刻まれた無縫塔があり、現在は聖光寺に移転されている（pho. 1）。今回その一部を調査することとなり、後に詳述する。なお、大西源一氏の著書中に、当地に赤松円心の墓とされるものがあったと書かれているが、現在は不明である。

⑫法光寺跡 上多氣字土井沖に所在する。「法光寺」の旧字名が残っている。丘陵を利用して平坦地を造成している。本堂部分と想定される広い平坦地がある。かつてこの周囲には五輪塔があったというが、現在はみることができない。今回その一部を調



pho. 1 「大蓮寺前住持」の墓石

査することとなり、後に詳述する。

⑬大正寺跡 上多気字小津に所在する。丘陵を利用して平坦地を造成している。『美杉村史』によると、明治12年までは寺として存在していたようである。境内跡には現在、子安觀音が祭られている小堂があり、その脇には無縫塔・石地蔵・五輪塔がある。境内の北西隅にあたる民家との境界には穴太積みの石垣の基底部が残っている。明治には浄土宗であったが、それが中世にまで遡るものかどうかは分からぬ。

⑭伝道院跡 上多気字小津に所在する。「伝道院」の旧字名が残っている。丘陵を利用して1つの平坦地を造成している。敷地内には五輪塔・石地蔵が多数認められる。

⑮松月院跡 上多気字小津に所在する。「松月」の旧字名が残っている。丘陵を利用して3つの平坦地を造成している。本堂跡と推定される部分の側面とその背後丘陵の法面側、および本堂跡下の平坦地の南側面には大規模な穴太積みの石垣が構築されている。^⑯ 本堂跡の東側を中心に五輪塔・石地蔵のほか相輪片が多く認められる。五輪塔および石地蔵には「天文廿年」の銘が刻まれているものが現在それぞれ1個体ずつ確認できる。

六田廃寺としたものを除いた14ヶ寺は、近世の絵図面にもその存在が示されているものである。このように見ると、近世の絵図面とはいえ、そこに示された寺院の多くが実際に存在していた可能性を有しているといえる。これらの寺院の建立時期については今回調査した法光寺・大蓮寺についてのみ判明するにとどまるが、今後の調査によって存在の有無、あるいは建立の時期が判明するであろう。多気における興味深い解説項目のひとつである。

c. 市場

明確なことは分かっていないが、「市場沖」の旧小字が残っている (fig. 3 の C)。八手俣川と立川川が合流するところでもあり、この地に市場が形成されていた可能性は高い。^⑰

d. 町屋

やはり明確なことは分かっていない。現在の町屋地区がそれに相当する地区であることも考えられる。

また、現在の町屋地区の東端には「ホウロクマチ」と呼ばれるところ (fig. 3 の D) がある。^⑱ 極めて興味深く、調査の成果を踏まえて後述する。

e. 地割り

現在の六田地区に明確な地割りが残っており、北畠氏の時代のものと考えてほぼ間違いないだろう。fig. 3 には、想定される地割りを図示した。北畠氏館跡の対岸では、先述の六田館跡を南北に縦断するようにならぶ道を基本とし、六田館跡付近にこの基軸とは直行しない地割りを認めることができる。なお、これに類似した地割りは瀬古地区や上村地区および今回の調査区である土井沖地区にも認めることができる。土井沖地区的地割りについては、後述することとなろう。

以上のように、多気の内部には、北畠氏が入部した以降に形成されたと考えられる遺構をいくつか認めることができる。これらは当地が未だ大規模開発によって荒らされていない環境にあることと併せて、全国的に見ても貴重な都市遺構であることが指摘できるのである。

(註)

- ① 平成2年度美杉村教育委員会調査。
- ② この章を執筆するために、多気地区内を踏査している。踏査には小林秀・浜口元・竹田憲治・伊藤裕偉があたったが、現地確認のために田中隆三・鈴木喜三郎・辻村良和の各氏に御世話をした。記して感謝致したい。
- ③ 平成4年度北畠神社調査。
- ④ 斎藤拙堂著『伊勢国司記略』(天保12(1841)年刊行 三重県郷土資料刊行会 1976 p8)
- ⑤ 藤堂元甫著『三国地誌』宝暦13(1762)年など
- ⑥ 註(4) 文献p90
- ⑦ 大西源一『北畠氏の研究』(1960年刊行 松阪郷土史料刊行会 1982 p155)
- ⑧ 関西大学民俗学会「三重県一志郡美杉村上多気民俗調査報告」(『史泉』50 1975)
- ⑨ 藤岡謙二郎氏の指摘がある。(「中世において国司館の存在した歴史的都市の過去と現状—伊勢国多氣の場合—」「都市と交通路の歴史地理学的研究(増訂版)」大明堂 1973)
- ⑩ 地元の奥野友一氏の御教示による。

(参考文献)

美杉村役場編『美杉村史』上巻・下巻 (1981)

美杉村立多気小学校編『多気の地名』上・下 (平成3年度卒業生制作)



fig. 4 大蓮寺・平成2年度調査区周辺地形図（村道設置以前の状況）（1：1,500）

III. 調査の成果—層位と遺構—

1. 大蓮寺調査区

大蓮寺調査区は、今回の一連の調査区のなかで、最も西にあたる調査区である。現字名は「土井沖」であるが、旧字名では「大蓮寺」と「土井沖」に相当するものと思われる。また、調査結果によても大蓮寺跡に相当するものを確認することができため、この調査区を「大蓮寺調査区」と呼称する。なお、当調査区には縄文～弥生時代の遺跡である「土井沖遺跡」と、北畠氏との関連による中世遺跡とが存在しており、それぞれ別個の遺跡として報告する。

a. 立地と層位

大蓮寺調査区は、八手俣川と立川川の合流部分に相当する。現況は標高約331 mの水田である。この地域は大きくは多気の谷が成立時に形成された冲積地にあたるため、層位的にも自然堆積土が厚く認められ、いわゆる洪積層は認められなかった。

調査区の東端にあたる最も丘陵部寄りのところでは黄灰色系砂・礫層が認められ、調査区28ラインあたりからはその上部に淡褐色系土が堆積している。今回の調査区では、大部分がこの淡褐色系土を遺構の基盤土層としている。なお、調査区21～24ラインに見られる多くの円形土坑類の調査によって、淡褐色系土以下には砂質シルトおよび細砂層がこの順序で堆積していることが確認できた。

また、調査区9ラインから4ラインあたりにかけては黄色系砂・礫層が、4ライン以西は黄色系砂が遺構基盤土層となっている。9ライン以西の黄色系砂・礫層は、28ライン以東に見られた黄灰色系砂・礫層とは別の層と考えられる。

このように、この調査区付近は河川の浸食によって形成された堆積土によって形成されていることが指摘できる。

b. 土井沖遺跡の調査

北畠氏の関連と考えられる中世遺跡以前に相当するものとして「土井沖遺跡」が存在している。今

回の調査では縄文時代後期中葉および弥生時代中期後葉の遺構が確認された。

1). 縄文時代の遺構

縄文時代の遺構は、竪穴住居1棟・土坑1基がある。また、当該時期の浅い落ち込みも認められた。

竪穴住居SH117 竪穴住居SH117は調査区西端のe2グリット付近で検出した(fig. 7)。後世の開墾によってかなり削平されており、全体のプランは不明と言わざるを得ないが、検出当初の形態は隅丸の方形状を呈していた。しかし、その後の調査の進展によって、主柱穴および炉が見つかり、この形態はあくまでも削平された結果によるものであることが判明した。

住居跡内部の遺構としては、先述のように主柱穴と炉がある。主柱穴は4か所認められ、その並びはほぼ方形を呈している。炉は主柱穴に囲まれた部分のほぼ中央にある。石組や掘り込みは全く認められず地床炉と考えられる。なお、炉の上部に堆積していた埋土の上には数個の礫が認められ、そのうちのいくつかは被熱している。そのため、これらの石を当初は周囲に配置していた可能性も考えられる。

遺物は炉の周辺および主柱穴(e2pit4)から土器の破片が多く出土している。また、e2pit5からはサスカイト片も出土している。土器類では注口土器の類が多くある。これらの出土遺物は、縄文時代後期中葉のものと考えられる。

2). 弥生時代の遺構

弥生時代の遺構は、溝2条と落ち込み1基がある。

溝SD65 c19グリット付近で検出した。長さ約4.6m、幅約1.2mで、検出面から約0.1mを検出した。断面は皿状を呈する。方形周溝墓に伴う溝である可能性を考え、周囲を精査したがこの溝に対応するようなものは認められなかった。埋土中からは弥生時代中期中～後葉と思われる土器が出土しているが、小片のため、限定できない。

溝SD93 調査区中央やや西寄りのc12グリット

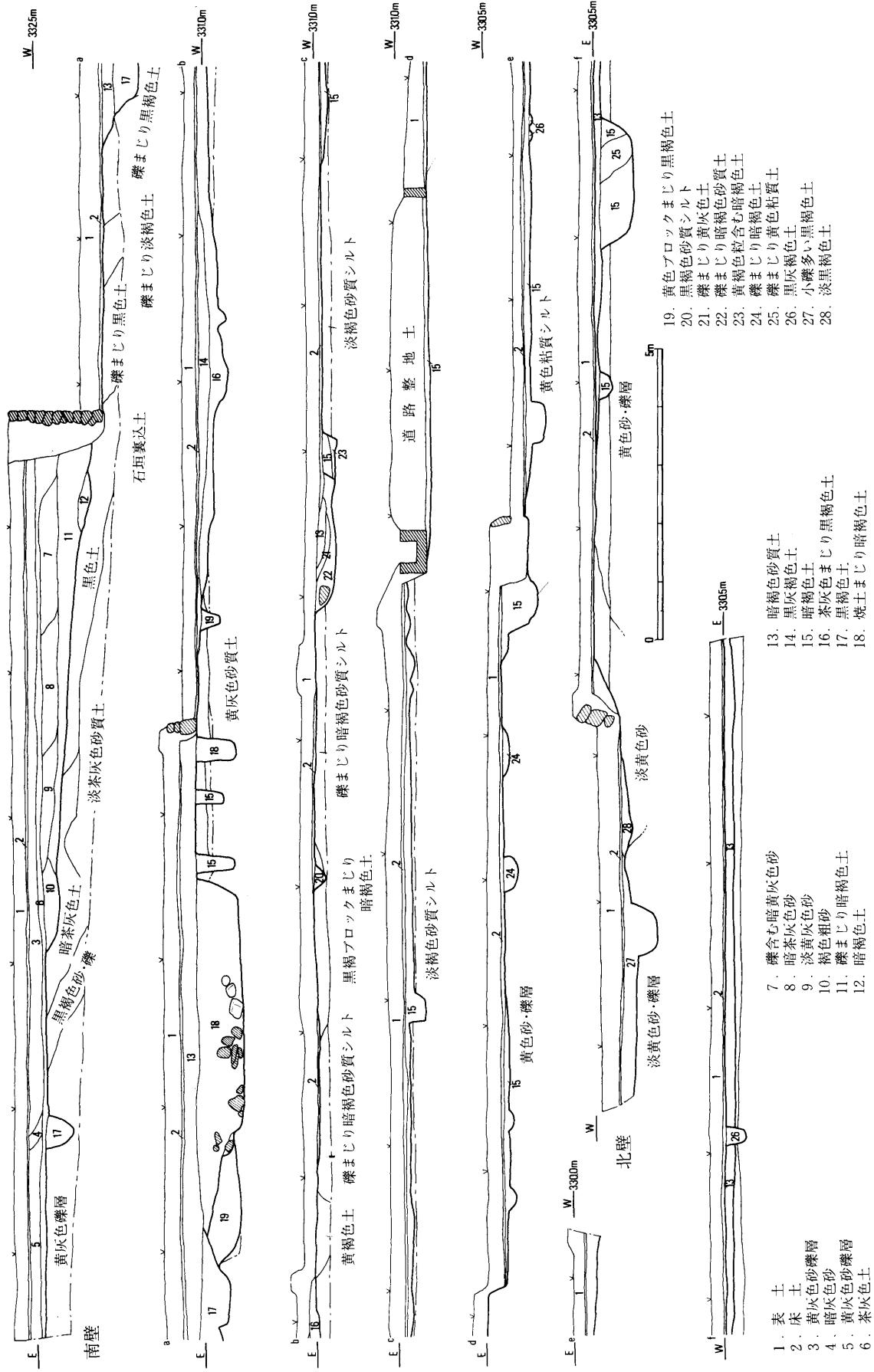


fig. 5 大蓮寺調査区土層断面図 (1 : 100)



fig. 6 大蓮寺調査区平面図 (1 : 200) 小数字はピット、大数字は土坑・建物等の構造

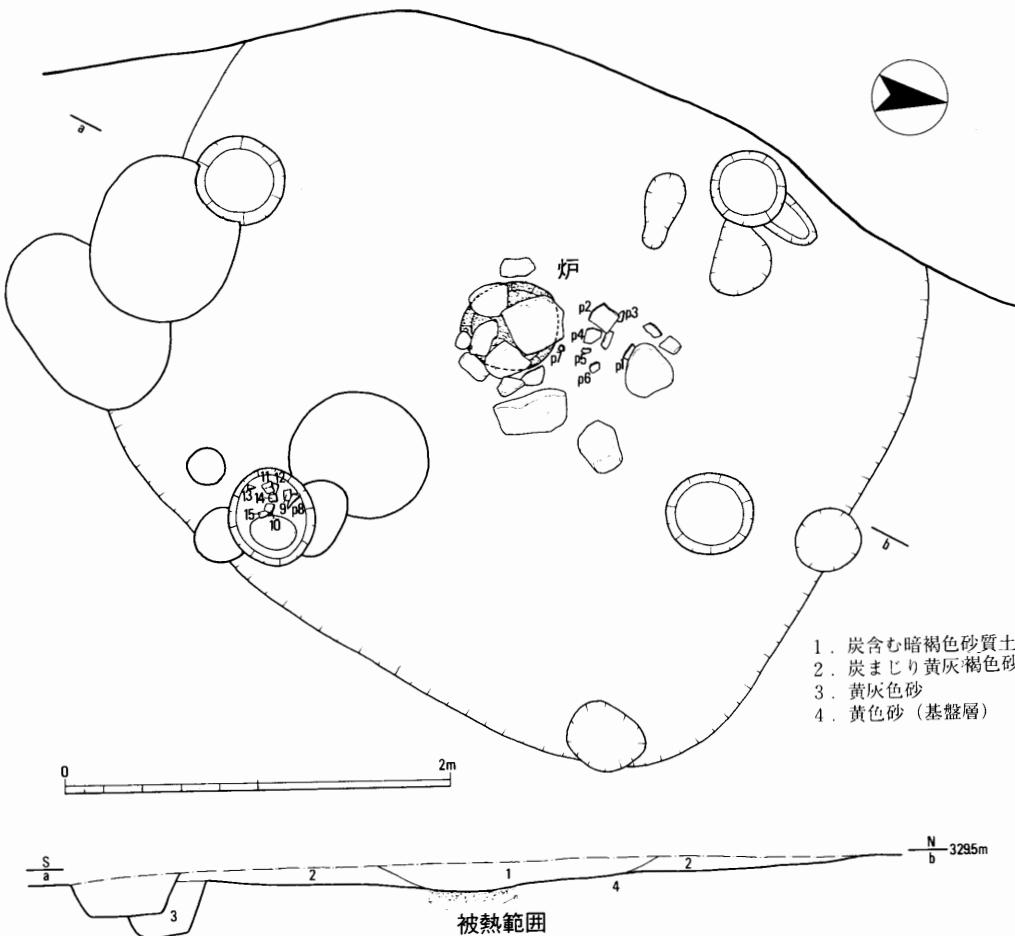


fig. 7 竪穴住居SH117平面・土層断面図（1:40）

付近で検出した。弧状を呈しており、竪穴住居の周溝が残存したものである可能性も考えられる。埋土中からは甕や壺などの土器類が若干出土した。弥生時代中期中葉と考えられる。

落ち込みSK72 調査区中央に近いe17グリットで検出した。やや不定形な方形を呈する。当初竪穴住居の可能性を考えたが、遺構肩が明確でなく、検出面から5cm内外で礫層に当たり、主柱穴や炉なども全く認められなかった。そのため、竪穴住居の可能性は低いと考えた。甕の良好な破片が出土している。弥生時代中期中葉と考えられる。

c. 大蓮寺跡関連遺跡の調査

北畠氏に関わる中世遺跡に含まれるものとして、大蓮寺跡およびそれに関わる遺構が認められた。これらは、大きくはおよそ14世紀末ないしは15世紀初頭から16世紀後半にかけてのものが認められるが、遺構としては13世紀後半頃のものも存在する。13世紀後半頃のものを除けば、具体的には、大蓮寺建立

時に営まれたと考えられる工房跡・大蓮寺跡・大蓮寺跡に関わる遺構、の3者がある。

1) 寺院に先行する遺構の調査

17ラインから26ラインにかけて認められる遺構群が、大蓮寺建立時の工房跡と考えられるものである。この部分は多数の円形土坑およびピットと2基の方石組遺構から成っている。

掘立柱建物

この部分からは、掘立柱建物7棟、柱列1列を確認することができた。しかし、現状では建物としてまとめる事のできないピットが多く存在しており、現実にはこの附近の建物跡が存在していたものと考えられる。なお、出土遺物は各建物の時期を特定できるようなものはなく、全体的におおよそ14世紀末～15世紀前半に相当するものである。

掘立柱建物SB196 (fig. 8) 東西5間・南北3間の東西棟の建物である。主軸方向はN78°Wである。桁行5間は約10.0m、梁間3間は6.65mであり、尺換算するとそれぞれ33尺・22尺となるよう

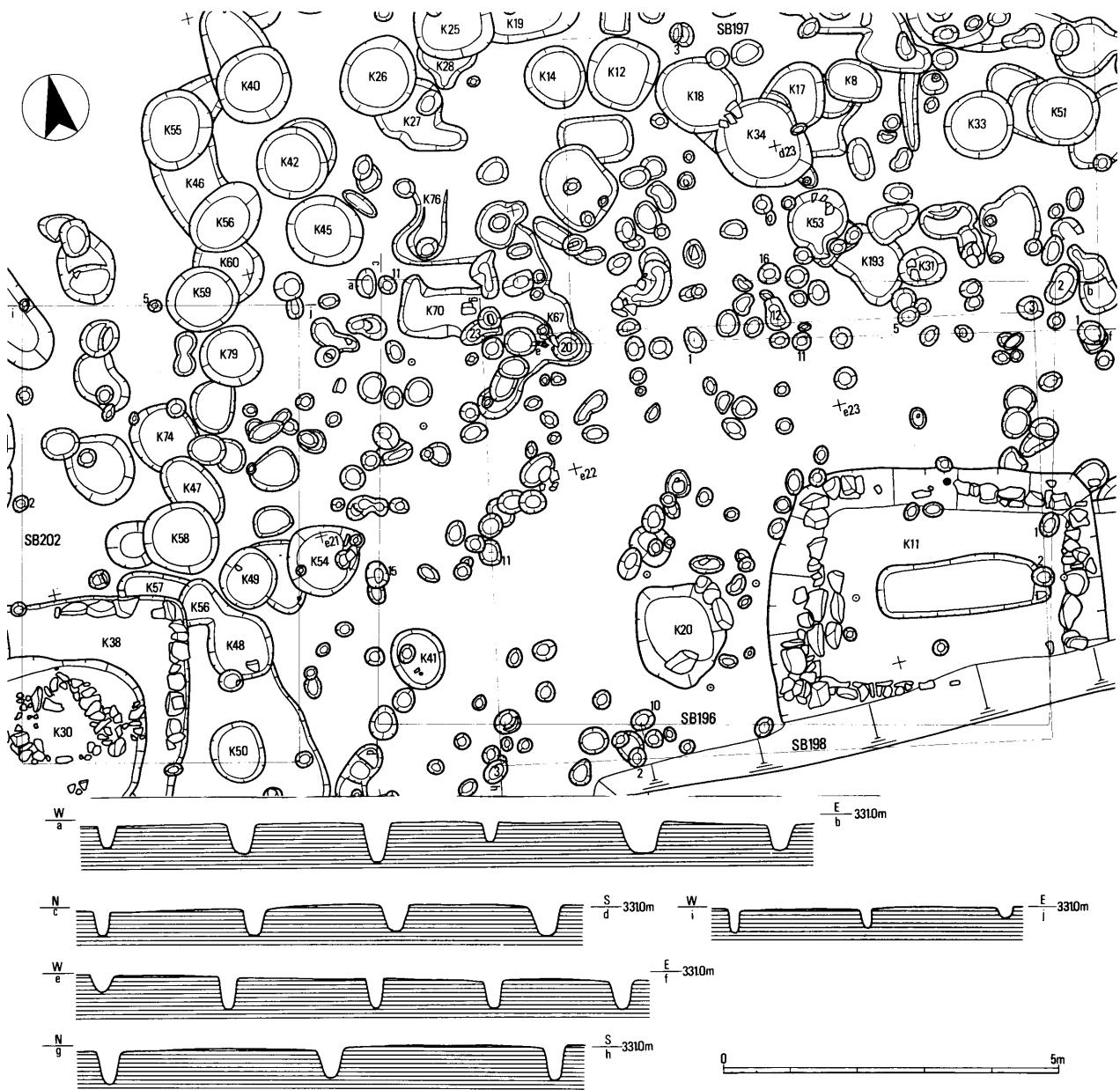


fig. 8 挖立柱建物 S B196~198・202 平面・断面図 (1 : 100) ※単独数字はピット番号。K□□はSK□□を表わす。

ある。石組遺構 SK11よりは後出する。

掘立柱建物 S B197 (fig. 8) 東西4間・南北2間の東西棟の建物である。主軸方向はN79°Wである。桁行4間は約7.90m、梁間2間は4.55mであり、尺換算するとそれぞれ26尺・15尺となるようである。

掘立柱建物 S B198 (fig. 8) 東西4間・南北2間の東西棟の建物である。主軸方向はN81°Wである。桁行4間は約8.20m、梁間2間は6.35mであり、尺換算するとそれぞれ27尺・21尺となるようである。石組遺構 SK11よりは後出する。

掘立柱建物 S B199 (fig. 9) 東西4間・南北

2間の東西棟の建物である。主軸方向はN80°Wである。桁行4間は約7.90m、梁間2間は4.55mであり、尺換算するとそれぞれ26尺・15尺となる。これは、掘立柱建物 S B197と同じ規模のものとなる。石組遺構 SK11よりは後出する。

掘立柱建物 S B200 (fig. 9) 東西3間・南北3間で、柱間の違いから東西棟の建物であると考えられる。主軸方向はN72°Wである。桁行3間は約6.05m、梁間3間は5.45mであり、尺換算するとそれぞれ20尺・18尺となるようである。この地区の掘立柱建物群中では、この建物のみが主軸方位が異なっている。

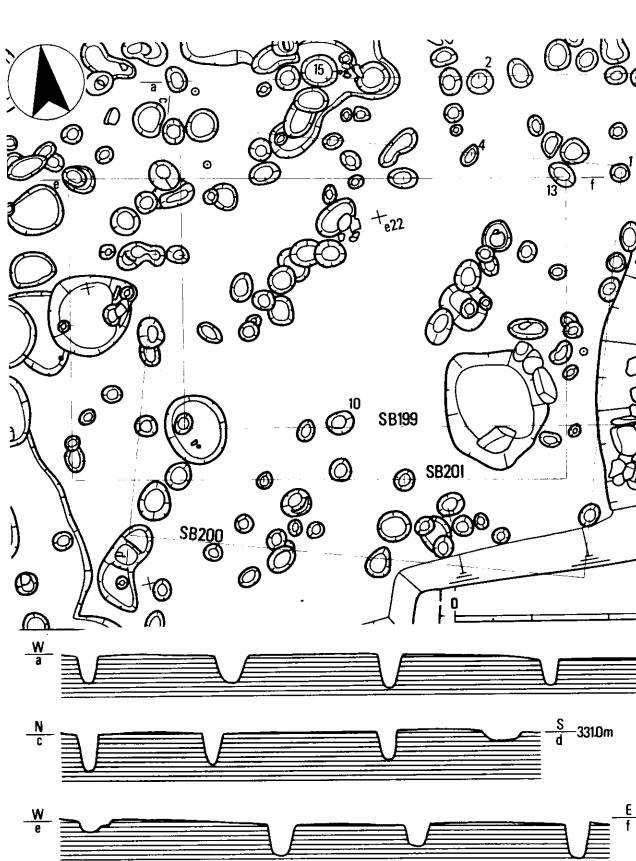


fig. 9 掘立柱建物SB199～201平面・断面図 (1 : 100) ※単独数字はピット

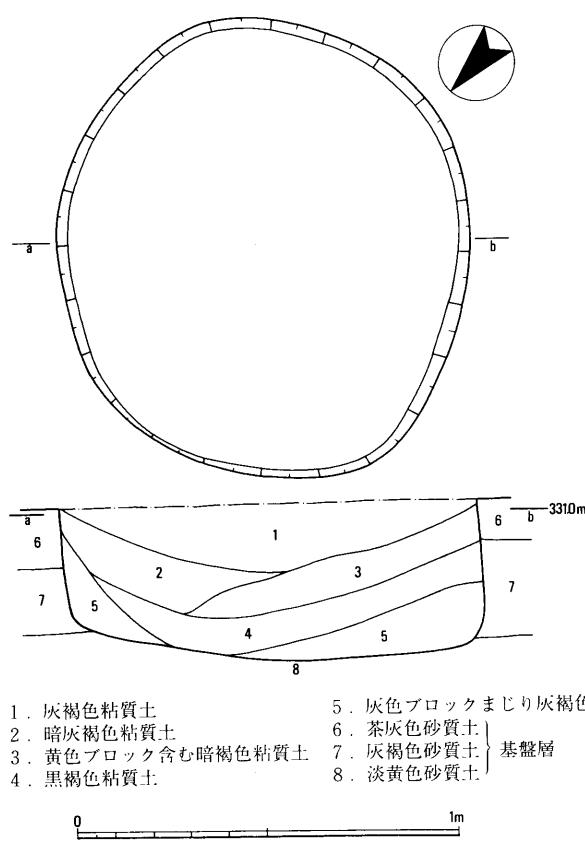


fig. 11 土坑SK1 平面・断面図 (1 : 20)

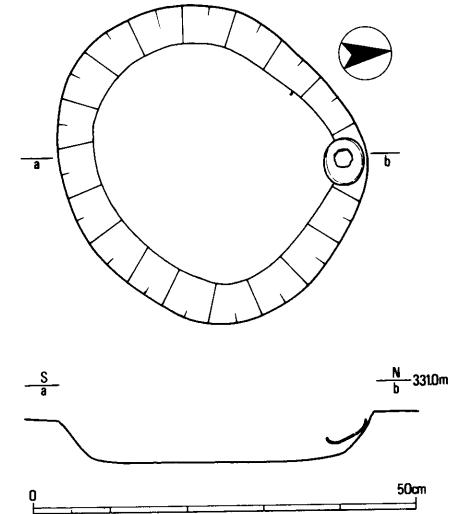


fig. 10 d21グリッドpit9銅製椀?出土状況
(1 : 10)

掘立柱建物SB201 (fig. 9) 東西3間・南北2間の東西棟の建物である。主軸方向はN79°Wである。桁行3間は約6.35m、梁間2間は3.95mであり、尺換算するとそれぞれ21尺・13尺となるようである。なお、南西・南東隅の柱穴は確認されず、図示したような形態をなさないものである可能性も高いであろう。

掘立柱建物SB202 (fig. 8) 東西2間・南北4間の南北棟の建物である。主軸方向はN12°Eである。桁行4間は約6.95m、梁間2間は4.25mであり、尺換算するとそれぞれ23尺・14尺となるようである。この建物のみ、西側に外れたところにあり、建物の占地から石組遺構SK38を取り込むものであることも考えられる。

柱列SA203 上記の一連の遺構群中から西に離れたところにある。軸方向はN71°Wで、掘立柱建物SB200とほぼ同一方向をなす唯一の遺構である。3間分約6.05mを確認した。尺換算すると、20尺となる。

ピット

この地区におけるピットは、焼土・炭を含むもの

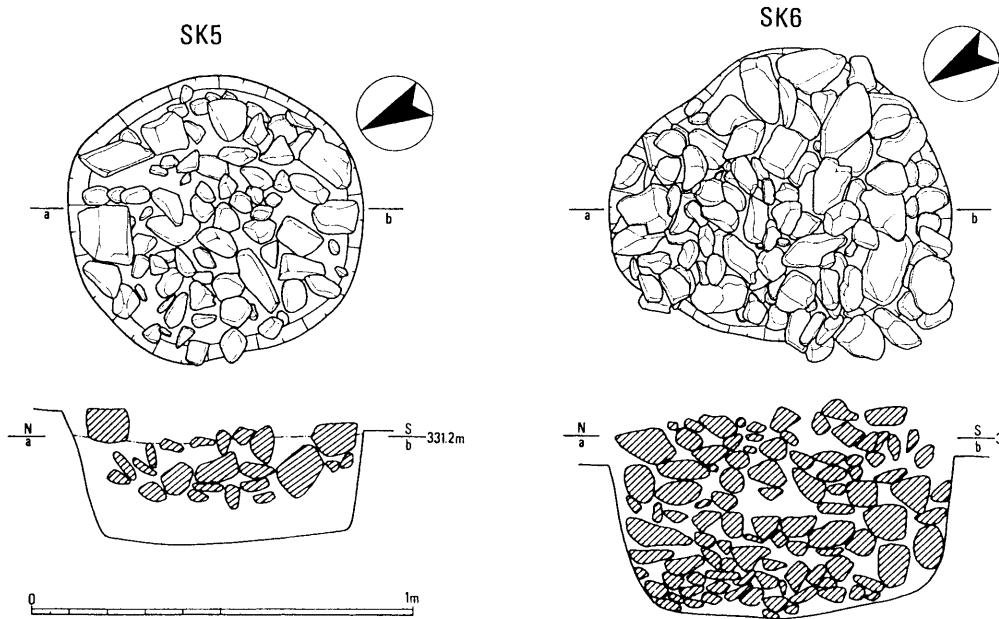


fig.12 集石土坑SK5・6 平面・断面図 (1:20)

が多く認められるのが特徴である。この特徴は、石組遺構SK11（後述）の特徴と類似する。

なお、d21pit9からは、銅製の椀状製品が出土している（fig. 10）。

円形土坑群

円形土坑群は19ラインから25ラインにかけて認められる。SZ9は不定形な形状を呈しているが、これはこの部分の基盤土層が黒色系土であり、遺構埋土と基盤層との識別が困難であったためである。本来は円形土坑が複数重なった状況であったものと考えられる。

円形土坑の直径は、小さいものでは0.8m程度、大きいものでは1.4mほどである。検出面からの深さは浅いもので0.2m、深いもので0.7mある。平面形はほぼ正円形で、ほぼ垂直に掘削がなされている。なかにはSK4・5のように上部に集石をもつものもある（fig. 12）。埋土はその大部分が掘削時に出土した土が入り込んでいるものと思われる（fig. 11）が、なかにはSK13のように炭・焼土が入っているものもある。埋土中にはあまり遺物が認められないのも特徴である。

これらの円形土坑群は調査区内では南向きに「コ」の字形を呈して群集していることが遺構図から読み取ることができる。すなわち、中央部に存在する掘

立柱建物の周囲を取り囲むように認められるのである。土坑内にほとんど遺物を含まないことや建物の周囲に群集していることから、工房に関連する「ゴミ穴」のようなものではないかと考えられる。

このような円形土坑群が建物周囲をとりまいているような状態の遺構は、これまでにも例がなく、当該遺構群が一般住居跡とは異なっていることを示すものであると理解するべきであろう。当遺構群を工房跡とする理由のひとつである。

方形石組遺構

方形石組遺構はこの部分に2基存在している。

石組遺構SK11 (fig. 13) 工房跡中央やや東寄りのe23グリット付近に位置する。遺構掘形の南東隅および南辺は調査区外である。遺構掘形は、東西約5m、南北約4mの長方形を呈し、その中に内法で東西約3.6m、南北約2.7mの石組を構築している。これは、東西12尺、南北9尺の設定で構築されたものと考えられる。なお、西壁の前には3個の平石を配置している。石段であろうか。石組はほぼ垂直に構築されており、南西隅では3段分が残存している。

土層断面に見られるように、石組内には多数の礫が投棄されていた。これは廃絶時に石組部分を破壊して投棄したものと考えられる。調査区土層断面

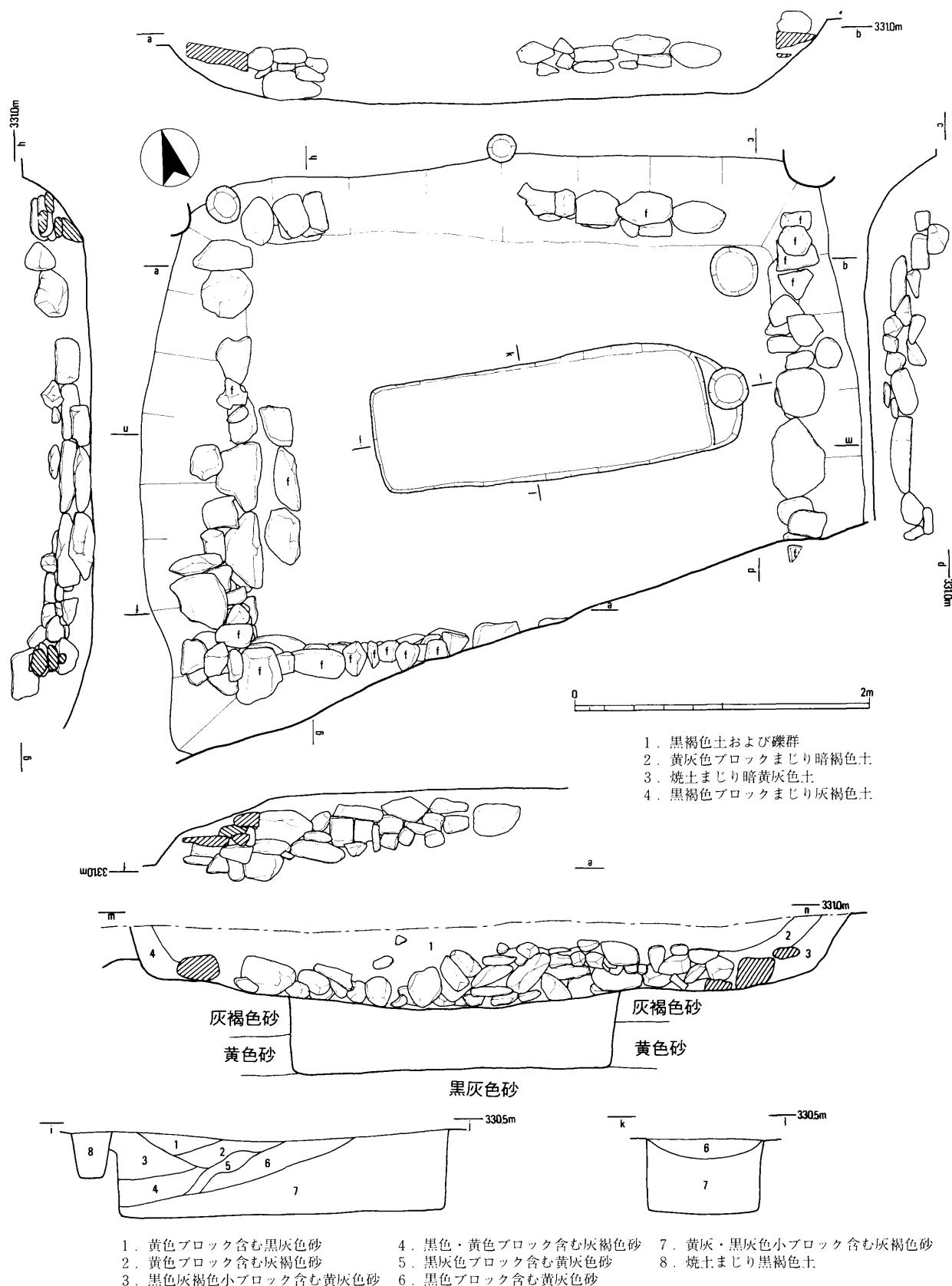


fig. 13 石組遺構 SK 11関係実測図 (1 : 40)

(fig. 5) に見られるように、この遺構の掘形は最大0.8m存在しており、当初は深さ0.8mほどの石組が存在していたものと考えられる。

石組にはいくつかの石に火を受けた痕跡が認められる (fig. 13 の「f」と記した石)。これらには単

に煤を受けたものの他、かなり強い熱を受けて表面が崩壊しているものも認められる。また、遺構埋土中には炭・焼土などが多く含まれていた。これらのことから、この遺構が「火」を用いた行為に伴って使用されるものではないかと考えられる。

遺構底面には長方形の土坑が存在している。南北約2.3m、東西約0.8m、深さ約0.5mである。遺構埋土からはこの土坑掘削からさほど時間を経ない段階で埋め戻されているものと思われる。遺構掘形がほぼ垂直であることや埋土の状況から、埋葬施設の可能性を考えたが、出土遺物は全くなく、それを積極的に裏付ける根拠はない。なお、この遺構上面には先述の投棄礫が堆積しており、少なくとも SK11 の廃絶時以降のものではないことがいえる。

石組遺構 SK11 の出土遺物は土師器鍋・羽釜・皿類の他、瀬戸産の平椀がある。鍋では15世紀中葉頃に相当するものがあり、この遺構の廃絶時期がその頃であることを示している。

石組遺構 SK38 (fig. 14) 工房跡西端の e 20 グリット付近に位置する。西壁および南壁は土坑 SK30 によって破壊されており、全貌を窺うことはできないが、北壁の西端では遺構掘形の屈曲が確認され、

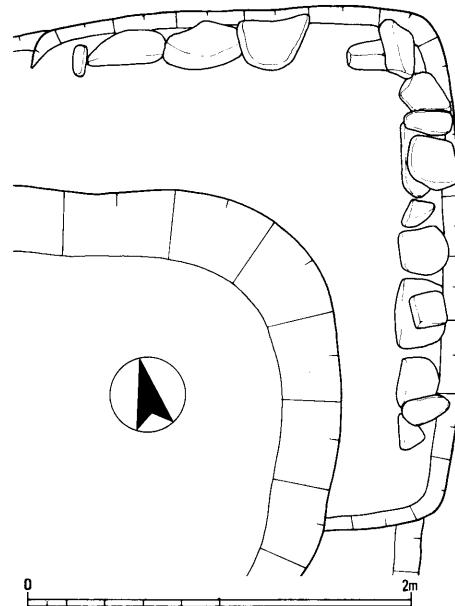


fig. 14 石組遺構 SK38 平面図 (1 : 40)

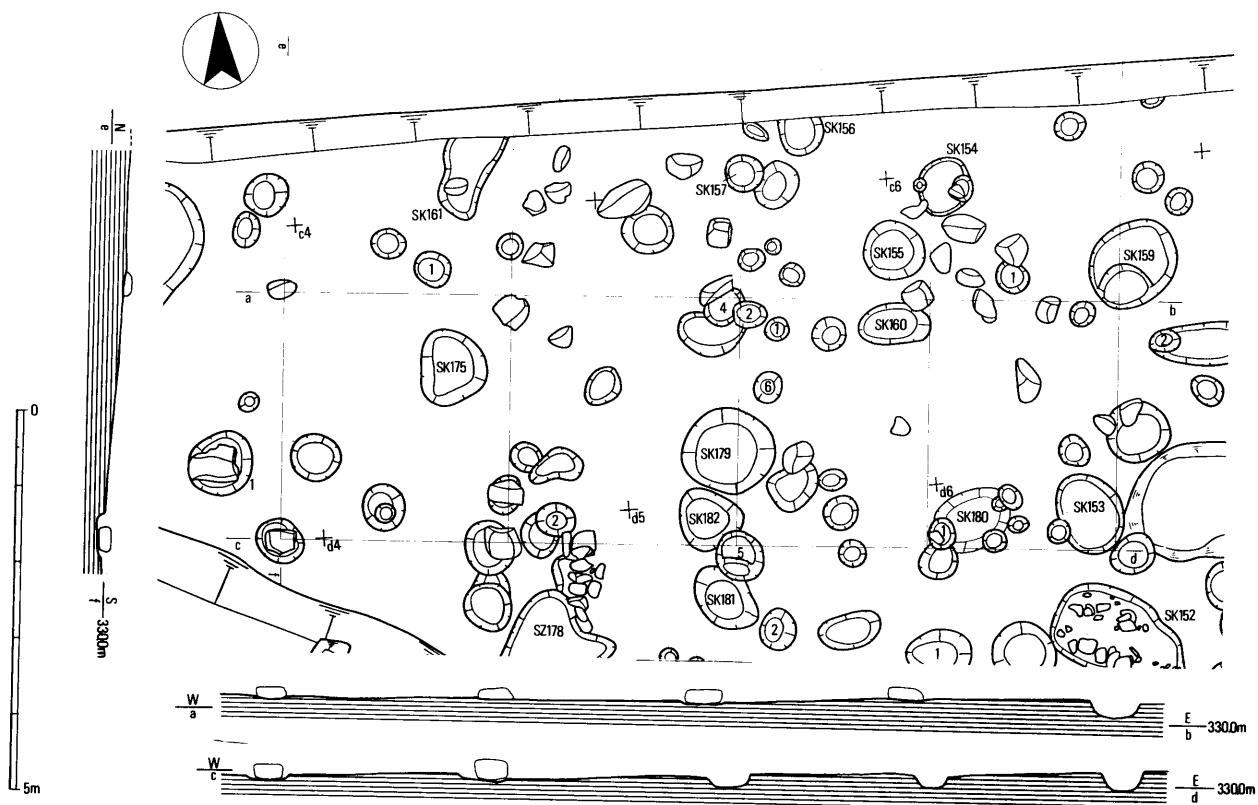


fig. 15 基石建物 SB204 平面・断面図 (1 : 100)

掘形は東西約2.3m、石組は内法で東西約1.6mである。なお、南北は石組では約1.9mが残存しているが、本来はこれよりせいぜい0.2mばかり大きい程度であろう。

出土遺物は少なく、明確な時期は不明であるが、この工房跡の時期内に収まるものであると考えて大過ない。なお、この遺構は掘立柱建物の内部に取り込まれたものと考えることもできるが、それについては明らかにすることことができなかった。

その他の遺構

土坑SK20 石組遺構SK11の西側に位置する。直径約1.3mの歪んだ円形を呈し、深さは約0.5mである。周囲に大石を配置しているが、その意味は不明である。出土遺物には土師器鍋・小皿・皿や山茶椀がある。

土坑SK30 先述のように石組遺構SK38を破壊して作成されているもので、直径約4mの円形を呈する。検出時には井戸かと思われたが、深さ約0.7mの浅いものであるためその可能性はない。内部に集石が認められるが、人為的なものではない。出土遺物には土師器鍋・羽釜・皿、瀬戸産壺の他、砥石などがある。

なお、d17グリット付近にもこの遺構と同様なものがある。埋土の状況はほぼ同じであるが、この遺構からの出土遺物は全くなかった。

土坑SK71 先述の土坑SK30に切られている。東西約1.1mで、南北に長い長方形を呈する。今回の調査区のなかでは唯一13世紀後半頃の遺構である。出土遺物には土師器鍋がある。

2) 寺院跡周辺の調査

調査区内における大蓮寺跡の範囲については、いくつかの視点によって若干異なってくる。その視点とは、①大蓮寺跡の遺構と特定できるものがある範囲、②寺跡にふさわしい遺物が出土している範囲、③瓦の出土が見られる範囲、のほかに、④先述の工房跡の時期以降の遺構が認められる範囲、が挙げられる。①については現状では礎石建物SB204の1棟のみであり、かなり限定されてしまう。②は、その判断がむつかしいが、墨書き土器や硯などの遺物はある程度寺院に関わるものと判断する材料となろう。③では3ラインから15ラインにかけての範囲となる。

④では2ラインから15ラインにかけての範囲があてはまる。

また、大蓮寺を構成していたと考えられる礎石建物SB204は、それ以外の建物・石組土坑とは明らかに主軸方位が異なっている。また、②～④の範囲は、厳密には大蓮寺の機能消失以降であることも考えられる。これらの点からは、①に示した要素こそが厳密な大蓮寺跡の範囲であるといえる。しかし、当報告書では、便宜的にこれらの要素全てが認められる範囲を「大蓮寺跡周辺遺跡」と仮称して記述することとする。

建物

建物には「礎石建物」と「掘立柱建物」の2種類があり、それぞれ別に記述する。

礎石建物

礎石建物は1棟ある。礎石を用いていることから、大蓮寺の一部を直接構成していた建物と見てよいであろう。

礎石建物SB204 (fig.15) c4～c7グリットにかけて認められるものである。東西は4間で、南北は調査区外に至るが1間分を確認した。したがって、南北棟なのか東西棟なのかはわからない。南北棟とすれば、建物の方向はN 4° Eである。

東西は約10.9mあり、尺換算するとおおよそ36尺となる。柱間は、西から10尺・10尺・8尺・8尺の設定であると考えられる。南北方向は、11尺で設定されているようである。

この建物の礎石のなかで、明らかに据えられた状況が確認できたのは南側柱列の西の2箇所のみであり、それ以外は若干移動しているものや抜取られているものがある。

礎石建物SB204の時期は、先述の工房跡との絡みでいえば15世紀半ば以降と考えられる。ピットからは16世紀後半の遺物が出土しているが、これは廃絶時点を表すものと見なすべきであろう。なお、この建物の上部埋土からは、瀬戸大窯Ⅰ期～Ⅱ期の遺物が多く出土しており、間接的にその機能時期を示していると考えることもできる。

掘立柱建物

掘立柱建物は5棟確認できた。いずれも根石を持たないものである。これらの掘立柱建物は、礎石建

物SB204の東側の同一箇所に集中しており、継続的に建て替えられたものと考えることができる。また、礎石建物SB204とは方向が一致しないものの、石組遺構SK101・102やSK185・186などの方向とは一致している。

なお、これらの掘立柱建物の柱穴は、それぞれの直径が50cmを越えるものが大部分で、当該時期の柱穴としては大きく感じられる。しかし、この部分の基盤層が礫を多く含んだ砂層であることと、それぞれの建物規模が決して大きくなかったことを考えれば、このような土壌条件によって大きくならざるを得なかつたものとも考えられる。

掘立柱建物SB205 (fig.16) 東西2間・南北3間の南北棟の建物である。主軸方向はN16°Eである。桁行3間は約6.95mであり、尺換算すると北から7尺・9尺・7尺の23尺となるようである。梁間2間は5.15mで、同様に東から7尺・10尺の17尺

となるようである。

なお、この建物の東柱列の外側には石列SZ195がある。後述のようにこの石列は一定の区画を構成しているものと考えられるため、当建物はその外側に存在するものであると考えられる。

掘立柱建物SB205の柱穴からは、土師器類ではV章でいうIV期のものがある。したがって、16世紀初頭前後の機能を考えることができる。

掘立柱建物SB206 (fig.17) 東西2間・南北2間の南北棟の建物である。主軸方向はN16°Eである。桁行2間は約5.45mであり、尺換算すると北から9尺・9尺の18尺となるようである。梁間2間は4.55mで、同様に東から8尺・7尺の15尺となるようである。

掘立柱建物SB206の柱穴からは、土師器類ではV章でいうIV～V期のものを含む。したがって、16世紀前葉前後の機能を考えることができる。なお、

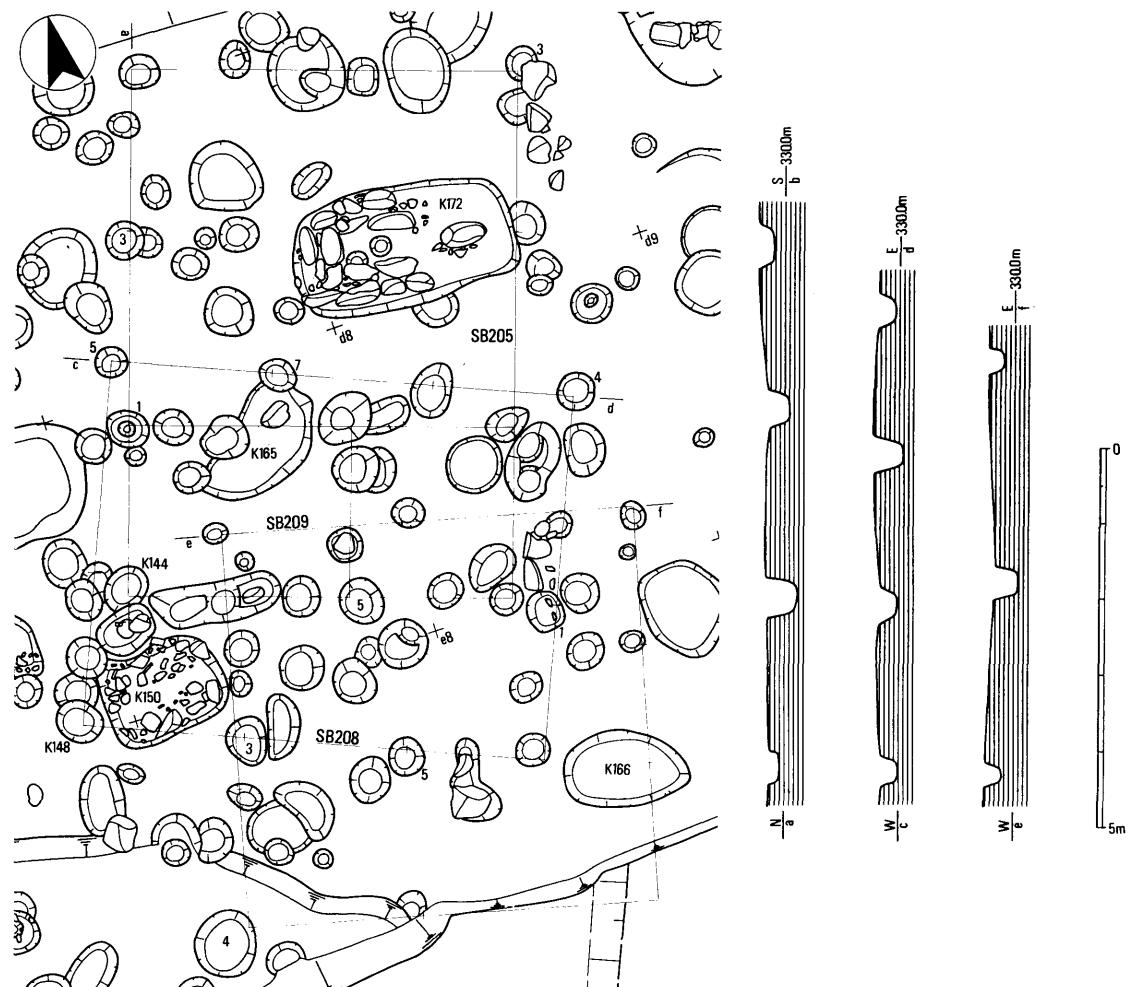


fig.16 掘立柱建物SB205・208・209 平面・断面図 (1 : 100)

d7pit2からは大形の巻き貝が出土している。その意味は不明だが興味深いものがある。

掘立柱建物 S B 207 (fig.17) 東西3間・南北2間の東西棟の身舎に、南側に1間分の庇を持つ建物である。主軸方向はN76° Wである。桁行3間は約6.35mであり、尺換算すると東から6尺・9尺・6尺の21尺となるようである。梁間2間は3.65mで、同様に北から6尺・6尺の12尺となるようである。庇部分は南側に約3尺分張り出す形態で、柱間は身舎のそれと揃わない。

掘立柱建物 S B 207 の柱穴からは、土師器類では第V章でいうⅢ期のものを含む。したがって、15世紀末～16世紀初頭前後あたりの時期と思われる。

掘立柱建物 S B 208 (fig.16) 東西3間・南北2間の東西棟の建物である。主軸方向はN20° Eである。桁行3間は約6.05mであり、尺換算すると東から6尺・7尺・7尺の20尺となるようである。梁間2間は4.85mで、同様に北から10尺・6尺の16尺となるようである。

掘立柱建物 S B 208 の柱穴からは、土師器類では

第V章でいうⅣ期のものを含む。したがって、16世紀前半頃の時期のものと考えられる。

掘立柱建物 S B 209 (fig. 16) 東西2間・南北3間の建物であるが、東西5.45m・南北5.15mであり、柱間の少ない東西方向の方が長い。実際に長い東西方向が棟方向であると考えると、主軸方向はN79° Wとなる。東西方向は18尺、南北方向は17尺となるようである。

掘立柱建物 S B 209 の柱穴からは、良好な遺物が出土しておらず、時期は不明である。しかし、この付近の掘立柱建物と同じような時期に建築されたものと考えるのが妥当であろう。

柱列

柱列は3列ある。これらは建物跡である可能性が大きいものと、そうでないものとがある。

柱列 S A 210 (fig.17) e5～e7グリットにかけて認められるものである。主軸方向はN83° Wで、2間分を確認した。出土遺物がないため明確な時期は分からぬが、先述の掘立柱建物の方向とほぼ合致するため、おおよそ16世紀前半前後の時期と考えて

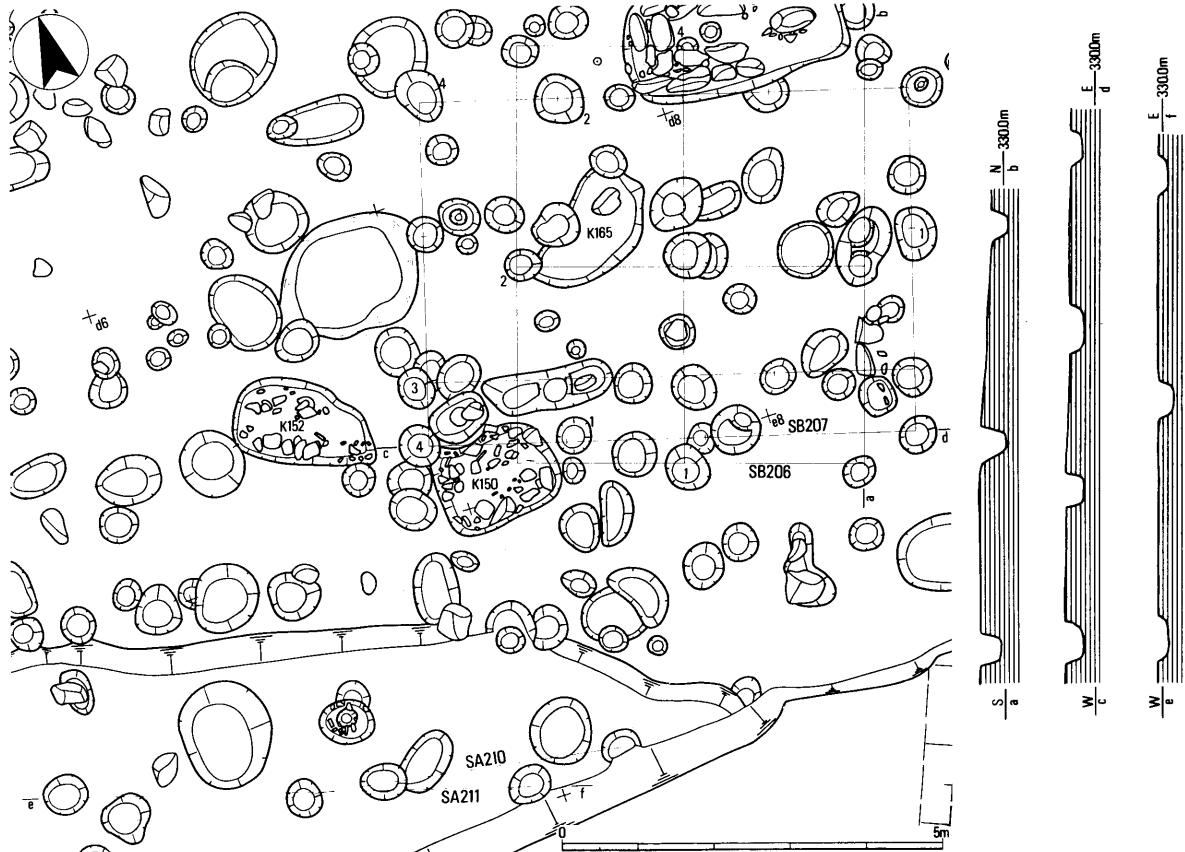


fig.17 掘立柱建物 S B 206・207、柱列 S A 210・211 平面・断面図 (1 : 100)

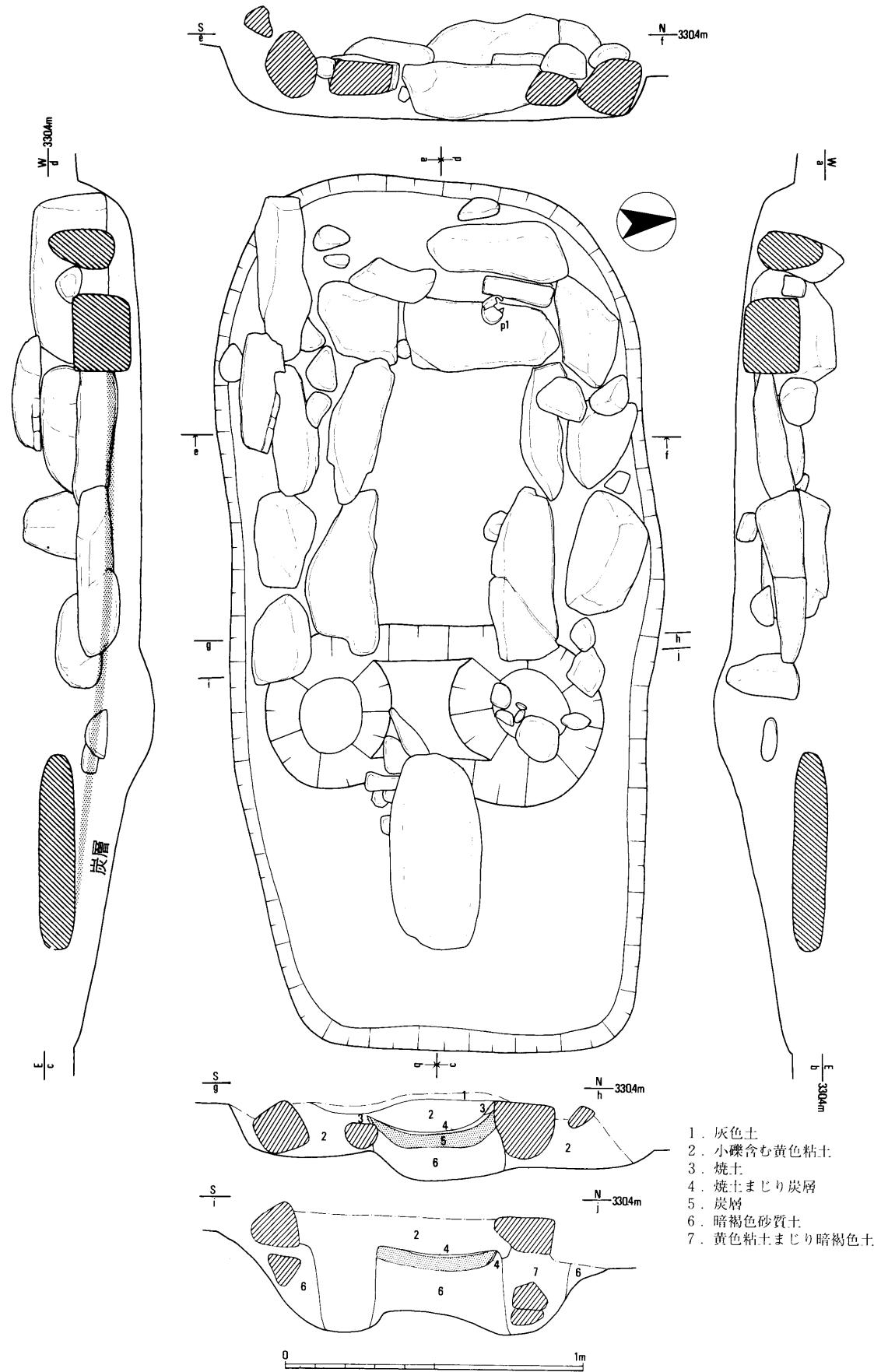


fig.18 窟状石組 S K172 平面・立面・土層断面図 (1 : 20)

よいであろう。

柱列 S A211 (fig.17) e5～e7グリットにかけて認められるもので、柱列 S A210とほぼ同じ場所にある。主軸方向はN76° Wで、掘立柱建物 S B207と同一方向である。2間分を確認した。出土遺物がないため明確な時期は分からぬが、おおよそ16世紀前半前後の時期と考えて大過なかろう。

柱列 S A212 c3～c7グリットにかけて認められる長大なものである。主軸方向はN84° Wで、5間分を確認した。出土遺物がないため明確な時期は分からぬが、礎石建物 S B204と重なっていること、そして竈状遺構 S K172（後述）の方向と合致することから、礎石建物 S B204廃絶後の16世紀後半代と考えられる。

石組遺構

石組遺構は合計7基確認された。内訳は、竈と考えられるもの1基、方形を呈するもの1基、古墳時代の横穴式石室状を呈するもの3基、階段状のもの1基である。

竈状石組 S K172 (fig. 18) c 8 グリット付近に位置する。東西約3m、南北約1.5mの長方形の掘形で、内部西寄りに二重の石組が構築されている。石組は、内側のものは平たく据えられ、外側のものは立てられている。

石組は東側にむかって当初から開口しており、その東端では双方2か所にピット状の窪みが存在している。また、この開口部に対するよう、東側には橢円形の平石が据えられていた。内側の石組内からこの平石の下にかけて厚さ4cmほどの炭層がある。この炭層は石組内ではこの上部に一部焼土があり全面に存在しているものの、開口部以東では不明瞭となっている。

上述の炭層の上には黄色粘土があり、石組全体を覆っていた。また、この粘土は土層断面にみられるように、石組東端のピット状の窪みにも詰め込まれている状況が確認された。

これらのことから、この遺構は石組を内部に持ちその上を粘土で覆った竈ではないかと考えられる。しかし、竈とするには若干の疑問点もある。特に、石組内面に認められた炭層上の粘土が決して良く焼けているわけではない点である。竈であるならば、

熱をまともに受けるに違いないこの石組内面の粘土はある程度焼き締められている必要があるにもかかわらず、この遺構ではそのような状況は確認できなかつた。あるいはこれは、竈としての使用時間がかなり短かったためかも知れない。このようなことから、この遺構については「竈」と断定せず、今後の事例を待って考えることとした。

出土遺物には、黄色粘土内に埋め込まれた状態で土師器の皿が出土したのみである (fig. 18のp1)。時期的には16世紀中頃と考えられる。

石組遺構 S K185・186 (fig.19) d 9 グリット付近に位置する。当初は別々の遺構と考えたのであるが、調査の進展によってこの2基の遺構は意図的に組合せられているものであることが判明した。しかし、記述の都合上、南側を S K185、北側を S K186としておく。遺構の南北長は約6.1mである。なお、この遺構の東側掘形は後世の搅乱によって乱されている。

S K185は内部に方形の石組を持つ。石組の内法は南北2.6m、東西1.3mである。東側は後世の搅乱のため、若干崩れている。石組は大・小の石を取り混ぜて比較的ランダムに積み上げているが、内側は面を揃えようとする意識があるようである。埋土には焼土や炭を多く含んでいた。

S K186は東側および西側辺の一部と南側に石組を持つ。ただし、東側および西側の石組は部分的に土坑上部にしか認められないものである。埋土には焼土・炭を多く含んでいた。

S K185・186の境目に当たる部分は、断面図に見られるように遺構の掘り込みがなされず、石を組んでいる。このことによって2基を遮断するとともに2基で一定の機能を果たそうとする意識があるものと思われるるのである。

出土遺物には土師器鍋・皿や青磁・瀬戸産陶器がある。時期的には16世紀の後半と思われ、鍋の形態からは当該調査区内でも最も新しい遺物（IV期）を含む遺構であると考えられる。

石組遺構 S K99 (fig. 20) 大蓮寺跡周辺のなかでも最も東端にあたる e 15 グリットに位置する。遺構の南端は調査区外である。東側と西側に石組が認められる。恐らく、後述するような S K101・102の

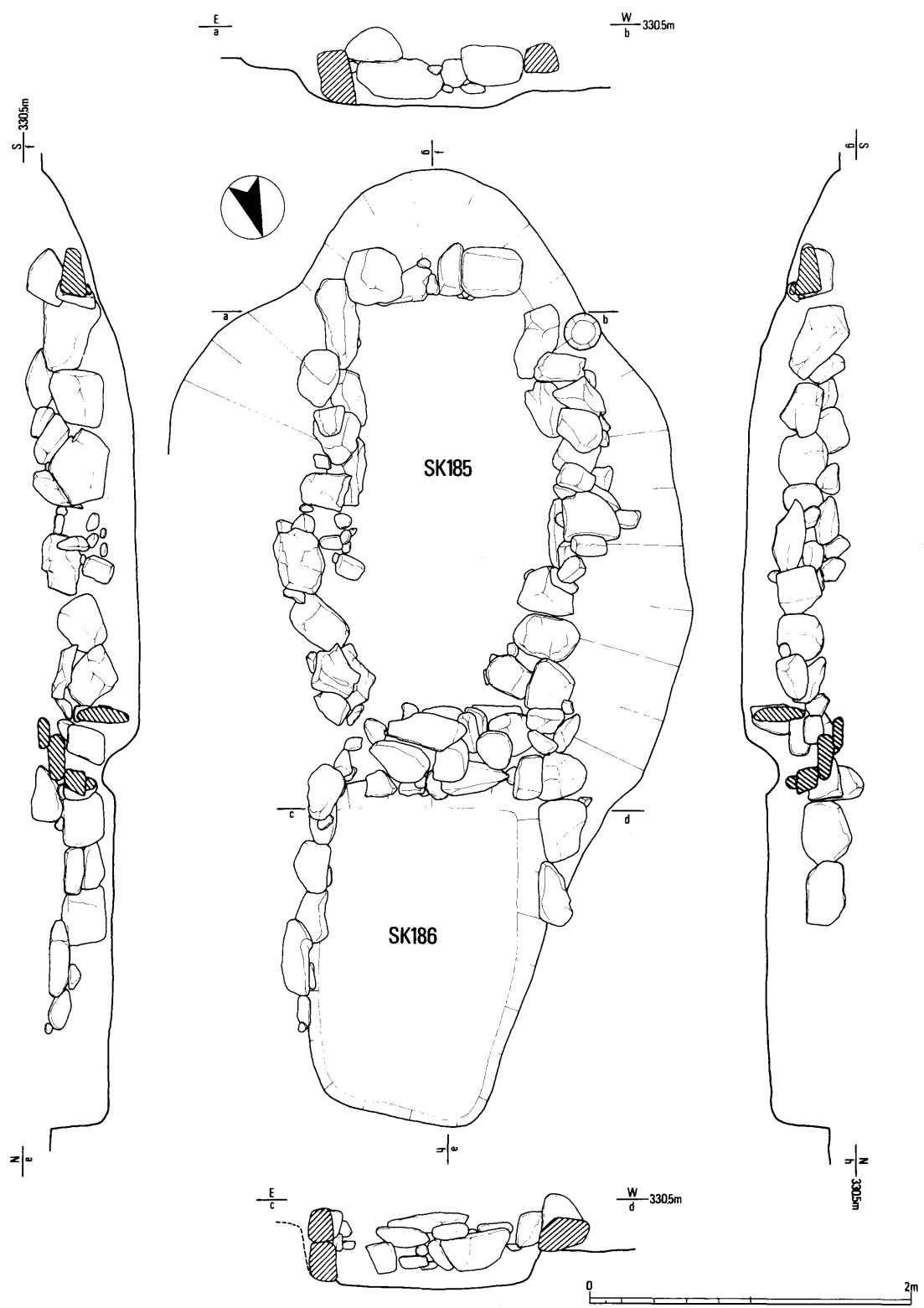


fig.19 石組遺構 SK185・186 平面・立面図 (1:40)

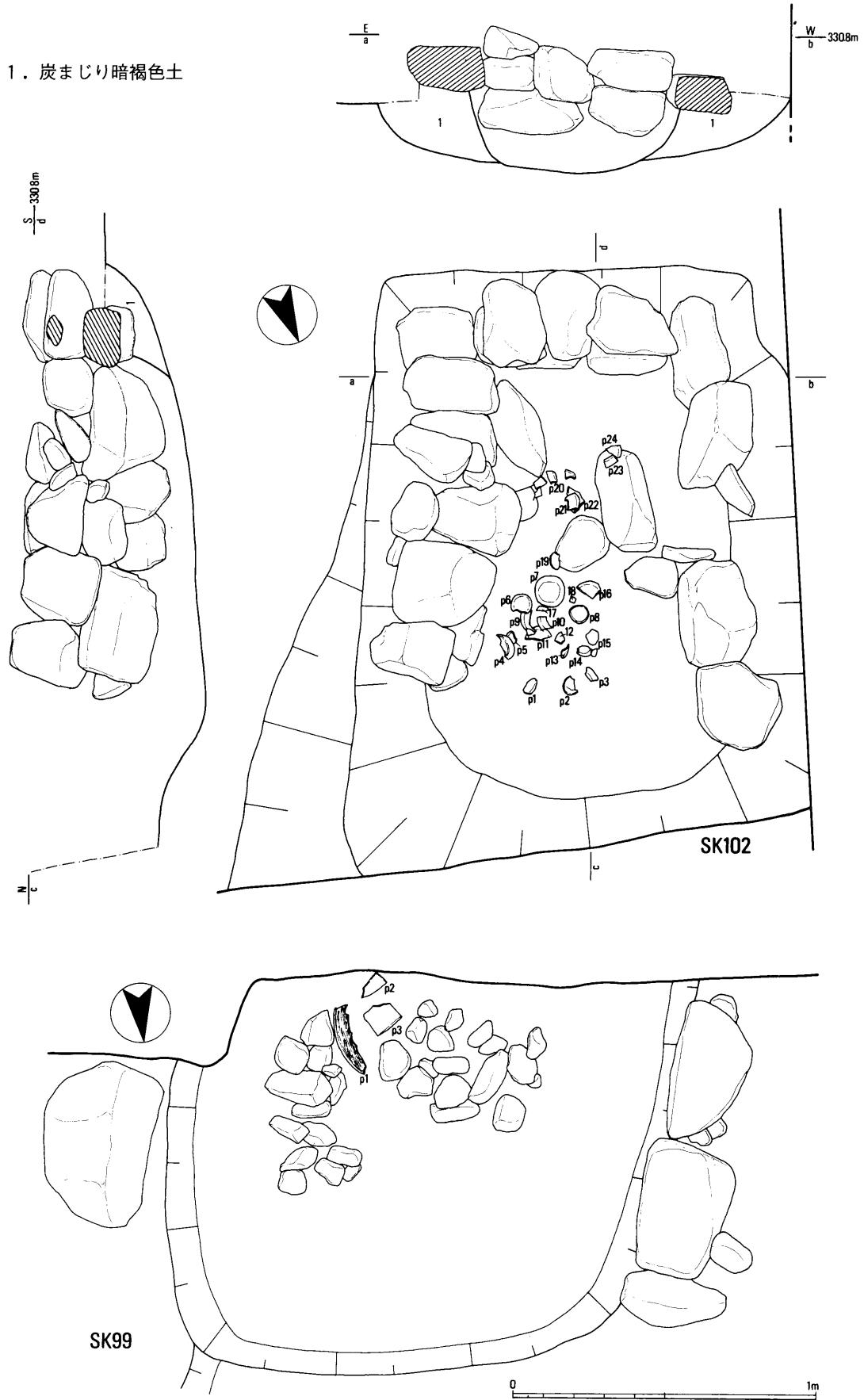


fig. 20 石組遺構 S K 102・S K 99 平面・立面図 (1 : 20)

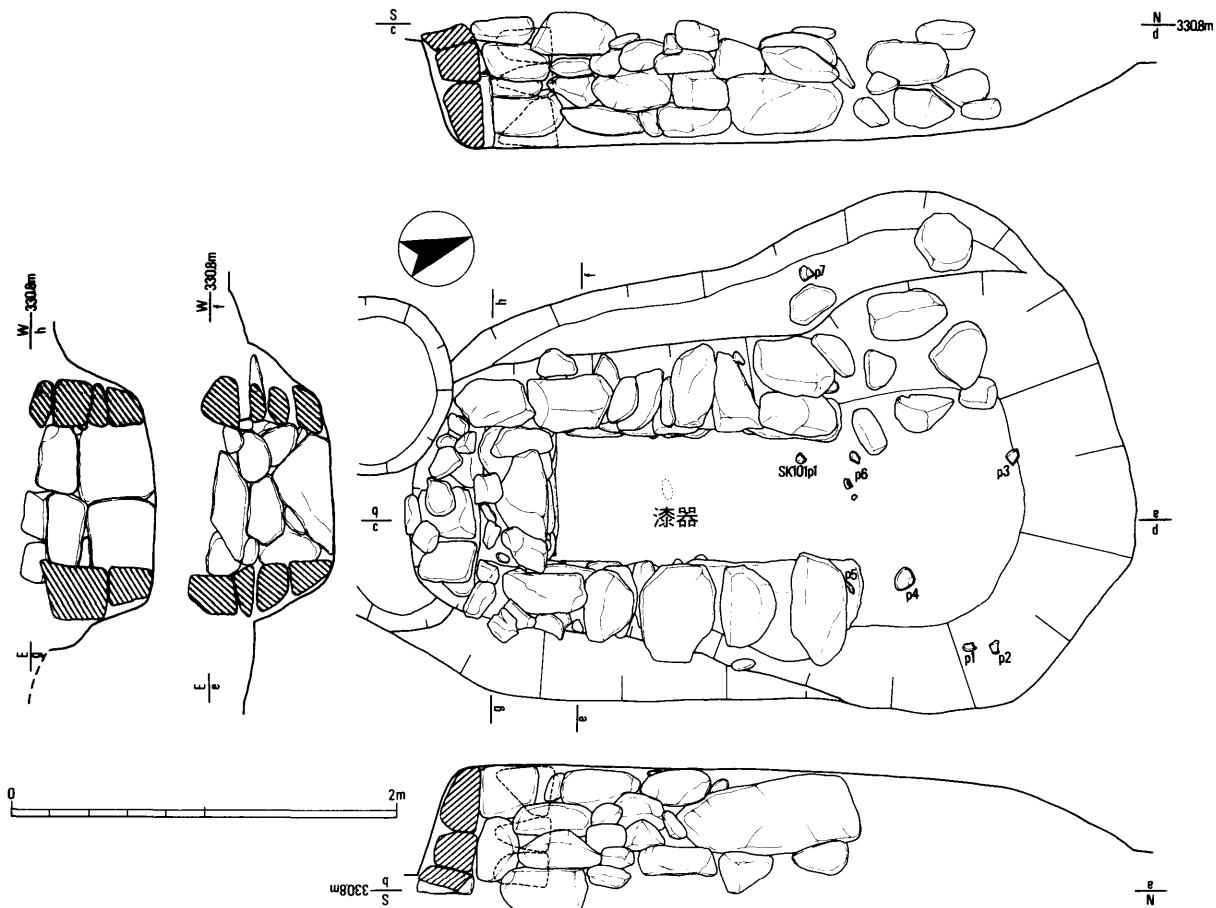


fig.21 石組遺構SK 101平面・立面図(1:40) ※P1~P8は上層(SK87)の遺物。

のような形態を呈するものと考えられる。出土遺物には土師器鍋のほか、瓦がある。時期的には16世紀中頃と考えられる。

石組遺構SK 101 (fig.21) 調査区中央やや西寄りのc13グリット付近に位置する。南北約3.8m、東西1.4~2.4mの掘形内に、北側に向かって開口する石組が構築されている。その形態は古墳時代後期の横穴式石室を彷彿とさせる。石組は開口する北側の東西両端の最下段に大石を用い、他は30~40cm内外の川原石を小口積みに積み上げている。石の積み上げは奥壁側から行っており、側壁は奥壁を挟み込むようにして構築されている。なお、奥壁には大石を用いていないのも特徴である。

なお、奥壁は当初の構築からほとんど時間を経ない段階で、そのさらに内側に改めて作り直している状況が確認された。作り直しは、三角形の大石を底に据えた後、小口積みにしている。奥壁再構築の意味については不明である。石室状部分の内法は幅約

78cm、長さは1次奥壁からでは約2.0m、2次奥壁からでは1.6mである。

遺構埋土は、下部には石室状部に用いていた石が投棄されており、その上部には焼土と炭が混じった層が堆積していた。上層に相当する焼土・炭層は、調査の時点では「SK87」として遺物の取上げを行っている。出土遺物には土師器皿類を中心に、瀬戸産陶器類や漆器片がある。遺構掘形相当部分からも土師器皿類や瀬戸産擂鉢が出土しており、遺構の構築時期が16世紀前半以降であることを示している。

なお、SK 101の東肩部分は石列S Z 88（後述）によって覆われておらず、前者が後者に先行する時期であることを示している。

石組遺構SK 102 (fig.20) SK 101の北西、b 11グリットに位置する。形態的には先述のSK 101と同様であるが、石組の最下段は土によって構成されており、立面図では石組が浮いたような状態でみえている。西壁は近年の排水溝の構築によって崩れ

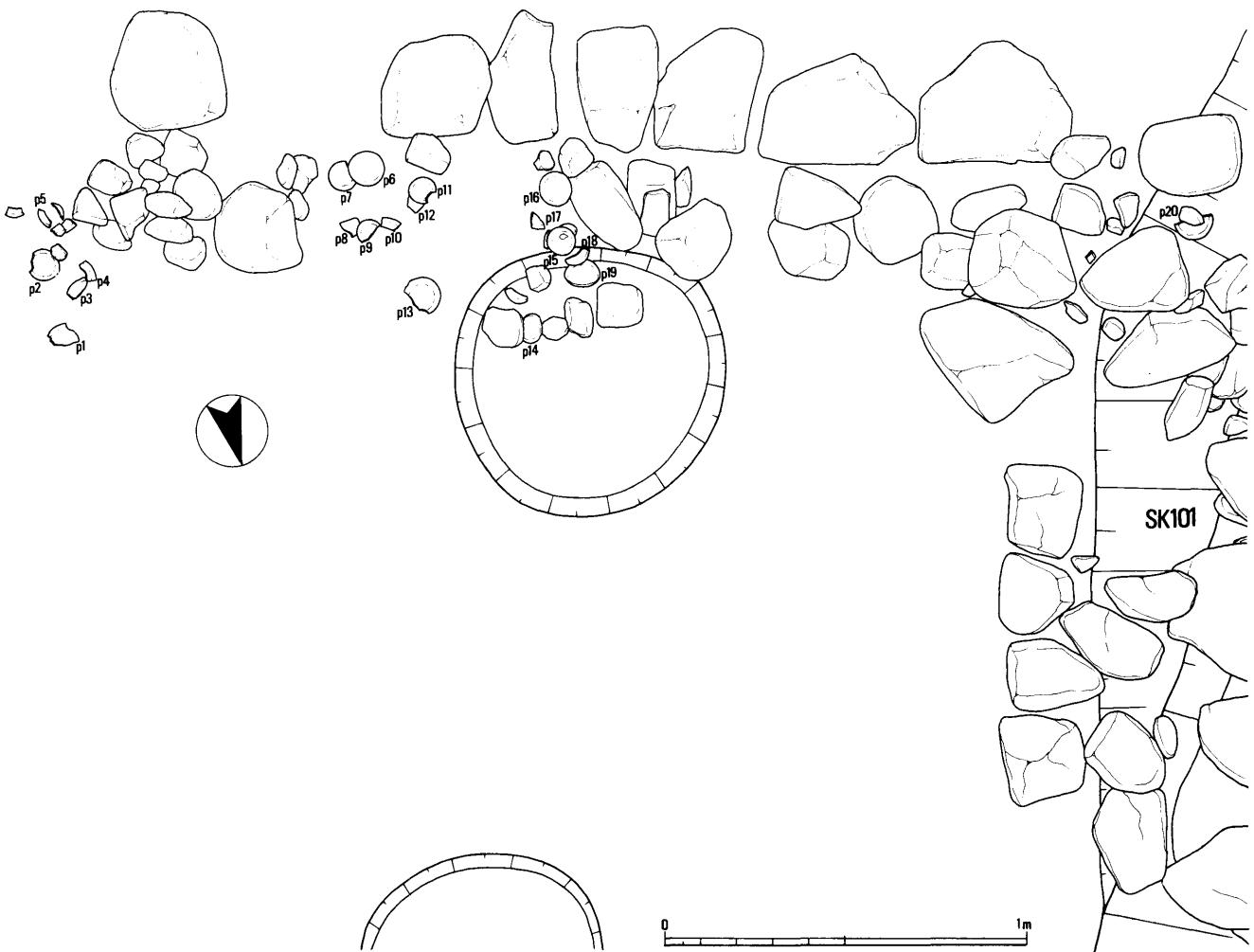


fig.22 石列 S Z88遺物出土状況 (1 : 20)

ている。石室状部分の内法は幅約50cm、長さは1.1～1.3mである。

埋土には炭を多く含んでいたが、石組には被熱していない。開口部付近で土師器皿類が一括して出土した。また、動物の骨と考えられるものも出土している。出土遺物の時期は16世紀初頭であろう。

階段状遺構 S Z194 SK101の西側、c 12グリットに位置する。直径30cmほどの平石3個を平坦に並べ、その南側に同様の石を立てている。この形態から、北側から南側に向かって上がる石段の一部と考えることができる。遺構の形態から、遺構に伴った出土遺物は明確にし難いが、隣接する石組遺構SK101と方向を揃えていることからこの遺構とほぼ同じ時期と考えられる。

石列

石列は3基確認された。

石列 S Z88 (fig. 22) 石組遺構 SK101に東接

して構築されている。北・東側が開いた「L」字形を呈している。南側には幅20～40cm大の平石を並べ、西側には幅20cm内外の石を北側の石列に直行するように並べている。南側石列は北側面を、西側石列は東側面を、それぞれ意識して配列されている。南側石列の西半は、二重に石列が構築されているようにも観察される。

石列（土器群）S Z90 石列（土器群）S Z90はe 14グリット付近に位置する。石列はあまり判然としない形態を呈しているが、後述する石列S Z88や先述の石組遺構SK101・階段状遺構S Z194などとは平行ないしは直行するようである。石列の周囲には土師器皿類を中心とした遺物群が認められた。この中には漆器も含まれている。石列（土器群）S Z90の下部には、不定形な落ち込み（S Z163）が認められる。S Z90の時期は、出土土器からは16世紀中葉と思われる。



fig.23 石列から想定した区画概念図（1：200）

この石列は石組遺構SK101の構築後に作成されている。遺物は南側石列の北側に土師器皿類を中心に多く出土した。このうちの数点には墨書が認められている。時期的には、16世紀中葉あたりと考えられる。

石列SZ195 c 8～d 8 グリットにかけて認められる。間隔はかなり開いているが、N16° E方向に直線的に並んでおり、同一石列と見なしてよいであろう。この石列は掘立柱建物SB205の東端を区切るようにあり、ある一定の区画がこの部分に存在していたことを示唆する。

石列からみた区画

上記の石組遺構・石列は、それぞれがほぼ同じ方位を意識して設定されているようである。これらをつなげてみると、fig.23のようになる。この空間内における明確な遺構はSK185・186のみであり、遺構密度は低い。何らかの施設が存在していたことを示すものかも知れない。なお、この区画の東端にあたるSZ90と西端にあたるSZ195との距離は約22.0mである。これを尺換算すると、およそ72尺となる。

土坑

土坑は数多く確認されているが、埋土の状況は個々

まちまちである。以下、代表的なものについて記述する。

土坑SK83 (fig.24) 石列SZ88の東方、c 14 グリット付近に位置する。長さ約3.6m、幅約1.9m の長方形形状を呈する。埋土には炭・焼土を若干含むが、一時期に一気に埋没したような堆積状況は示さない。土坑内からは、土師器皿類を中心とした多くの遺物が出土した。中には、瓦片を円形加工したものも認められる。出土遺物の時期は16世紀中葉あたりと思われる。

土坑SK97 土坑SK97は調査区西隅のc 2 グリット付近に位置する。西・北側は調査区外であるが、おそらく直径4m前後の大きな土坑になるものと考えられる。遺構内からは土師器皿類を中心とした遺物が出土した。遺物の時期は15世紀後葉頃と考えられる。

土坑SK103 (fig.25) d 15 グリット付近に位置する。当初は石組遺構SK99から北側にかけて広い落ち込みがあり、それをSK98としていたが、いくつかの遺構が重なっているものであることが判明し、その一部をSK103に変更した。したがって、当初に与えたSK98に、SK103の遺物が若干含まれている可能性がある。

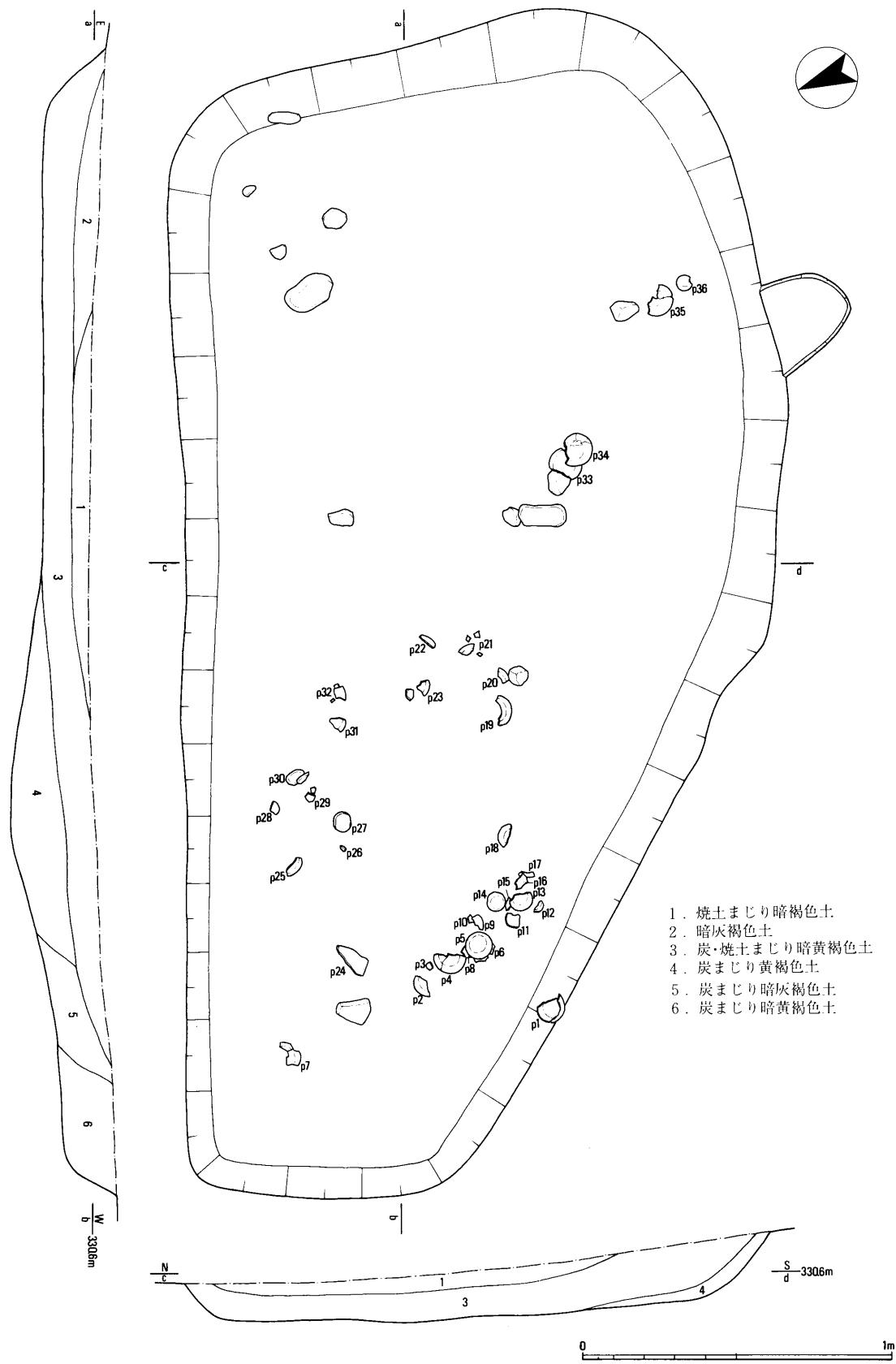


fig. 24 土坑 S K83 遺物出土状況および土層断面図 (1 : 20)

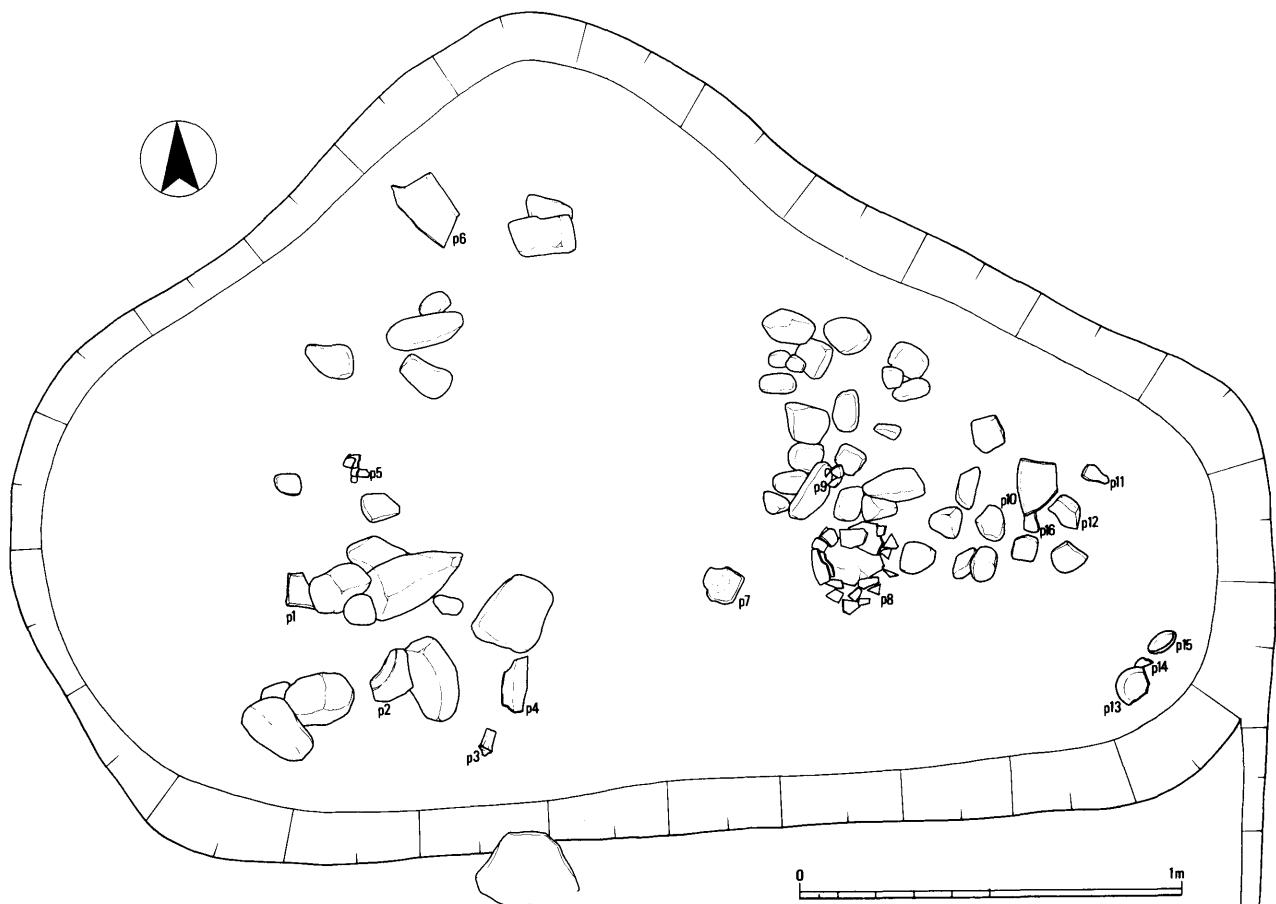
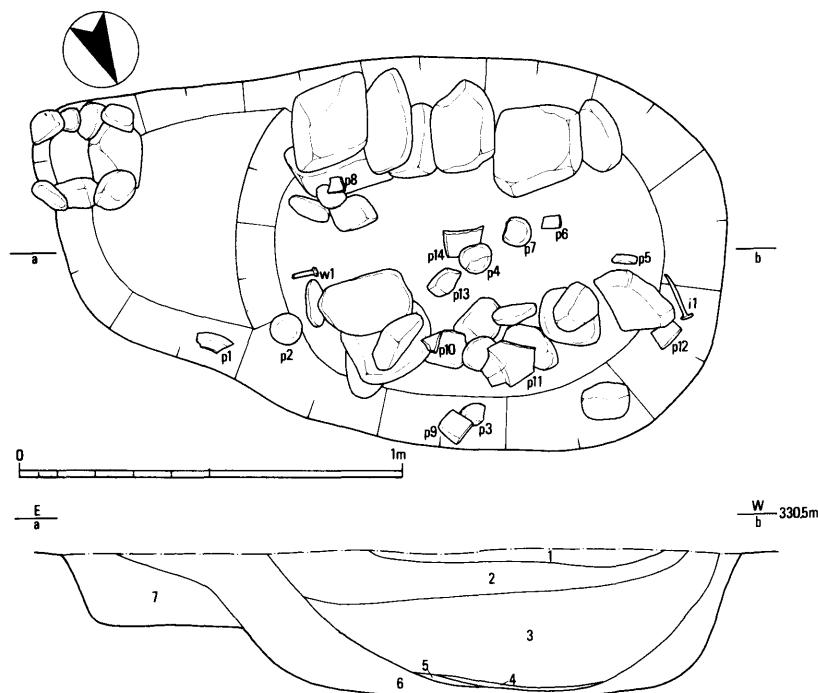


fig. 25 土坑 S K 103 遺物出土状況 (1 : 20) ※ p 1 , 6 は瓦。



- | | | |
|---------------------|----------|--------------------|
| 1 . 黄色粘土 | 4 . 炭層 | 6 . 炭・黄色ブロック含む灰褐色土 |
| 2 . 灰褐色砂質土 | 5 . 黄色粘土 | 7 . 暗褐色土 |
| 3 . 炭・灰色ブロックまじり黄色粘土 | | |

fig. 26 土坑 S K 152 遺物出土状況および土層断面図 (1 : 20) ※ p 9 ~14は瓦。

遺構は南北最大長約2.2m、東西最大長約3.3mの不定形なものであるが、当初は東西に長い長方形を意識した可能性もある。遺構内からは礫群とともに、土師器・陶器・瓦などの遺物がまとまって出土している。遺物の時期は、瓦を除いて16世紀前葉頃であろう。

土坑 S K152 (fig.26) d 6 グリットに位置する。南北約1m、東西約1.4mの楕円形部の東側に長さ約0.4mの張り出し状部が付く。楕円形部の内面南側と北側には20cm大の礫が集積され、中央部が開いている状態となっている。南側の集石は、あるいは石組である可能性もある。また土層断面で見ると、楕円形部に黄色粘土を詰め、その下に炭層が存在している状況が観察される。これらのことから、この土坑が単なる廃棄土坑ではなく、ピットか何かの役目を果たしていたものと考えることもできる。出土遺物には土器類・瓦・鉄釘などのほか、用途不明の鉄芯の木質がある。遺物の時期は、瓦を除いて16世紀中葉と考えられる。

その他の遺構

その他の遺構としては、落ち込み状遺構や溝がある。

溝 S D128 石列（土器群） S Z90の東側、e 14 グリット付近に位置する。西端は落ち込み S Z163

に達したところで終わっている。深さは検出面から5cmもない。埋土からは鉄鍋片が出土している。S Z90の下にもぐり込むことから、おそらく16世紀前半以前の遺構であろう。

落ち込み S Z178 d 4 グリット付近に位置する。 不定形な深い落ち込みであるが、西端部分に小形の石列を持つ。これは、土坑 S K152に認められたものと比較的よく似ており、両者が同様な性格を有するものである可能性を示唆する。この石列は建物 S B205の方向にほぼ沿うものであるが性格は不明である。この遺構からは16世紀代の遺物が出土している。

落ち込み S D184 a 9 グリット付近に位置する。 当初は溝かと考えたが、浅くて形態も不定形であることから落ち込みとした。遺構上面からは白磁の人物が出土している。遺構からは15世紀末か16世紀初頭の遺物が出土している。

3) 寺院跡廃絶後の遺跡の調査

寺院跡廃絶後のものとしては、e 3 グリット周辺の小溝群がある。これらは同一方向に向かって走っているものである。耕作に伴って生じたものとされており、「鋤溝」などと呼ばれているものである。時期は確定できないが、おそらく江戸時代のものであろう。

2. 平成2年度調査区

平成2年度調査区は、国道368号線道路改良事業によって分断される用地外の排水路を確保するために、本調査に先立って行われたものである。大蓮寺調査区から東に100mほど離れた地点である。

a. 層位

調査区の層位は、土層図が作成されていないため不明であるが、写真から判断すると、地表面からおよそ30cm内外で遺構面に達しているようであり、基本的には大蓮寺調査区の状況と同じようである。

b. 検出した遺構

検出した遺構は掘立柱建物3棟、柱列2列、溝1条である。出土遺物から、これらはおおきくは14世紀後葉から15世紀初頭の時期に相当するものと考えられるものである。遺構番号は、大蓮寺調査区との

混乱を避けるため、300番台とする。

掘立柱建物 S B301・柱列 S A302・溝 S D303

掘立柱建物 S B301は、桁行（南北）約19.1m、梁間（東西）約8.5mの南北棟の大形掘立柱建物である。桁行9間、梁間4間で、総柱の建物である。柱間は、桁行・梁間ともに同じ数値で設定されているものと思われる。1尺を30.3cmとした場合、柱間は7尺で、桁行は63尺、梁間は28尺となる。ピットは、直径およそ50cm内外であり、中世の建物のものとしては大きい。なお、ピットの大部分に根石が認められる。

S B301の東には、柱列を認めることができる(S A302)。S A302はS B301の桁行の柱間と揃えて設定されており、両者が関連して設けられたもの

であることを示唆する。S B301とS A302との間はおよそ2.4mであり、先の尺に換算すると8尺になる。

S B301の外周、南・東・西には溝を認めることができる(S D303)。S D303は幅50cm内外のもので、雨落ち溝か、あるいは区画溝であろう。S B301との距離を見てみると、東側が約1.4m、南側が約0.9m、西側が約0.7mとなり、東側が最も広いことがわかる。これは、溝が雨落ち溝と仮定した場合、東側の軒先がより前方へ出ていることを示すこととなり、建物の入口が東側であった可能性が考えられる。

これらの遺構は掘立柱建物S B301に伴って設定されたものと考えるのが妥当であり、一連のものと見てよいであろう。ピット出土の土器は14世紀後半以降のものと考えられ、包含層出土遺物からは15世紀代までは存続していたものと想定される。

掘立柱建物S B304 S B301の東側北寄りに位置する東西5間、南北2間以上の建物である。東西約8.3mで、南北は調査区外に広がるため、不明である。したがって、この建物の棟方向も不明とせざるを得ない。なお、根石は認められない。建物南面は柱間が不揃いであり、中央の柱間が最も広くなっている。

S B304は、柱筋をS B301の南から4列目の梁間に揃えているようである。この点からは、S B301との時期的な併行関係を想定することができる。しかし、建物西端の柱筋がS A302とほとんど接するようにあることから、構造的な無理が生じるようにも思われる。

S B304の時期は、ピットから出土した土器を見る限り、S B301と同時期と考えられる。

掘立柱建物S B305・柱列S A306 掘立柱建物

S B305は、S B301の東側南寄りに位置する東西2間、南北2間の建物である。南北・東西とも約4.3mの、正方形プランの建物である。したがって、この建物の棟方向はわからない。なお、根石は認められない。

S B305は、S B301の南端の梁間と方向を揃えて設定されているようである。また、各柱間も、先の尺に換算すれば、7尺となる。この点では、先のS B304と同様といえ、やはり、S B301と時期的な併行関係を窺わせる。

柱列S A306 S B305の北側の柱間を利用しないは重ねて、S B305の北西コーナから1間西へいったところで南に向かって直角に屈曲するものである。柱間は、北列の西隅が約1.2m、西列の南隅が約1.8mの他は、全て約2.1mである。先の尺に換算すると、それぞれ4尺・6尺・7尺となる。

S B305・S A306の時期は、ピットから出土した土器をみる限り、やはりS B301と同時期と考えられる。

掘立柱建物S B307 S B305と重なって検出された建物で、東西2間、南北2間である。東西約3.8m、南北約3.3mで、東西棟の建物と考えられる。東西は12尺、南北は11尺に相当するものと考えられる。根石は認められない。当調査区のなかで、最も小さい建物であるとともに、柱筋の設定が他の建物・柱列と異なる唯一の建物である。ただし、方向は他の建物と同じとみてよいであろう。したがって、S B305とは建て替え関係にあると考えることが可能である。

S B307の時期は、ピットから出土した土器を見る限り、S B301などとの明確な差を認めることができない。

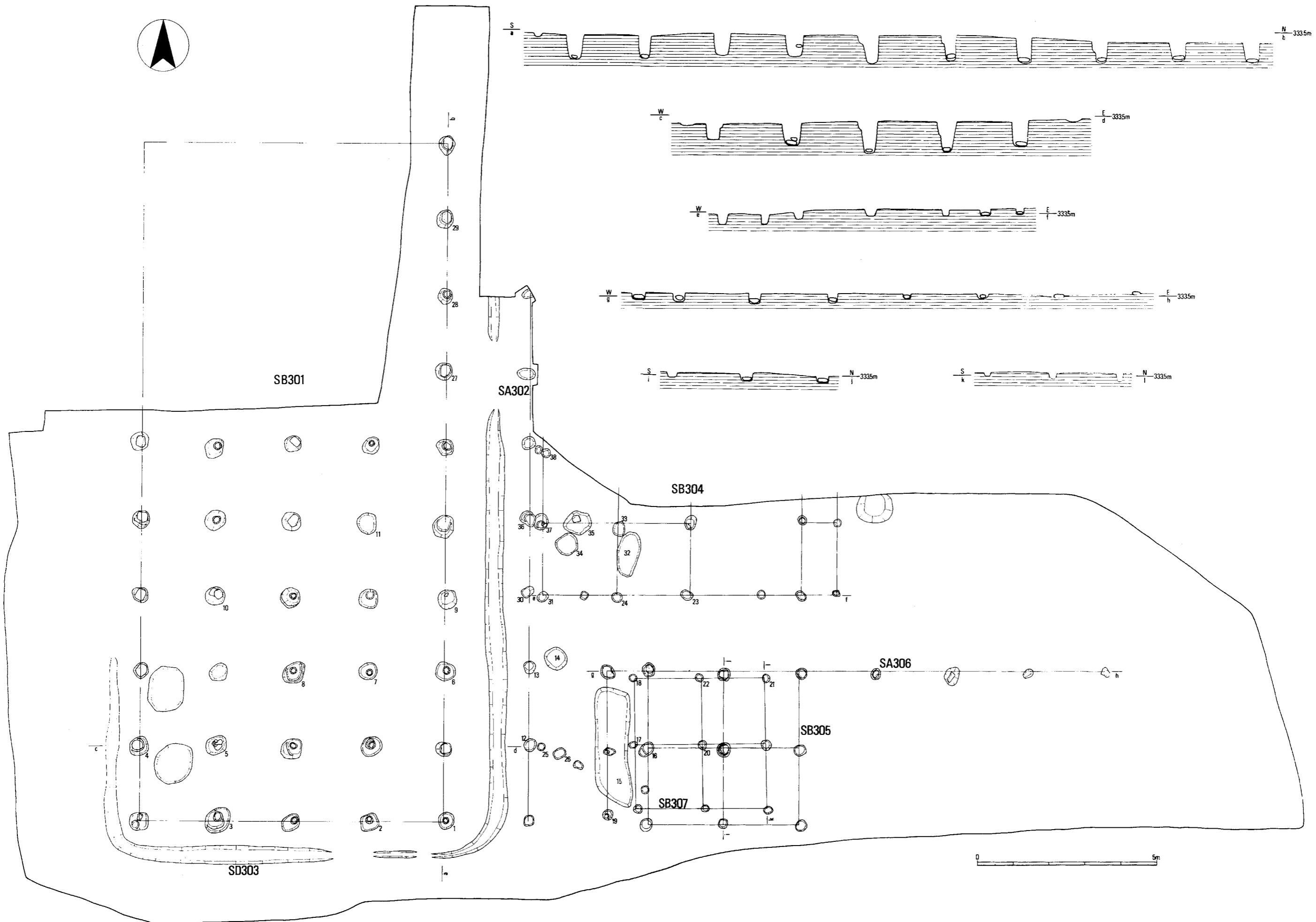


fig.27 平成2年度調査区 平面・断面図 (1:100)

3. 法光寺調査区

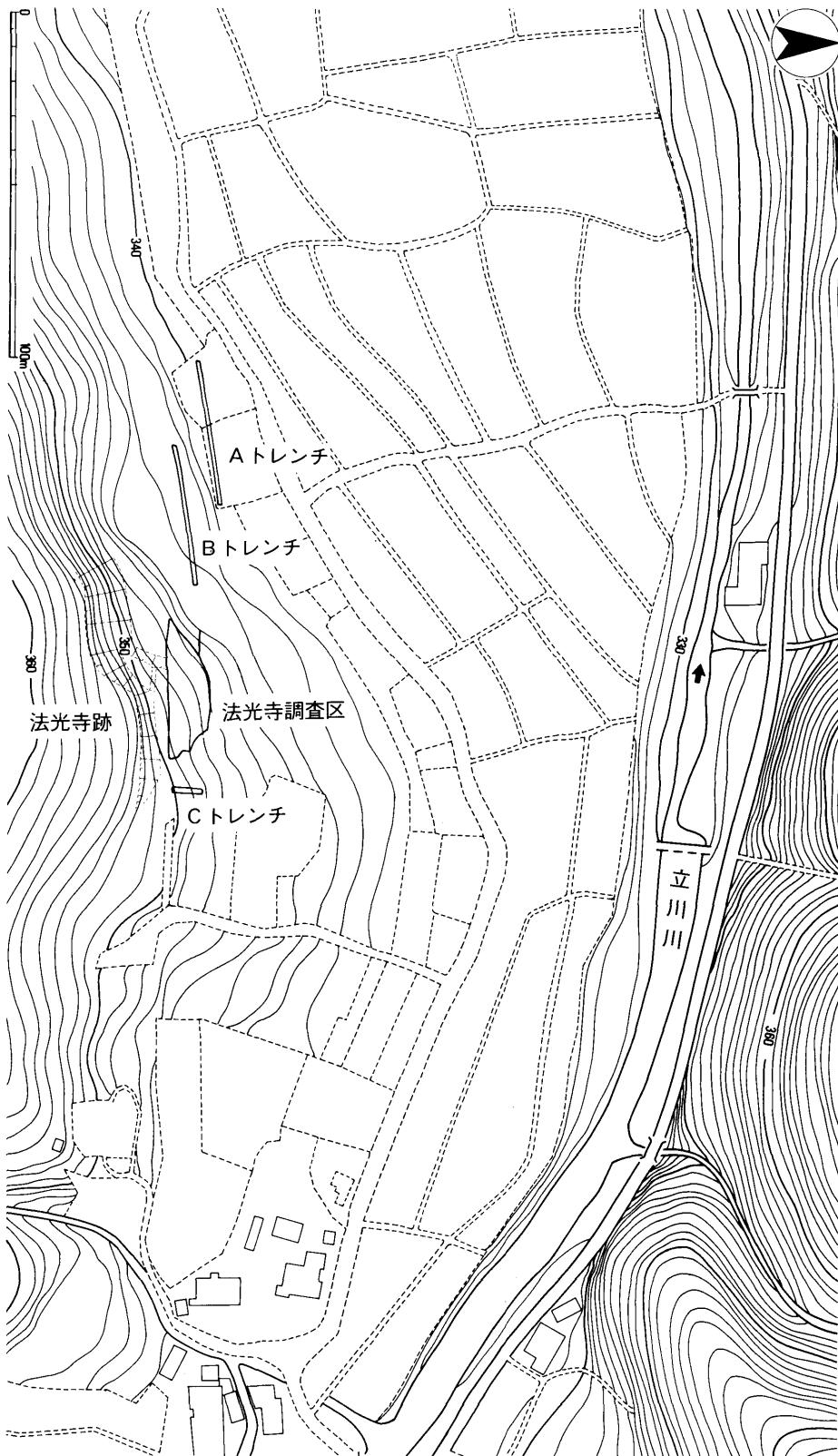


fig.28 法光寺調査区位置図 (1 : 2,000)

法光寺調査区は、大蓮寺調査区から東に約350mのところに位置する。現状は植林地であるが、太平洋戦争中前後までは畠地として利用されていたという。標高は349m前後であり、現水田面との比高差は約15mほどある。

この調査区は現在の字名は「土井沖」に含まれるもの、旧字は「法光寺」という。江戸時代に作成された絵図面でも、この付近に法光寺が存在していたことが表されている。今回の調査によっても寺院跡関連の遺構・遺物が確認され、その伝承を裏付けることとなった。したがって、この伝承および字名が一定の有効性を持つものと判断し、「法光寺跡」として報告することとする。そして、今回の調査区は「法光寺調査区」と呼称することとする。

法光寺跡は、当調査区を含む南側の丘陵に認めることができる。当調査区に南接する一段高い部分には広い平坦地が認められ、本堂跡として伝えられている。また、この平坦地にはかつて井戸が存在していたというが、確認できなかった。伝本堂跡の西側には一段低い人工的な平坦地を認めることができる。この部分付

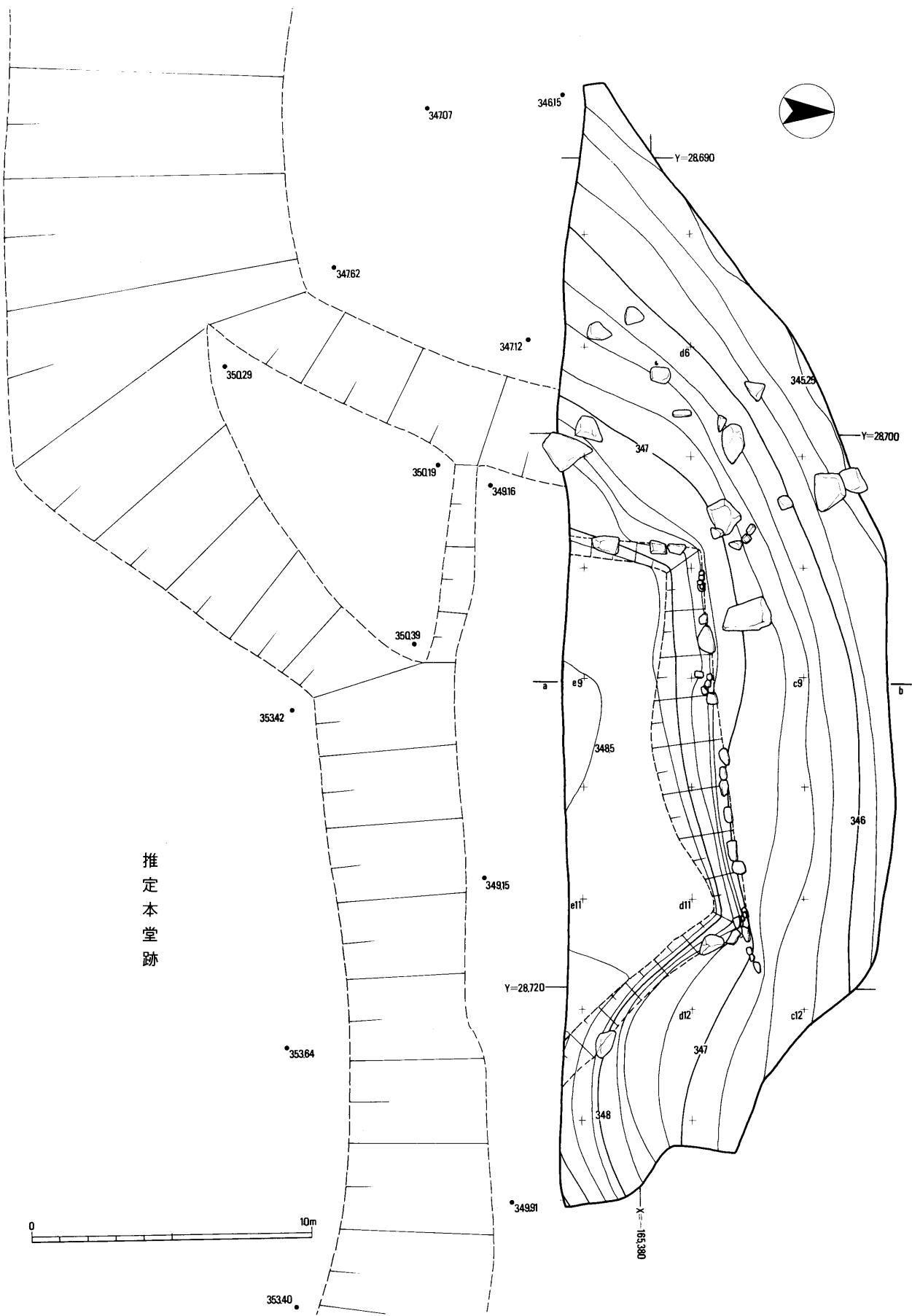


fig.29 法光寺調査区平面図 (1 : 200) ※a . bは土層断面の位置、+は小グリッド

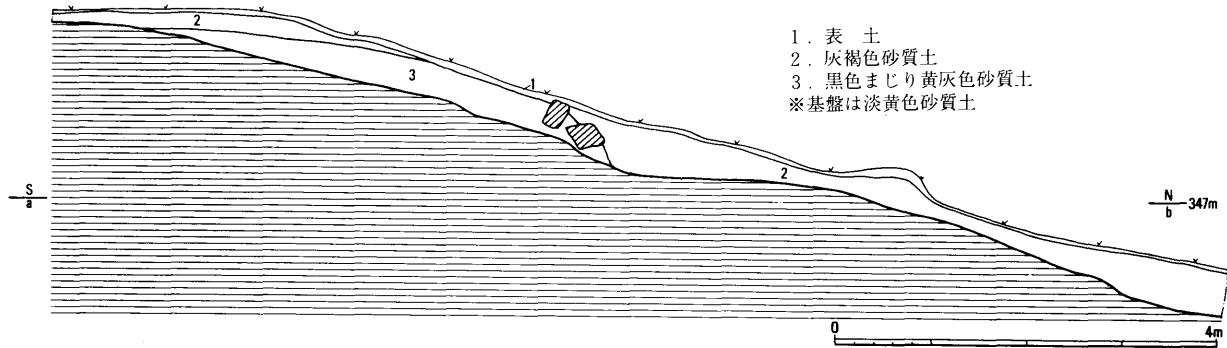


fig.30 法光寺調査区土層断面図 (1 : 80)

近には、かつて五輪塔などの墓石が認められたとい
うが、これもまた現在確認することはできない。

法光寺調査区は、面的な調査を行った部分の他に、
3本のトレンチを設定して遺構の有無を確認してい
る (fig.28)。A・Cトレンチからは遺物・遺構と
も確認されなかった。Bトレンチからは、遺構は確
認されなかったものの、13世紀後半以降の山茶椀片
が1点出土している。層位的には後述の面調査部分
の状況と同様である。

a. 層位 (fig.30)

法光寺調査区の層位は、腐食土の下にあたる灰褐
色砂質土を遺物包含層としている。基本的にはこの
層の下で地山である淡黄色砂質土に達するが、土壇
部分には黒色粒を含んだ黄灰色砂質土を認めること
ができる。

c 7・c 12・d 12グリットでは、灰褐色砂質土の
下に、多くの遺物を含んだ礫層が認められた。これ
らは、おそらくは太平洋戦争以前の開墾時に集積さ
れたものと考えられる。

b. 遺構

当調査区で確認された遺構は、土壇のみである。
土壇は、丘陵の突出部を利用して成形している。調
査区内からは、北・東・西辺が確認されたが、地形
的に見ると、南辺は区画されずに伝本堂跡と接する
ようである。確認された3辺は、それぞれ直角には
交わらない。北辺の外側は平坦地を形成しており、
この部分の削平によって土盛りがなされたものと考
えられる。

土壇の外縁には石列を認めることができる。北辺
が最も良好で、直線的な配列が良好に観察された。
しかし、明確な石組・石垣は確認することができな
かった。これは、本来土壇の裾のみを整える機能で
あったか、あるいは本来石垣状を呈していたものが
崩れてしまったのかのいずれかであろう。現状では
いずれとも確定できないが、北東隅部分が石組状を
呈していることから、本来は石垣であった可能性が
高い。

土壇上面からは、ピットや礎石などの遺構は全く
認められなかった。土壇形成に伴う盛土内からは16
世紀前半と考えられる遺物が出土しており、土壇形
成時期がこの時期以降であることを示している。

なお、土壇北西には、大石がいくつか認められた。
これらは現地に立つとまるで「庭園」のように見え
た。しかし、全て当調査区周辺に見られる山石であ
り、地山から突出しているもの多いため、おそら
く自然のものであろう。

出土遺物は、前述の集積部分に集中している。ま
た、土壇北側の平坦地からも若干の遺物を認めるこ
とができた。出土遺物には、瓦・土師器・陶器・磁
器などがあるが、瓦を除いて大部分が16世紀以降の
ものである。なかには、江戸時代と考えられるもの
も認められる。

瓦は大蓮寺跡と比べて、極めて少ない出土である。
おそらくは、今回の調査区で認められた土壇に伴う
ものではなく、伝本堂跡を中心とした他の部分で用
いられていたのである。

遺構番号	小地区	性格	時期	その他の特徴	遺構番号	小地区	性格	時期	その他の特徴
SK 1	c24	円形土坑	II		SK 54	e20.21	円形土坑	III	
SK 2	b24	円形土坑	II		SK 55	c20	円形土坑	III	
SK 3	c23	円形土坑	II		SK 56	e20	円形土坑	III	
SK 4	c23	円形土坑	II		SK 57	e20	土坑	III	
SK 5	c26	円形土坑	II	拳大礫の集石あり。	SK 58	d20	円形土坑	III	
SK 6	c26	円形土坑	II	拳大礫の集石あり。	SK 59	d20	円形土坑	III	
SZ 7	c23	落ち込み	II	溝状を呈する。	SK 60	c20	円形土坑	III	
SK 8	c23	円形土坑	II		SK 61		抹消		
SZ 9	e24.25	円形土坑群	II	円形土坑が重なりあっていた遺構	SK 62	c,d22	円形土坑	III	
SZ 10	c23	落ち込み	II	溝状を呈する。	SK 63	c22	円形土坑	III	
SK 11	e22.23	石組遺構	II～III	方形の石組を持つ。底部に長方形の土坑あり。	SK 64	d23	埋土	III	SK193 の上層埋土。
SK 12	c22	円形土坑	II		SD 65	c19.20	溝	弥生	断面皿状。
SK 13	c22.23	円形土坑	II	焼土含む。	SK 66	d22	ピット	III	
SK 14	c22	円形土坑	II		SK 67	d21	土坑	III	焼土が厚く堆積。ピットかも知れない。
SK 15	e24	円形土坑	II		SK 68	b22.23	土坑	III	集石がある。
SK 16	b22,c22	円形土坑	II		SK 69	d19	円形土坑	III	
SK 17	c23	円形土坑	II		SK 70	d21	落ち込み	III	ピットの重なりかも知れない。
SK 18	c22	円形土坑	II		SK 71	e19	土坑	I	
SK 19	c22	円形土坑	II		SK 72	e17	落ち込み	弥生	堅穴住居の可能性もある。
SK 20	e22	土坑	II	周囲に石を配する。	SK 73	e,f19	落ち込み	II	
SD 21	c21.22	落ち込み	II	溝状の落ち込み。	SK 74	d20	円形土坑	II	
SK 22	d24	円形土坑	II		SK 75	d22	落ち込み	II	溝状を呈する。
SK 23	d24	円形土坑	II		SK 76	c21	落ち込み	II	
SK 24	d24	円形土坑	II		SK 77	d21	落ち込み	II	複数のピットの重なり。
SK 25	c21.22	円形土坑	II		SK 78	c,d21	土坑	II	
SK 26	c21	円形土坑	II		SK 79	d20	円形土坑	II	
SK 27	c21	円形土坑	II		SK 80	c20	土坑	II	
SK 28	c21	円形土坑	II		SK 81	d19	円形土坑	II	
SK 29	d24	円形土坑	II		SK 82	c15	土坑	III	
SK 30	e20	土坑	II	内部に石組を持つ。	SK 83	c14.15	土坑	III	土器多量。瓦含む。
SK 31	d23	土坑	II		SZ 84	c15	落ち込み	III	浅い落ち込み。
SK 32	c24	円形土坑	II		SK 85	c14	ピット	III	
SK 33	d23	円形土坑	II		SK 86	c13	円形土坑	III	
SK 34	c22.23,d22	円形土坑	II		SK 87	c13			SK101 の上層埋土のため抹消。
SK 35	c,d21	土坑	II		SZ 88	c13	石列	III	SK101 より新。土器多量。
SK 36	c,d21	円形土坑	II		SZ 89	c15	落ち込み	III	浅い落ち込み。
SK 37	c21	落ち込み	II	遺構としては消滅。	SZ 90	e13	土器群	III	漆器を含んだ土器群。
SK 38	e20	石組遺構	II	南西方山はSK3015破壊され ている石組は2段分残る。	SK 9	l d12	円形土坑	III	
SK 39	c21	円形土坑	II		SK 92	d12	ピット	III	
SK 40	c21	円形土坑	II		SD 93	c12	溝	弥生	堅穴住居の周溝の可能性あり。
SK 41	e21	円形土坑	II		SK 94	c12	土坑	III	
SK 42	c21	円形土坑	II		SK 95	d12	円形土坑	III	
SK 43	e23.24	土坑	II		SK 96	d11	擾乱土坑	現代	岡上からは抹消。
SK 44	e21	ピット	II		SK 97	c2	土坑	III	礫多く含む。
SK 45	c21	円形土坑	II		SK 98	d15	落ち込み	III	SK103 の遺物を含む。
SK 46	c20.21	落ち込み	II	SK55.56.59.60 の上層に相当。	SK 99	e15	石組遺構	III	瓦含む。
SK 47	d20	土坑	II		SK 100	e12	円形土坑	III	
SK 48	e20	土坑	II		SK 101	c1	石組遺構	III	石組は横穴式石室状を呈する。上 層埋土(SK87)は焼土多く含む。
SK 49	e20	円形土坑	II		SK 102	b11	石組遺構	III	石組は横穴式石室状を呈する。
SK 50	e20	円形土坑	II		SK103	d15	土坑	III	瓦含む。
SK 51	d23.24	円形土坑	II		SK104	c11	土坑	III	
SK 52	d23		II	SK193の上層埋土。	SK105	d15	土坑	III	
SK 53	d23	円形土坑	II		SK106	e15	土坑	III	

tab. 1 大蓮寺調査区検出遺構一覧表(1)

遺構番号	小地区	性格	時期	その他の	遺構番号	小地区	性格	時期	その他の
SK107	e2	落ち込み	III		SK161	c4	ピット	III	
SK108	e2		III	ピット	SD162	d7	ピット	III	3基のピット。
SK109	e2	土坑	III		SZ163	e14	落ち込み	III	
SK110	e2	土坑	III		SK164	e13	円形土坑	III	
SK111	e2	落ち込み	III		SK165	d7	落ち込み	III	
SD112	e2	溝	近世	耕作溝。	SK166	e8	土坑	III	
SK113	e2	土坑	III		SK167	d19	土坑	II	
SD114	f2	溝	近世	耕作溝。	SK168	d8	ピット	III	
SK116	e2	落ち込み	III		SK169	d6	落ち込み	縄文	浅い。遺構としては抹消。
SH117	e2	堅穴住居	縄文	火あり。主柱穴4個。	SK170	e14	土坑	III	
SD118	d3	溝	近世	耕作溝。	SK171	d14	落ち込み	III	SD128がここで途切れる。
SD119	d3	溝	近世	耕作溝。	SK172	c8	竪石組	III	2重の石組。内部に炭層。
SD120	e3	溝	近世	耕作溝。	SK173	d8	落ち込み	III	浅い。遺構としては抹消。
SK121	d3	土坑	現代	電柱の取付けのための土坑。	SK174	e6	土坑	III	
SD122	e3	溝	近世		SK175	c4	ピット	III	
SK123	e3	土坑	III		SZ176	c3	落ち込み	III	浅い。遺構としては抹消。
SD124	e3	溝	近世	耕作溝。	SK177	e6	土坑	III	
SD125	e3	溝	近世	耕作溝。	SZ178	d5	落ち込み	III	部分的に石組みがある。
SD126	e3	溝	近世	耕作溝。SD122のつづき。	SK179	c5	土坑	III	
SK127	e3	土坑	III		SK180	d6	土坑	III	浅い。
SD128	e14	溝	III	鉄錫片出土。	SK181	d5	ピット	III	
SK129	e3	土坑	III		SK182	d5	ピット	III	
SK130	e3	土坑	III		SK183	d4	土坑	III	
SK131	e3	落ち込み	III		SD184	b9	溝？	III	落ち込み状を呈する。
SK132	f3	土坑	III		SK185	c9	石組遺構	III	SK187を含む。北にSK186が取りつく。
SK133	e3	落ち込み	III		SK186	b9	土坑	III	南にSK185が取りつく。
SK134	d14	落ち込み	III		SK187	b9		III	SK185と同一土坑のため、抹消。
SK135	d14	土坑	III		SK188	d13	円形土坑	III	
SK136	c2	土坑	III		SK189	c8	土坑	縄文	
SK137	d14	土坑	III		SK190	e10	土坑	III	
SK138	c2	土坑	III		SK191	c9	土坑	III	
SK139	e10	落ち込み	III		SZ192	d9,c9	落ち込み	III	
SK140	c2	落ち込み	III		SK193	d23	円形土坑	III	
SD141	c2	溝	III		SZ194	c12	階段状遺構	III	
SD142	d3	溝	III		SZ195	c8・d8	石列	III	
SK143	d7	土坑	III		SB196	d21ほか	掘立柱建物	II	東西棟 東西10.0m×南北6.65m
SK144	d7	ピット	III		SB197	d22ほか	掘立柱建物	II	東西棟 東西7.9m×南北4.55m
SK145	d3	土坑	III		SB198	d21ほか	掘立柱建物	II	東西棟 東西8.2m×南北6.35m
SK146	c2	土坑	III		SB199	d21ほか	掘立柱建物	II	東西棟 東西7.9m×南北4.55m
SK147	e11	落ち込み	III		SB200	d21ほか	掘立柱建物	II	東西棟 東西6.05m×南北4.45m
SK148	d6	ピット	III		SB201	d21ほか	掘立柱建物	II	東西棟 東西6.35m×南北3.95m
SK149	d6	ピット	III		SB202	d20ほか	掘立柱建物	II	南北棟 東西4.25m×南北6.95m
SK150	d7	土坑	III		SA203	d17ほか	柱列	II	東西方向 6.05m確認
SK151	e7	ピット	III		SB204	c3ほか	礎石建物	III	東西10.9m×南北?
SK152	d6	土坑	III	黄色粘土層あり。鉄釘・瓦。	SB205	c7ほか	掘立柱建物	III	南北棟 東西5.15m×南北7.0m
SK153	d6	土坑	III		SB206	c7ほか	掘立柱建物	III	南北棟 東西4.55m×南北5.45m
SK154	c6	土坑	III		SB207	c7ほか	掘立柱建物	III	東西棟 東西6.35m×南北3.65m
SK155	c5	ピット	III		SB208	c7ほか	掘立柱建物	III	東西棟 東西6.05m×南北4.85m
SK156	c5	ピット	III		SB209	d7ほか	掘立柱建物	III	東西5.45m×南北5.15m
SK157	c5	ピット	III		SA210	e5ほか	柱列	III	東西6.55m確認
SK158	c7	土坑	III		SA211	e5ほか	柱列	III	東西6.2m確認
SK159	c6	土坑	III		SA212	c4ほか	柱列	III	東西16.0m確認
SK160	c5	落ち込み	III	浅い。遺構としては抹消。					

tab. 2 大蓮寺調査区検出遺構一覧表(2)

* Iは13世紀代、IIは14世紀末～15世紀前半、IIIは15世紀後半～16世紀後半を表す。

IV. 調査の成果—出土した遺物—

出土遺物は、大蓮寺調査区で136箱、法光寺調査区で10箱、平成2年度調査区で2箱の、計148箱分である。内訳は、縄文土器3箱、弥生土器1箱、中世土器・瓦類139箱、中世の金属製品5箱である。以

下、各調査区単位で出土遺物の状況について観察していく。個々の遺物の詳細については、遺物観察表を参照されたい。

1. 大蓮寺調査区の遺物

大蓮寺調査区からは、縄文時代・弥生時代および鎌倉～室町・戦国時代（中世）の遺物が出土している。

(1) 縄文時代の遺物 (fig. 31)

縄文時代の遺物には、土器および石器がある。

縄文土器は堅穴住居SH117出土のものが中心で、9ライン以西に若干の遺物散布が認められた。堅穴住居SH117出土の土器には、小形注口土器(1)、注口土器(2～5)、深鉢(6～15)、壺(16・17)の他、底部(18・19)がある。施文の方法は、沈線区画内にLIRの充填（磨消）縄文を施すもの(3・4・6～13)、沈線区画内に条線施文した後、棒状工具による刺突が見られるもの(2)、沈線を施した後、竹管状の工具で刺突施文するもの(5)、結節縄文を3列施したもの(15)、がある。1のような資料は伊勢での出土は少なく、注目される。なお3・4は、器面や焼成の状況から同一個体と思われるものである。

これらは一応同じ堅穴住居から出土しているものと見なされるものであり、時期的に併行するものと見て差し支えなかろう。縄文時代後期中葉、近畿地方周辺の土器編年観では北白川上層3期～一乗寺K式に併行するものと考えられる。^①

石器は、石鏃のような製品は出土せず、サヌカイトの剥片が認められたのみである。

(2) 弥生時代の遺物 (fig. 32)

弥生時代の遺物には、土器がある。弥生土器は、溝SD65・93および落ち込みSK74から出土している他、中世の遺構内に混入していたものもある。概して出土量は少ない。

弥生土器は、壺(20～23)、甕(25～34)の他、蓋かと思われるもの(24)がある。20・21の壺は、広口壺で、口縁端部外面に波状文を、内面に簾状文状の

刻みを施している。23は櫛描横線文を施すものであるが、複合櫛描文ではない。甕は、口縁端部に刻み目を施すもの(25～27・30)と、口縁部が「く」の字形に屈曲して口縁端部を上方に突出させるもの(28・29)に大別される。前者の刻み目は、厳密には口縁端部外面下方に施すもの(25・26)と、外面中央部に施すもの(27・30)が存在する。底部形態も、平底を呈するもの(31・32)、上げ底状のもの(33)、脚台となるもの(34)が存在している。

これらの土器は、おおよそ弥生時代中期後葉に相当するものであると考えられる。

(3) 中世の遺物 (fig. 33・34・36～46)

大蓮寺調査区における中世の遺物は、時期的には13世紀代、14世紀後葉～15世紀前半、15世紀後半～16世紀中葉、の3つに区分される。前2者の遺物は、工房跡として報告した箇所に集中的に認められ、それ以西には極めて少ない。15世紀後半～16世紀中葉の遺物は、工房跡付近からはほとんど認められないものの、16ライン以西の大蓮寺跡相当部分からは大量に出土している。こういった傾向は、遺跡が形成された環境とかなり密接に係わっているものと考えられ、後章で検討する。以下、工房跡周辺および大蓮寺跡周辺部分から出土した遺物を個別に記述していく。

a. 工房跡周辺の出土遺物

1) 土器類

工房跡周辺から出土した土器は、少量の13世紀代の土器類の他は、大部分が14世紀後葉～15世紀前半のものである。

13世紀代の土器は、土師器鍋(78～81)、陶器碗(56～60)、陶器ねり鉢(70)がある。生産時期から見れば63の青磁碗もこの時期であろう。鍋は南伊勢

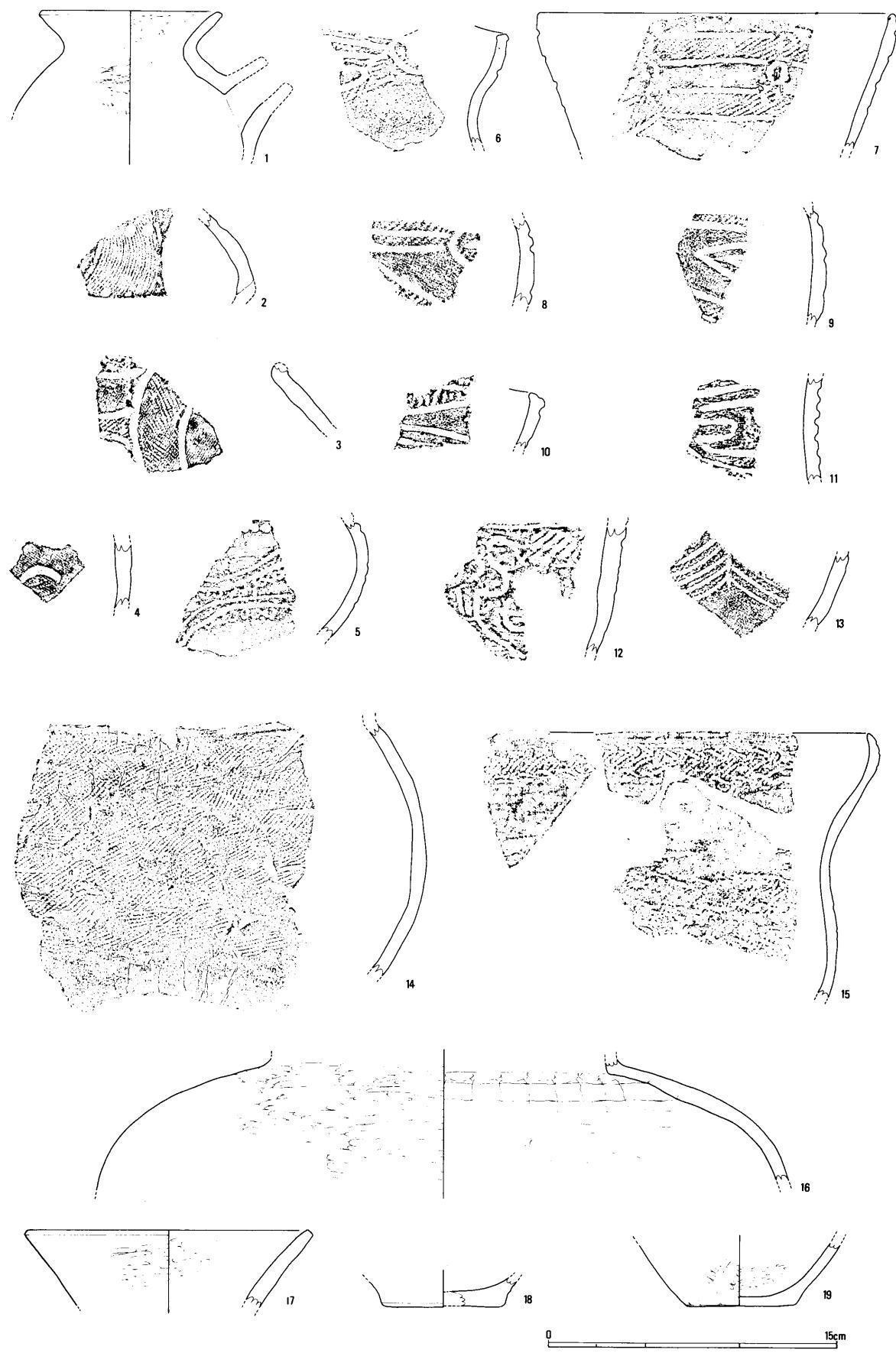


fig. 31 穹穴住居 S H117 他 出土縄文土器 (1 : 3)

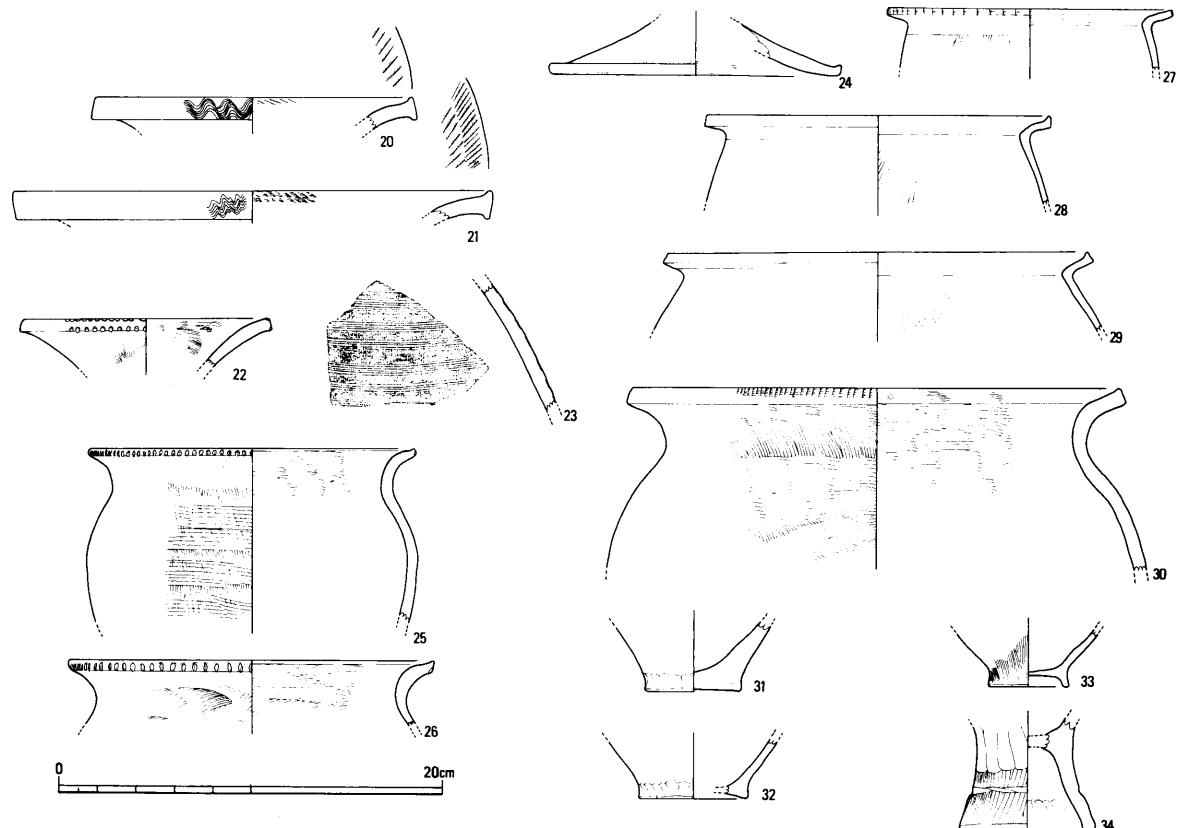


fig.32 出土弥生土器 (1 : 4)

系のもので、1段階 b 型式のもの (79~81) と 2 段階 b 型式のもの (78) がある。陶器椀はいわゆる山茶椀で、藤澤良祐氏による編年のⅢ段階 7 型式およびⅣ段階 8 型式のものが存在しているようである。

14世紀後葉～15世紀前半の土器には、土師器類・瓦器および瓦質土器類・国産陶器類・貿易陶磁器類がある。

土師器類は、南伊勢系のものがほとんどである。鍋では第3段階 a 型式～b 型式のものが大部分であるが、第4段階 a 型式に相当するものが1点のみ認められる(93)。皿類は口縁部径11cm内外のものと、口縁部径8cm内外のものの2種類認められる。南伊勢系の土師器皿類については、fig.35に分類案を作成した。工房跡周辺からは、小皿(A1)・皿(B1)を認めることができるが、それ以外のものは認められない。皿・小皿ともに胎土は緻密で、焼成も良好なものが多い。

これらの南伊勢系以外の土師器では、椀(53・54)がある。これらは蚊山遺跡^④(玉城町)や釈尊寺遺跡^⑤(多気町)などで散見することができるものと同一系統のものと考えられるが、いずれの遺跡において

も土師器の主体的な存在とはなっていない。また、中央部が内面に隆起している小皿(49)、口縁部が短く屈曲して開く小形の椀のようなもの(50)、外面に明瞭なヨコナデを施す皿(51)がある。49は大和地域あるいは伊賀地域からの搬入品と考えるのが妥当であろう。

瓦器には、椀(52)がある。伊賀型の範疇に含まれるものであるとすると、山田猛氏の編年によるⅢ段階第4型式のものかと考えることもできる。しかし、内面のヘラミガキが極めて粗いことや口縁部が外反気味であることなど、Ⅲ段階第4型式のものとは若干異なる要素を見出すこともできる。したがって、Ⅲ段階第4型式以降のものである可能性を考えるのが妥当であろう。

瓦質土器には鍋(100)がある。伊賀ないしは畿内地方からの搬入品と思われる。

陶器類には、瀬戸産・常滑産・信楽産のものを認めることができる。瀬戸産のものには平椀(72・73)・皿(71)・卸皿(77)・小壺(55)・天目茶椀(67・69)・壺(76)・盤(74・75)がある。常滑産のものには壺(101)の他、図示していない多くの甕片があ

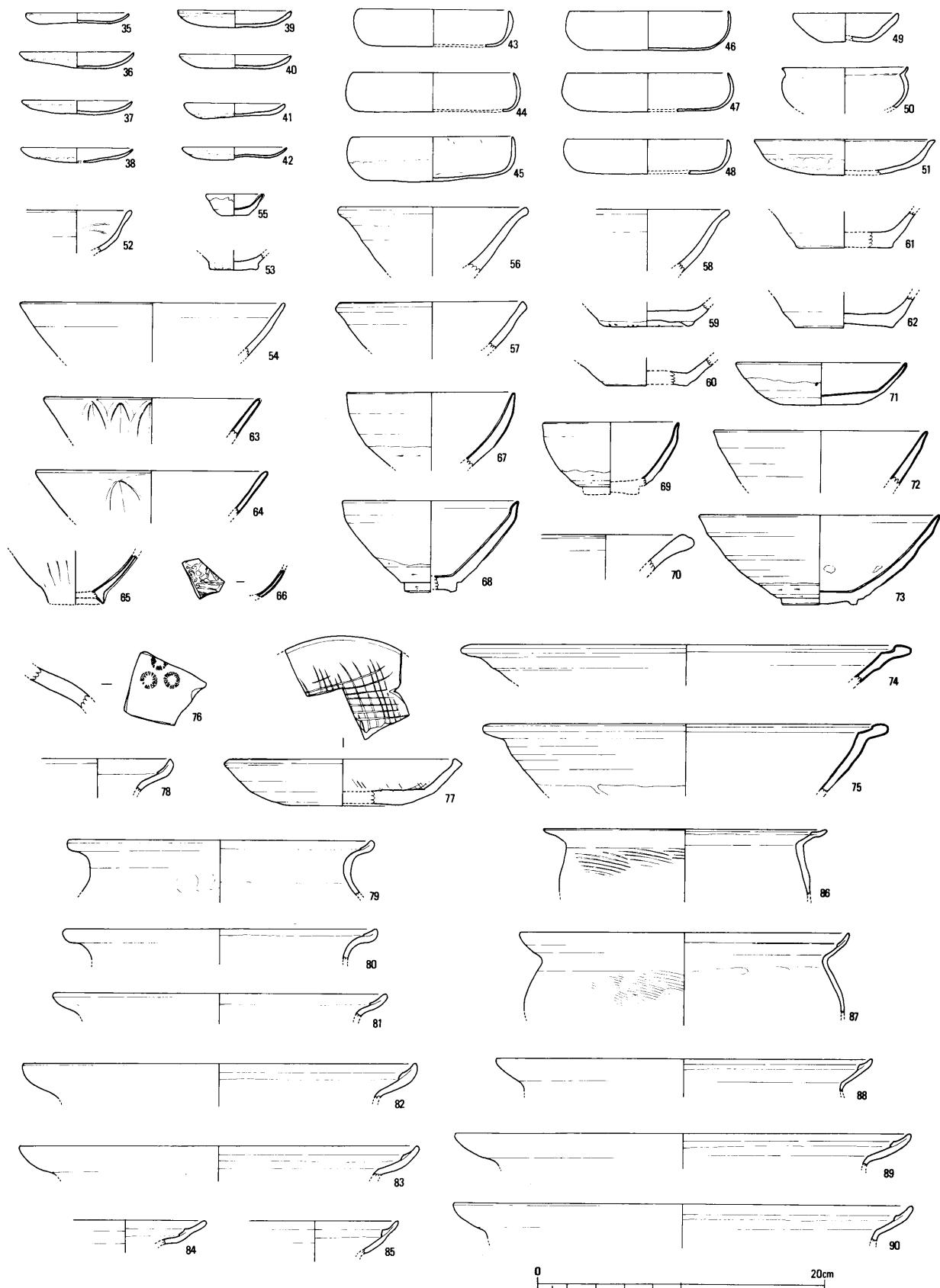


fig. 33 工房跡周辺出土遺物(1) (1 : 4)

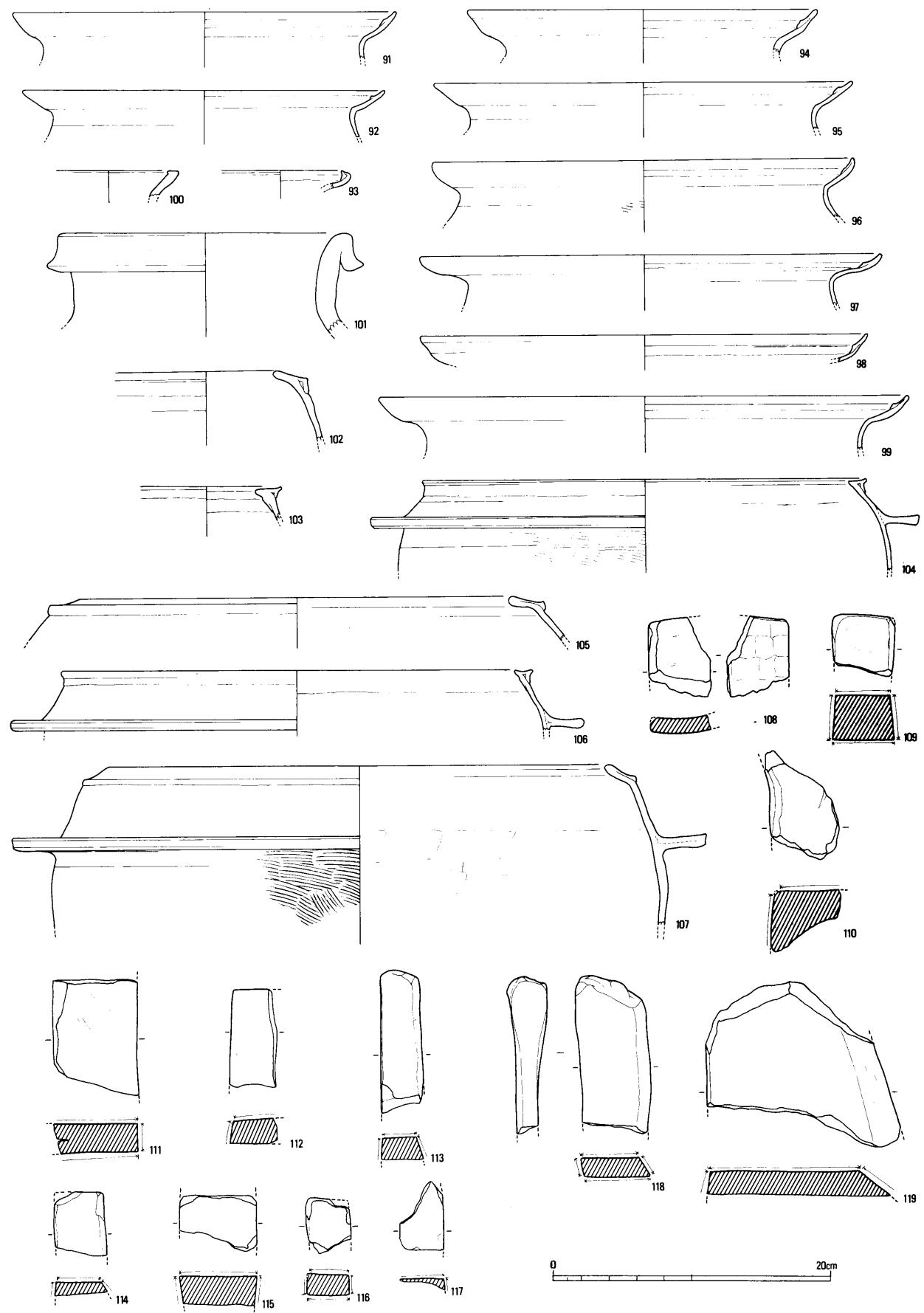


fig. 34 工房跡周辺出土遺物(2) (1 : 4)

る。信楽産では、ねり鉢と考えられるものがあるが、図示できるものではない。

磁器類には、青磁（64・65）・白磁（66）がある。66は景德鎮産のものと考えられる優品である。

これらの土器類から見ると、工房跡は14世紀後葉～15世紀前葉に盛行していたもので、15世紀中葉にはその機能を停止していたであろうことを窺うことができる。

工房跡周辺における土器類の出土量を見てみると、おおよそtab.3のような構成比率となる。工房跡周辺では、土師器類が圧倒的に多いが、そのなかでも土師器鍋の構成比率の高いことを窺うことができる。

2) 金属製品類

金属製品には、貨幣・銅製小椀・鉄釘がある。

工房跡周辺からの出土は、全て中国の北宋錢である。d 21グリットpit 16から6個体の貨幣がまとまって出土しており、特筆される。また、製品ではないが、鉄滓が出土しており、大蓮寺跡周辺のものも含めてtab.17にまとめた。

種類	産地等	器種	点数	比 率 (%)		
				個別	機能別	種類別
土 師 器	南 伊 勢	小皿	162	34.3	59.1	91.7
		皿	117	24.8		
		鍋	145	30.7		
		羽釜	7	1.5	32.2	
	不明	その他	2	0.4	0.4	
瓦器	伊賀?	椀	1	0.2	0.2	0.2
陶 器	瀬 戸	椀	4	0.9	2.0	6.7
		皿	3	0.7		
		天目茶椀	2	0.4		
	瀬戸	壺	5	1.1	1.1	
	常 滑	ねり鉢	3	0.7	0.7	
		壺	2	0.4	0.4	
		甕	11	2.3	2.3	
	信楽	ねり鉢	1	0.2	0.2	
	中国	天目茶椀	1	0.2	0.2	0.2
	磁 器	青磁	椀	2	0.4	0.8
	白磁	椀	2	0.4		
瓦質	大和	鍋	2	0.4	0.4	0.4
			472	100.0	100.0	100.0

tab. 3 工房跡周辺出土土器構成表

銅製小椀はd21グリットpit9から出土している。底中央に円形の破損孔があり、あるいは高壊状を呈していたのかも知れない。

3) 石製品類

石製品では、滑石製品（108）および砥石（109～119）がある。滑石製品は、おそらく石鍋破片の転用であろうが、転用後いかなる使用を目的としたのかは不明とせざるを得ない。砥石は、実測点数も含めて13点出土しており、「多い」といってもよからう。109の資料には鉄滓が付着しており、鉄器鍛造に関わって砥石が用いられたことを示唆する。

4) その他

その他のものとしては、轔の羽口がある。轔の羽口は小片ではあるが、SK16から出土している。砥石・轔の羽口・鉄滓は、それぞれ関連しているものと考えるのが妥当であろう。

b. 大蓮寺跡周辺出土の遺物

1) 土器類

大蓮寺跡周辺からは各種の土器が出土している。これらは、結論からいえばおおよそ15世紀後葉から16世紀第Ⅲ四半期にかけてのものである。以下、土師器類・瓦質土器類・陶器類・磁器類・漆器類・その他、に分けて記述した後、遺構内でまとめて出土しているものについて見てみよう。

土師器類

土師器類には、皿類・鍋・十能・茶釜・蓋がある。

皿類 皿類には、南伊勢系のものと、それには含まれないものとがある。南伊勢系に含まれないものと確実に言えるのは、289の皿と237・244・259の小皿である。259はいわゆる「へそ皿」で、伊賀ないしは大和からの搬入品であろう。また、南伊勢系かどうか判断がむつかしいのが164・183・263・297の皿と260の小椀である。164・183・297の資料は、口縁部のヨコナデの方法が当該時期の南伊勢系の皿類と共に通することから、仮に別系統工人のものであってもかなり密接に関わったものであると考えられる。なお、この皿類は北畠氏館跡第2次調査の際にも比較的多く出土している。

南伊勢系の皿類については、fig.35の分類案に従う。先述の工房跡周辺から出土した土師器皿類と比較すれば、皿類内での器種が増加していることを窺

うことができる。特徴的なのは、口縁部にヨコナデを施す一群（C・D系統）が存在することである。

また、工房跡が機能していた段階では存在していた小皿（A1）・皿（B1）が、大蓮寺跡周辺ではほとんど認めることができない。小皿A1は、SK97の資料においてのみ認められるに過ぎないし、皿B1はその系統と考えられるものがSK174に存在するのみである。おそらく、15世紀半ばをやや過ぎたあたりで南伊勢系土師器皿類の器種構成的な変換が訪れたものと推察される。このことについては、後述したい。

なお、皿類に限って墨書の認められるものが存在している（223～225・247・298）。これらは石組遺構SZ88周辺から集中して出土している。224は「ゑいん」ではないかと考えられる。225は「前尔う」であろうか。他のものについては不明とせざるを得ない。

鍋 今回確認された鍋は、全て南伊勢系のものである。小形のもの（155など）・中形のもの（197など）・半球形体部のもの（132など）がある。第4段階b～c型式に相当するSD184出土の資料が最も古く、第4段階e型式（240など）までの資料が認められる。

十能 十能形のものは、今回の調査ではいくつか出土しているが、図示できたのは1点である（205）。やはり、南伊勢系のものである。

羽釜 極めて少量出土しているに過ぎない。中・

北勢に主体的に分布の認められるものが出土するものと想定していたが、南伊勢系のもののみであった。

茶釜 口縁部が長いもの（281）と短いもの（280）とがある。今回の調査での出土はあまり多くはないが、南伊勢系のもののみ認められる。

蓋 茶釜とセット関係にあるものである（196）。やはり、南伊勢系のものである。

瓦質土器類

瓦質土器には、擂鉢と火舍がある。擂鉢（277・291）は、粗い擂り目を持つもので、底部（291）にはクロ回転による糸切りが認められる。大和からの搬入品であろう。火舍は平面形が方形を呈するものである。図示したのは248の1点のみであるが、SK83からも赤褐色をした火舍の破片が出土している。

陶器類

陶器類には、瀬戸製品・常滑製品および信楽製品のものがある。

瀬戸製品 瀬戸製品には、丸皿・端反皿・天目茶碗・丸椀・片口鉢・小瓶・擂鉢の他、徳利の可能性が考えられる鉢がある。陶器類のなかでは、瀬戸製品が最も多い。

このうち、天目茶碗は藤澤良祐氏の編年による窯末期と考えられるもの（150・166・198）、大窯I期のもの（267・269・271）、II期のもの（167・185・192・270）III期のもの（272）がある。擂鉢については、大窯I期のもの（194・306・307）、III期のもの（228・305・308）がある。これらのことから、瀬戸

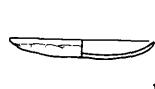
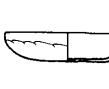
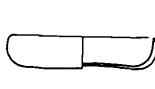
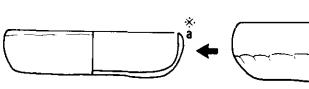
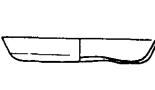
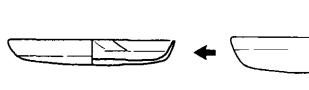
系統	口径	6.5cm前後	7.5～8.0cm	9.7～10cm	12～15cm	16cm以上
A系統						
B系統						
C系統						
D系統						
		小 皿		皿		

fig.35 南伊勢系土師器皿類分類図（1：4）※aは北畠氏館跡、※bは釈尊寺遺跡（多気町）出土

製品については藤澤編年の窖窯末期から大窯Ⅲ期にかけてが大蓮寺跡周辺における中心であるといえる。藤澤氏の年代観によれば、15世紀第Ⅲ四半期～16世紀第Ⅳ四半期にかけてのものが存在することになる。

常滑製品 常滑製品では、壺・ねり鉢・甕が認められる。ねり鉢の出土量は、瀬戸播鉢に比べれば少ない。

信楽製品 信楽製品では、播鉢を認めることができると、量的には極めて少ない。山田猛氏による編年のⅡ b型式に相当するものがある(290)があるが、小片である。良好な資料は253の資料1点のみであり、山田編年のⅣ a型式に相当する。山田氏の年代観によれば、16世紀第Ⅲ四半期に相当する。

磁器類

磁器類には、青磁・白磁・染付がある。

青磁 梗(165)・口縁部が内面に屈曲されている梗(315)・菱花梗(226)の他、内面中央にスタンプ文のある盤(250)がある。梗の外面には蓮弁文の表現がなされている。

白磁 盃(184・312)・端反梗(148・149・265・266)のほか、人形と思われるもの(129)がある。人形は、中国明代の徳化窯の製品らしい。

染付 染付には、端反梗(264)・碁笥底の梗(251)の他、梗と思われるもの(127)を図示した。その他に、梗や梗などがある。

その他

土器片・瓦片を利用して円形に加工したものが出土地点と点数はtab.16に示した。

大蓮寺跡周辺における土器構成比率

大蓮寺跡周辺における土器類の出土量を見てみると、おおよそtab.4のような構成比率となる。土師器類の全体的な構成比率は工房跡周辺と大差ないのであるが、鍋の構成比率は格段に低下し、代わって梗類が異常にほど高率を示していることが理解されよう。また、陶器類の構成比率は工房跡周辺と大差ないが、磁器類が増加していることも指摘できる。

2) 漆器類

漆器は、工房跡周辺からは全く出土せず、大蓮寺跡周辺に限って出土した。しかし、その大部分は小片である。また、全形を知れるものについても、素

地となる木質部分は腐敗しており、漆膜部分のみが残存していたものであるため、取上げの段階で崩壊してしまっている。

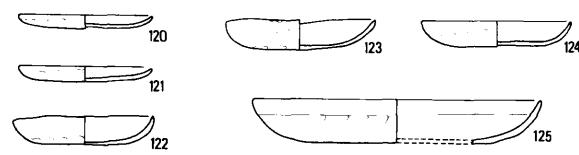
漆器類では、梗と思われるものと梗と思われるものとがある。大部分が黒色漆の下塗りを行った後、朱色漆で仕上げるものである。無文のものが大部分であるが、なかには草木状の模様が施されているものもある。

漆器類の出土地点と点数はtab.16に示した。

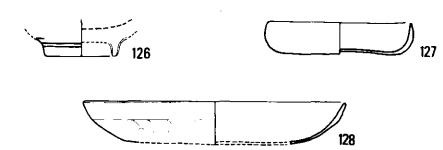
種類	産地等	器種	点数	比 率 (%)			
				個別	機能別	種類別	
土 師 器	南 伊 勢	梗(小)	227	17.4	79.8	88.2	
		梗(中)	396	30.3			
		梗(大)	419	32.1			
		鍋	79	6.1	7.9		
		十能	14	1.1			
		茶釜	5	0.4			
		蓋	3	0.2			
		羽釜	2	0.1			
		不明	7	0.5	0.5		
陶 器	瀬 戸	播鉢	23	1.8	1.8	7.8	
		天目茶梗	35	2.7	3.9		
		梗	4	0.3			
		梗	12	0.9			
		壺・瓶	2	0.1	0.1		
	常 滑	ねり鉢	10	0.8	0.8	3.8	
		壺	1	0.1	0.1		
		甕	9	0.7	0.7		
		播鉢	5	0.4	0.4		
磁 器	青 磁	梗	10	0.8	1.1	3.8	
		梗	3	0.2			
		盤	1	0.1			
		香炉	1	0.1	0.1		
	白 磁	梗	14	1.1	1.4		
		杯	4	0.3			
		人形	2	0.1	0.1		
		梗	10	0.8	1.1		
	染 付	梗	4	0.3			
		播鉢	1	0.1	0.1	0.2	
	瓦質 土器	火舍	2	0.1	0.1		
			1305	100.0	100.0	100.0	

tab.4 大蓮寺跡周辺出土土器構成表

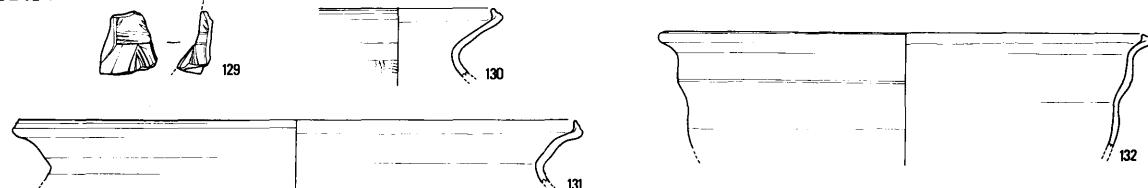
SK97



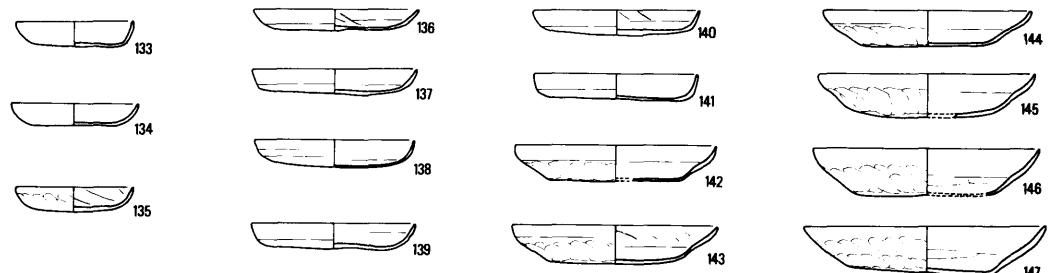
SK174



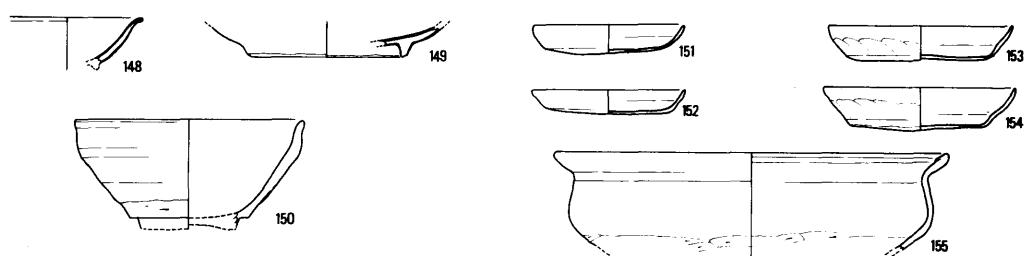
SD184



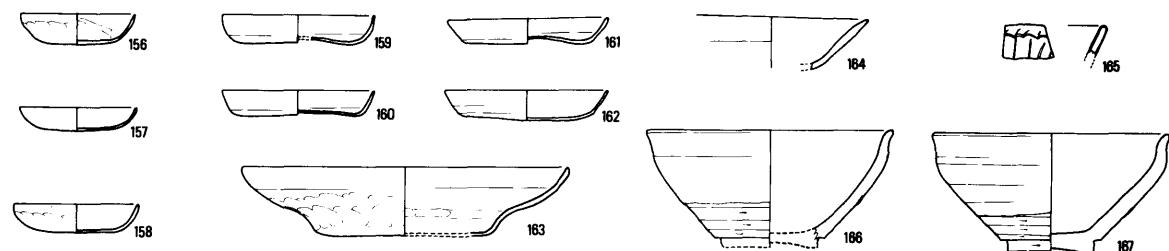
SK102



SK152



SK101



SK83

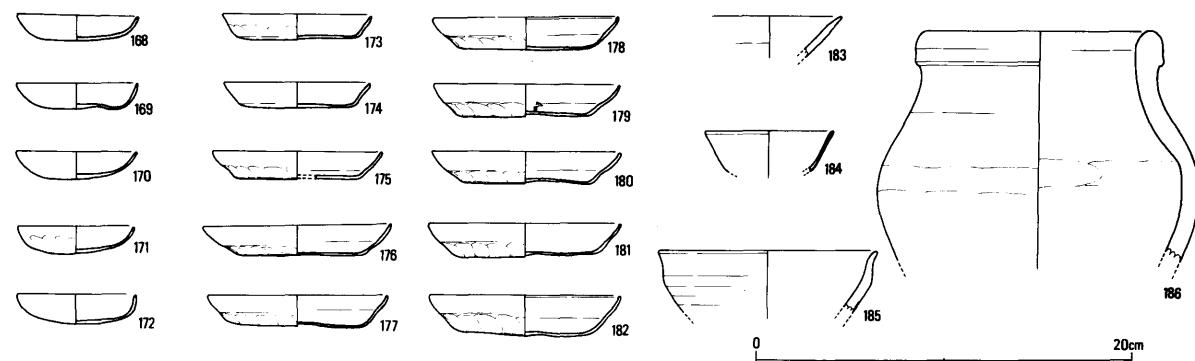
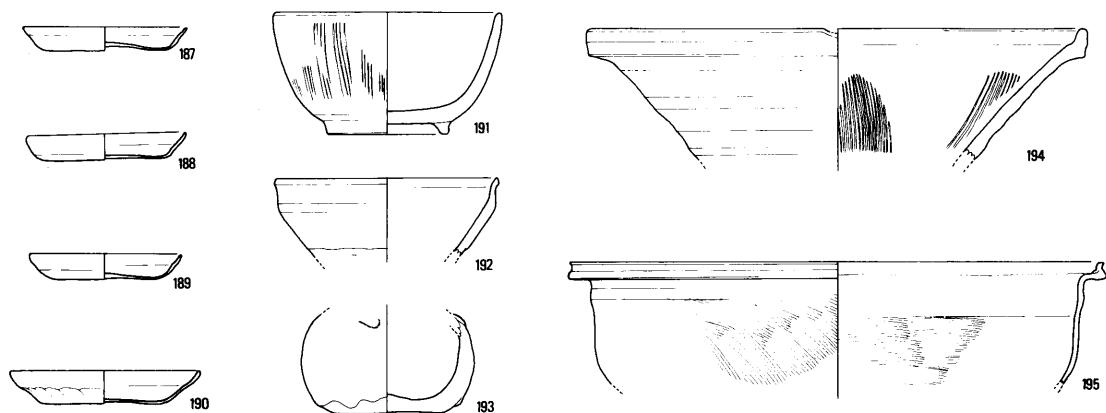
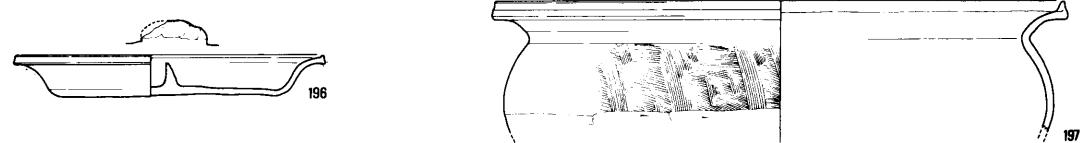


fig. 36 土坑 S K97 · S K174他出土土器 (1 : 4)

SZ90



SK191



SK103

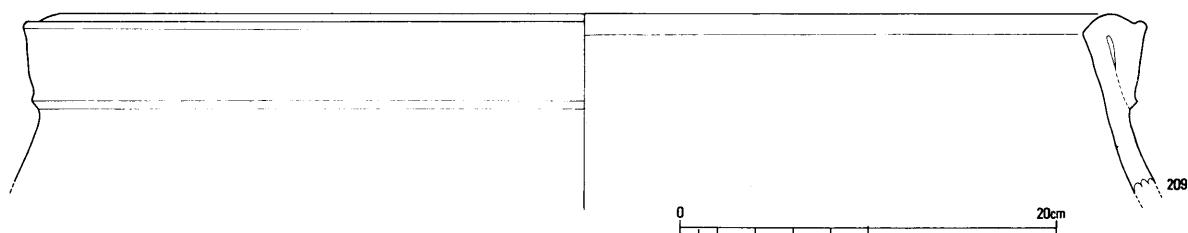
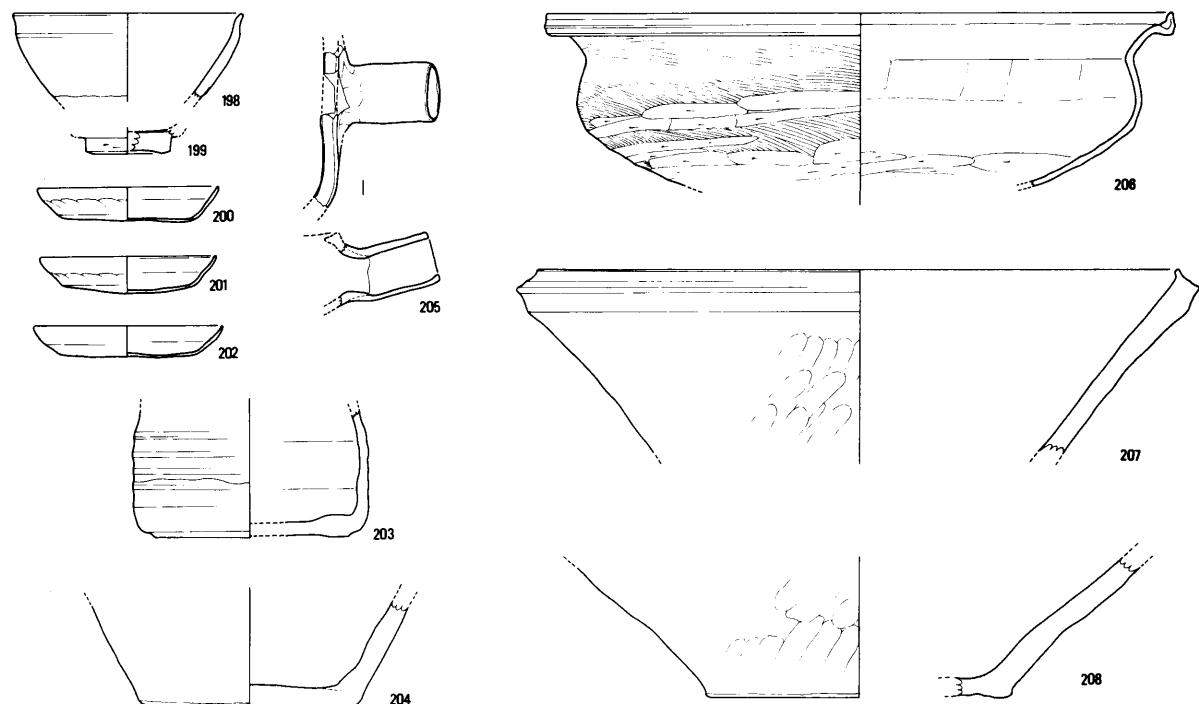
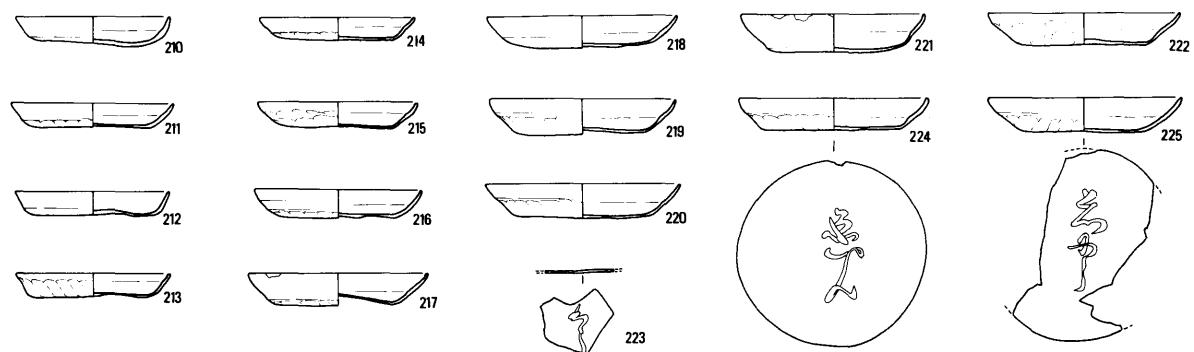
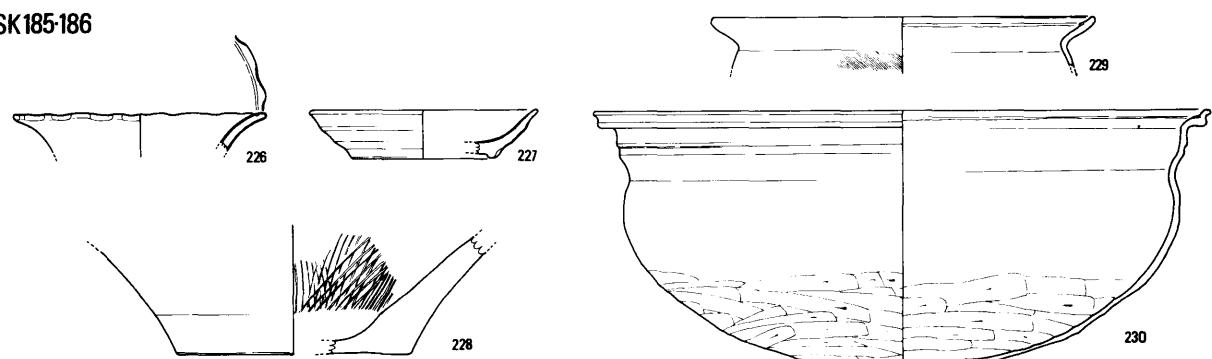


fig. 37 土器群 S Z90·土坑191他出土土器 (1 : 4)

SZ88



SK185.186



C 4 グリット黄色粘土

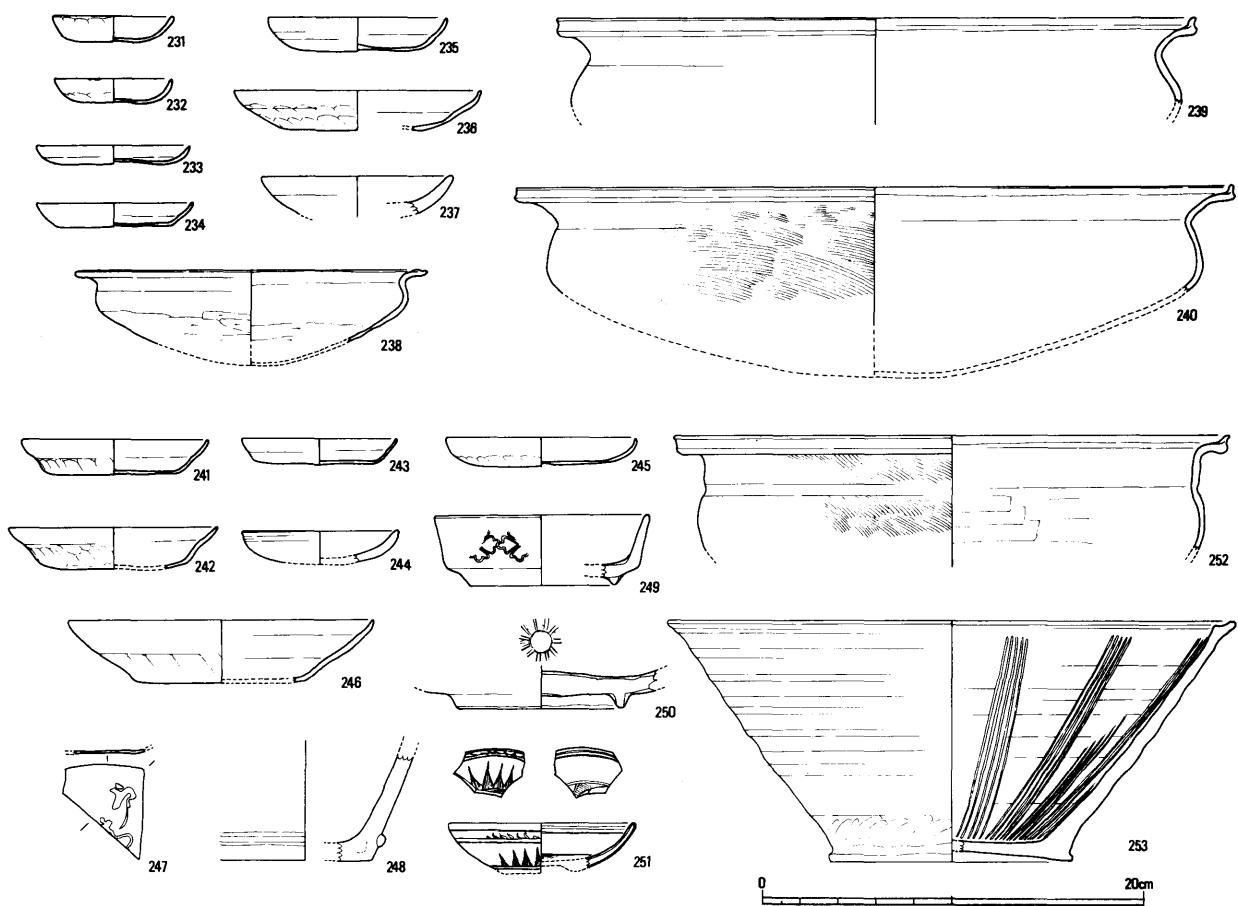


fig. 38 石列 S Z 88・石組遺構 S K 185.186他 出土土器 (1 : 4)

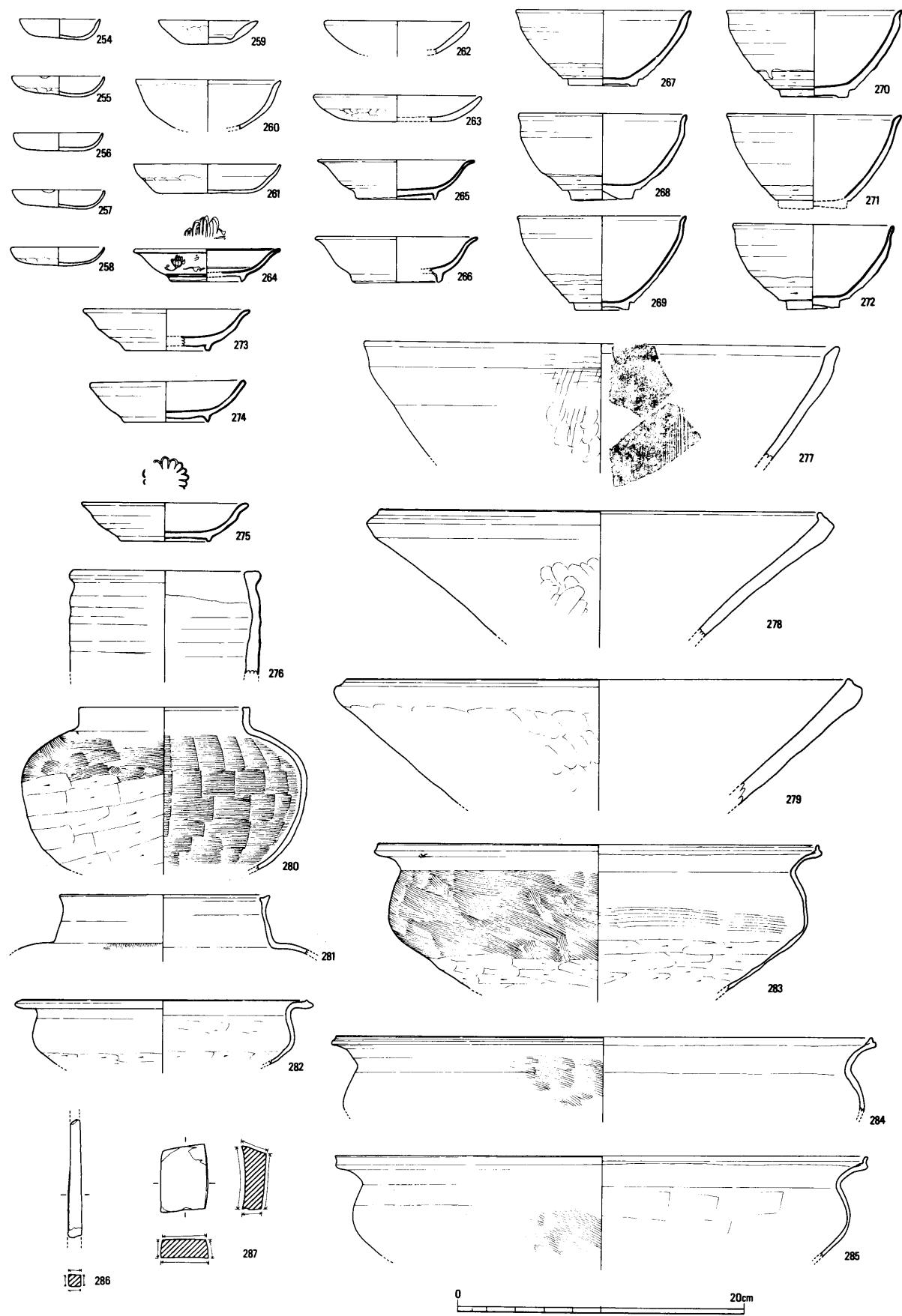


fig.39 遺構外出土遺物 (1 : 4)

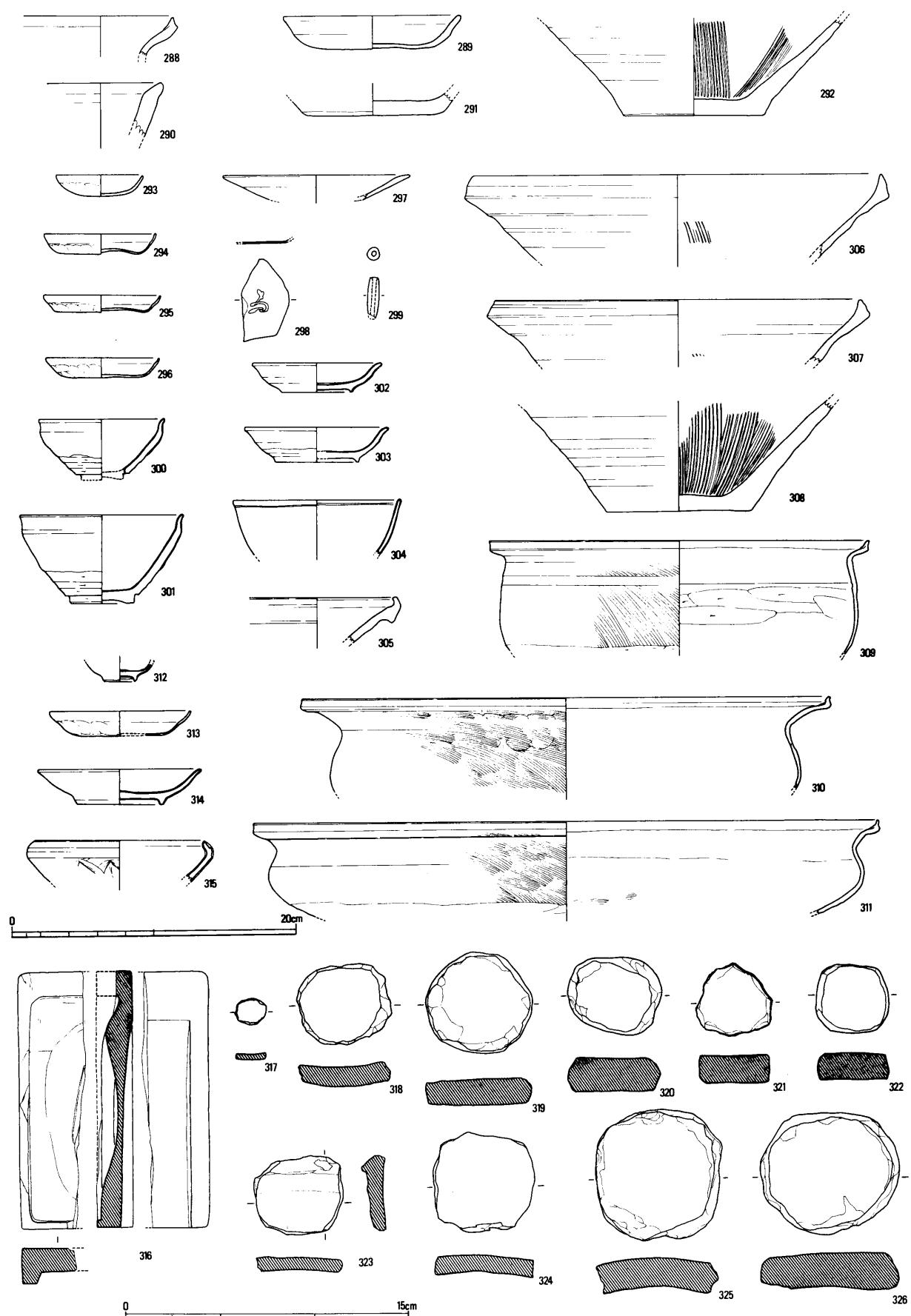


fig.40 遺構外・ピット出土遺物および硯・円形加工品 (316~326は1:3、他は1:4)

3) 瓦類

瓦類には、軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦・伏鉢？・雁振瓦・鰯面戸瓦・二の平瓦・隅切り瓦・丸瓦・平瓦がある。出土点数は各項目に記した。以下、個々に観察する。

軒丸瓦(327～330) 右巻きの巴文軒丸瓦である。9個体出土した。4個体分を図示したが、范型は同形ないしは同范と考えられる。この形態以外のものは出土していない。完形品がないので復元図をfig.41に示す。瓦当部の直径は約14.2cmである。内区は直径約11.4cmで、その中に直径約9.0cmの圈線を施し、圈線内に巴を3尾で構成し、圈線外に43個の珠文を施している。巴は、内側の角度が急で、外側はなだらかである。1尾の巴は内区外縁の半周以上を巡り、長いものであるといえる。

丸瓦部は玉縁を呈する。また、凹面の玉縁寄りには滑り止め（引掛け）が施されている。

329の資料によって瓦当部と丸瓦部との接合方法を見ると、「瓦当成形粘土、接合粘土が厚く、丸瓦の先端が瓦当に近い位置にあるもの」に相当することがわかる。

軒平瓦(331～333) 菊花唐草文軒平瓦の範疇に入るものであろう。5個体出土した。3個体分を図示したが、軒丸瓦と同様、范型は同形ないしは同范と考えられる。やはり、この形態以外の軒平瓦は出土していない。復元してみると、瓦当横幅は約18.8cm、縦幅は約4.7cmである。内区の左右と上部に圈線を施している。中央の菊花文は7枚の花弁で構成されている。唐草文はおそらく均整である。

平瓦部の凹面前方側縁には、「水返し」と呼ばれる引掛けが取りつけられている。また、凸部後方にも滑り止め（引っ掛け）が付けられている。平瓦部凹面・凸面ともにナデ調整がなされており、凸面にはハナレ砂が認められる。

鬼瓦(334・335) 2点あるが、同一個体であろう。2点とも周辺部である。334は正面左上の部分、335は正面右下隅に相当する部分の破片と考えられる。ヘラ状工具によって区画を行った後、竹管状のもので円形の施文を行っている。内側はケズリ状の調整が施されている。

伏鉢？(336) 円弧を描く破片である。1点出土

した。復元すると、径約34.0cmになる。この形態から、屋根の頂点に用いられる露盤のうちの伏鉢であろうと思われる。留蓋の可能性もあるが、丸瓦と重なる部分に作られる抉りがないため否定的である。内面下部にはヘラケズリが施されている。下端接地面には成形時に用いたと思われる板状の下敷きの痕跡が認められる。

雁振瓦(337・338) 7点出土し、2点を図示した。凹面には布目痕と糸切り痕が認められる。

鰯面戸瓦(346～348) 3点を図示した。丸瓦と同じ型によって製作されたもので、丸瓦の縦方向に向かって左下がり方向に切断されているもの(346)と右下がり方向に切断されているもの(347・348)がある。前者は9点、後者は13点出土した。それぞれ、切断後凹面の両端を面取りしている。凹面・凸面の調整は、丸瓦と同じである。

二の平瓦(343) 2点出土し、1点を図示した。軒平瓦の水返しに引っ掛けるために、その部分を滑らかにカットしている。凹凸面ともにナデ調整されており、凸面にはハナレ砂が認められる。

隅切り瓦(345) 6点出土し、1点を図示した。平瓦を切断したものである。凹凸面ともにナデ調整されているものである。

丸瓦(339・340) 11点出土し、2点を図示した。幅約12.4cm、長さ約28.0cmのものである。残りの良い339の資料を中心に見ていく。面取りは、両側縁凹面側・広端縁の凹面側・玉縁部側縁の凸面側・玉縁部端面の凸面側に認めることができる。広端縁凹

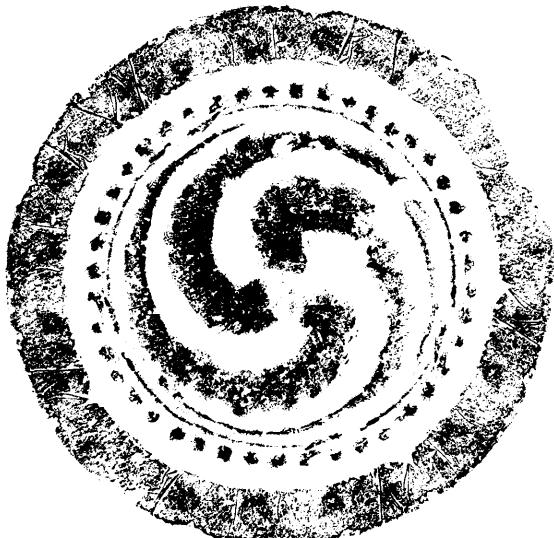


fig.41 大蓮寺跡出土軒丸瓦復元図（1：2）

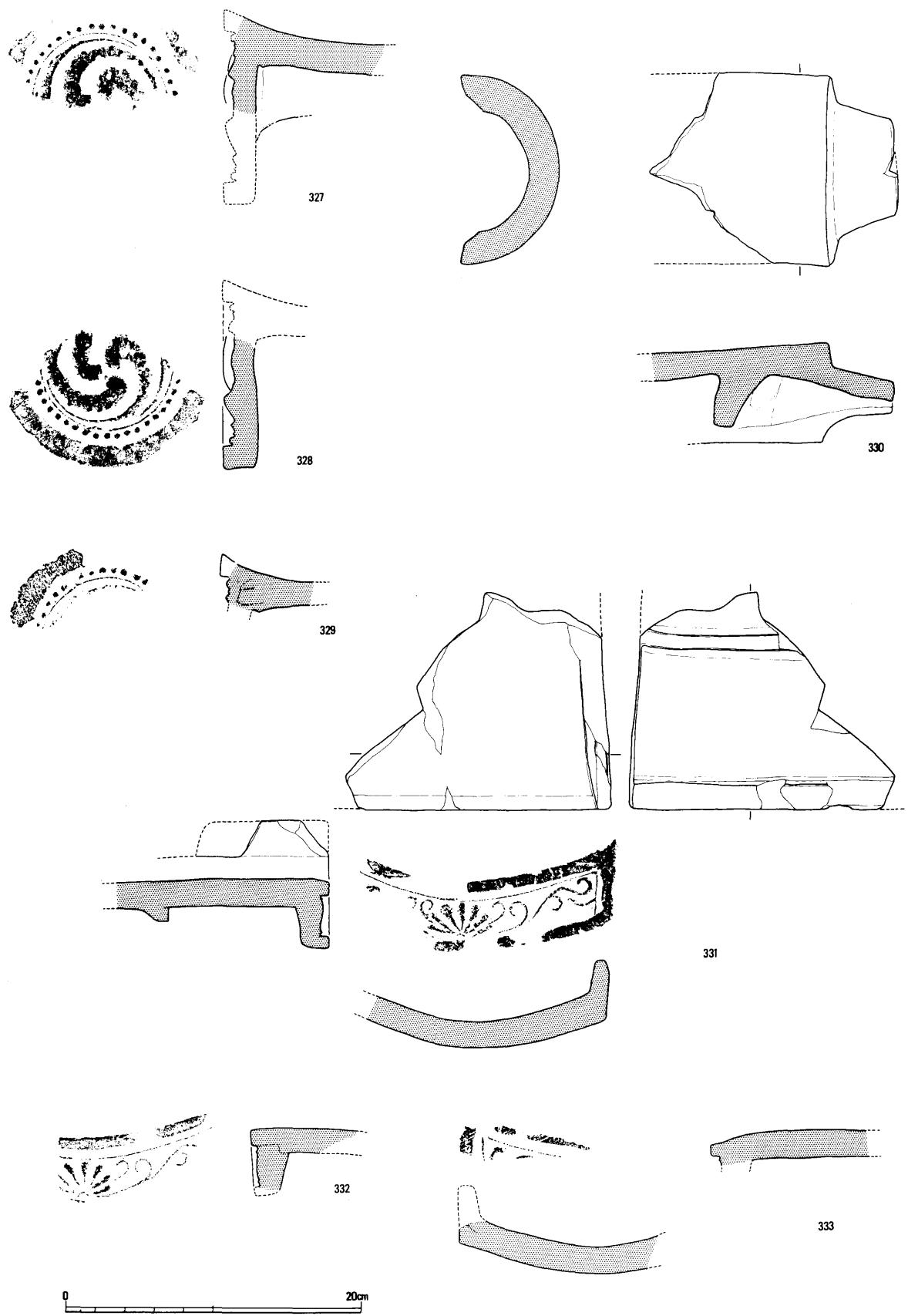
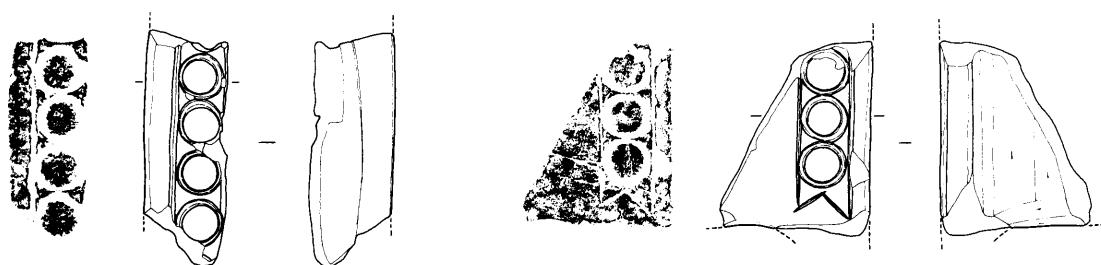


fig.42 大蓮寺跡出土瓦(1) (1 : 4)



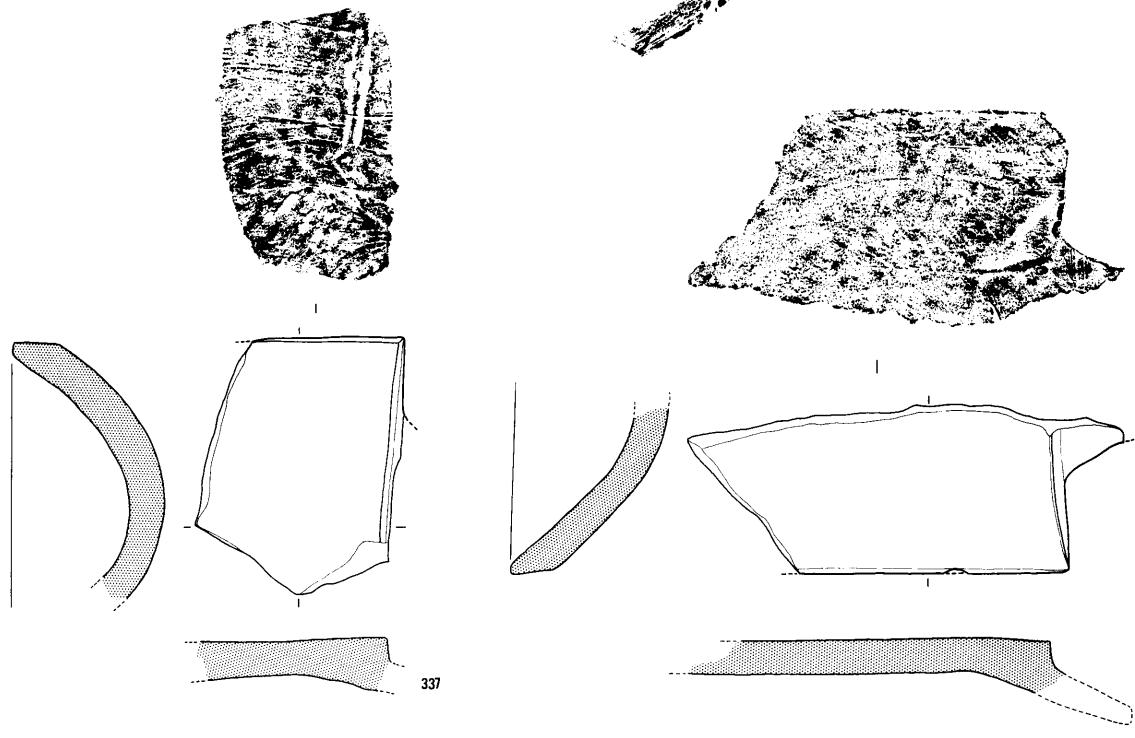
334

335



336

0 20cm



337

338

fig. 43 大蓮寺跡出土瓦(2) (1 : 4)

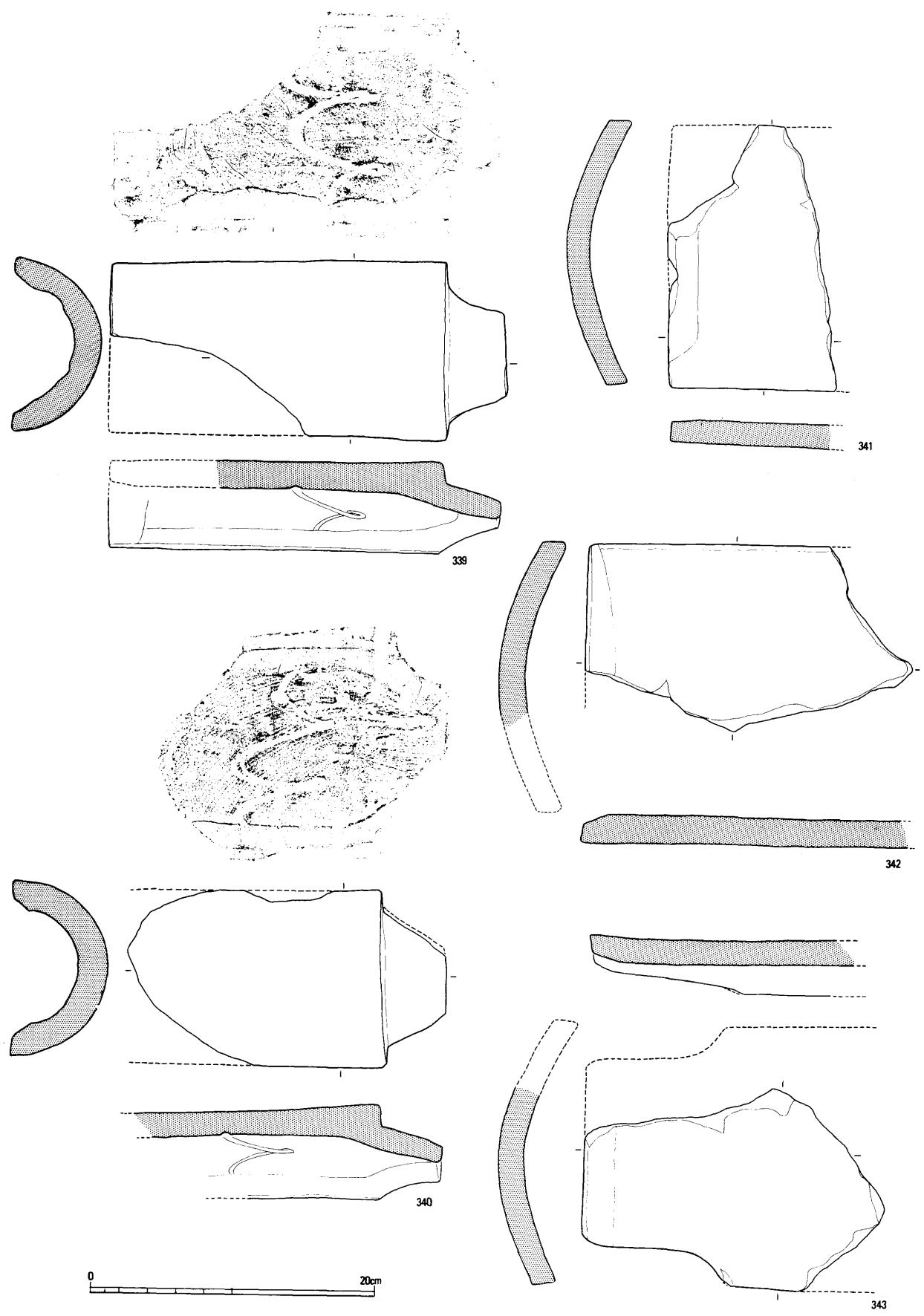
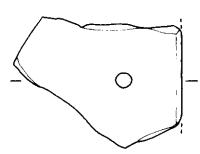
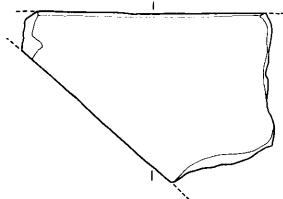
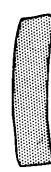


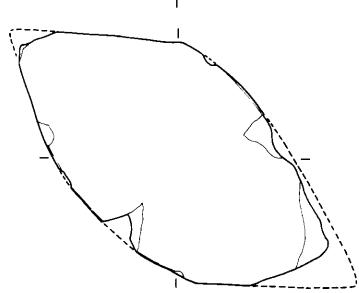
fig. 44 大蓮寺跡出土瓦(3) (1 : 4)



344

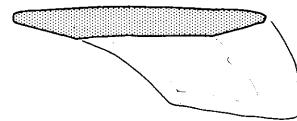
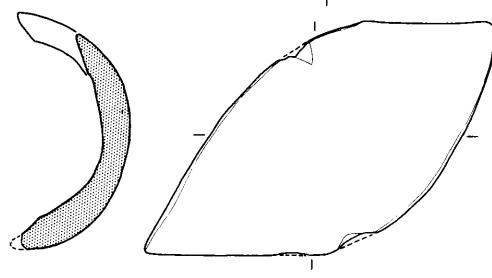
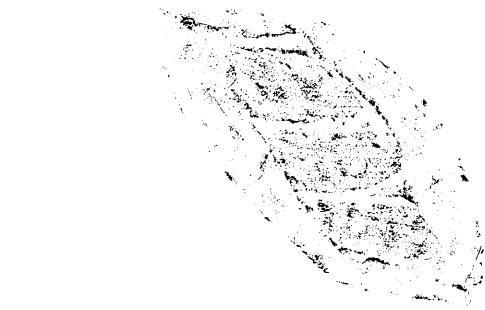
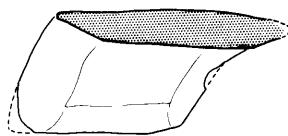


345

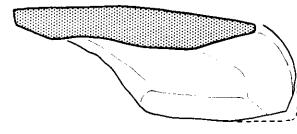
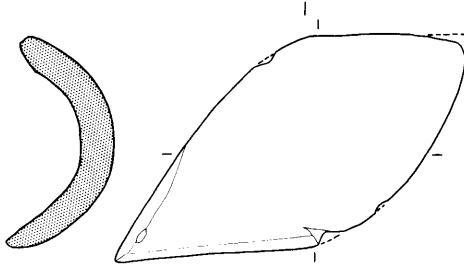
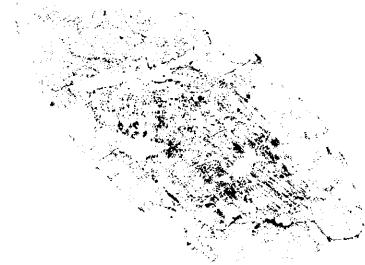


346

0 20cm



347



348

fig. 45 大蓮寺跡出土瓦(4) (1 : 4)

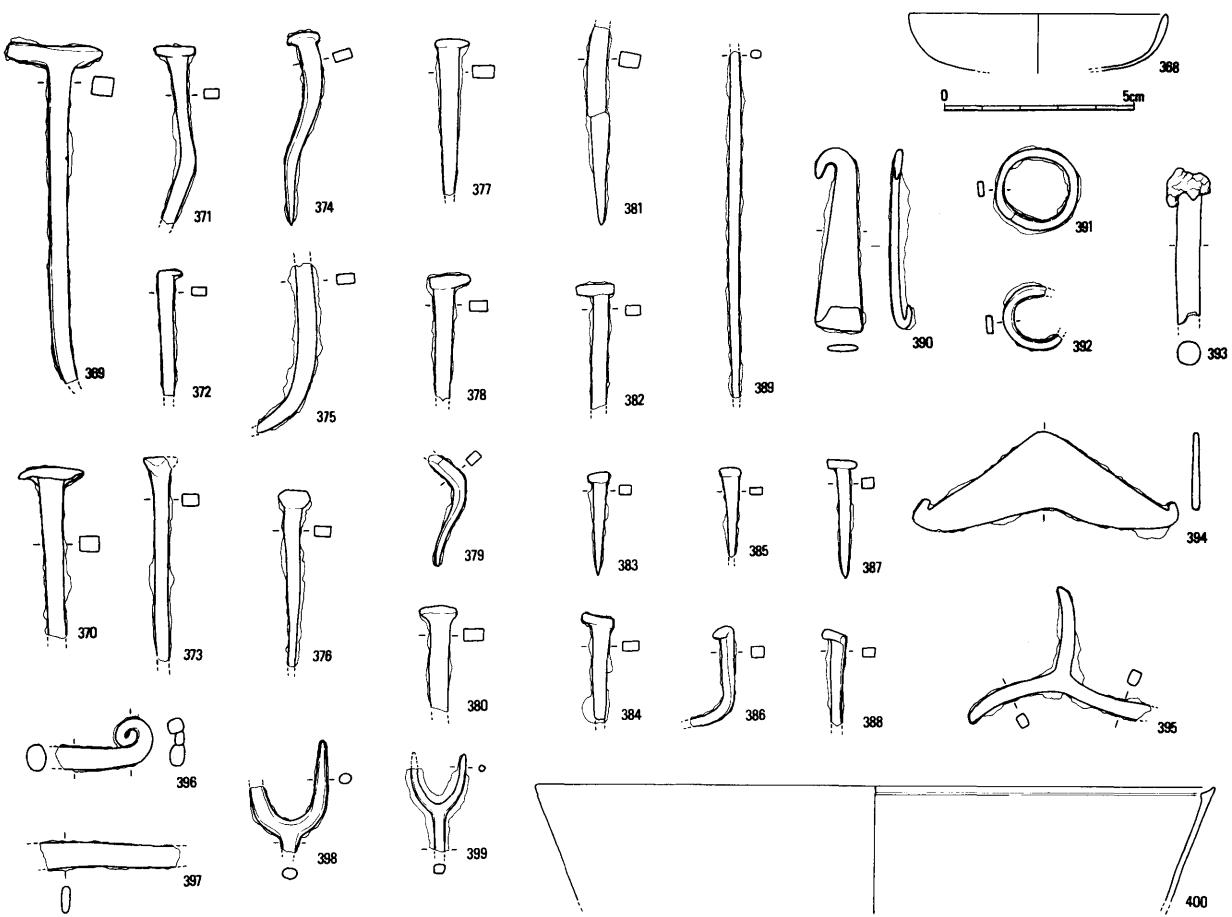
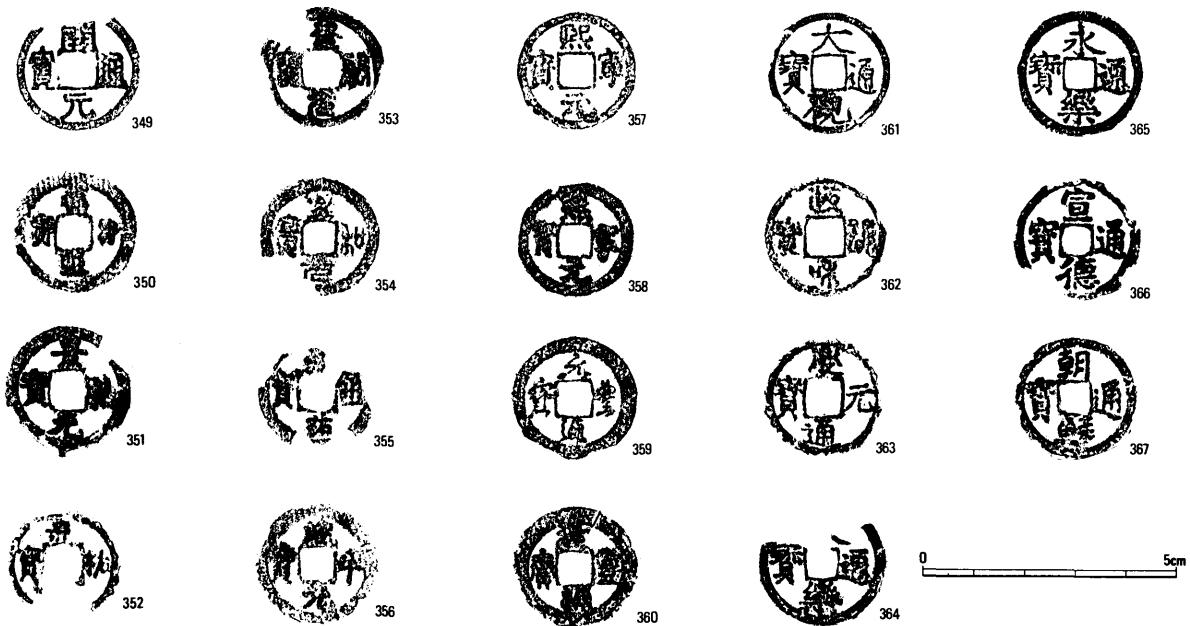


fig.46 大蓮寺調査区出土金属製品 (349~367は2:3、368は1:2、他は1:3)

面側の面取りは、縁片だけさらに行われている。玉縁部側縁の凹面側の面取りは、丸瓦部にかけて一氣に行われているものである。凹面には布目痕・糸切り痕とともに吊り紐痕も認めることができる。吊り紐は頂部でループさせるもので、佐川正敏氏の分類による「吊り紐C型」に相当する。

凸面は、ミガキ調整がなされている。

平瓦(341・342) 25点出土し、2点を図示した。全体の形状を知ることができる資料は出土していない。341の資料から、幅は約18.8cmであることを知ることができる。凹凸面ともにナデ調整がなされており、凸面にはハナレ砂が認められる。後端面には、伏鉢としたものと同様の板状圧痕のあるものがある。

釘孔を持つ瓦(344) 小片であるために全体の形状を窺うことができないが、丸瓦のようなカーブを描かないため、おそらく平瓦であろうと思われる。内外面ともにナデ調整されている。

4) 金属品類

金属製品では貨幣の他、各種の鉄製品がある(tab. 18・19)。また、製品ではないが鉄滓も若干出土している。

貨幣 大蓮寺跡周辺からは、北宋・南宋・明といった中国銭の他、朝鮮・李氏朝鮮時代の「朝鮮通寶」も出土している。

2. 平成2年度調査区の遺物

平成2年度調査区からの出土遺物は極めて少ない。土師器・瓦器・陶器・磁器がある。

土師器では、皿B 1(410~413)・鍋(414~416)がある。いずれも南伊勢系のものである。皿は口縁部径が12cm内外のものであるが、大蓮寺調査区のものよりは器壁が厚めで胎土も粗く、若干古いものと思われる。したがって、14世紀後半を中心とした時期のものと考えておきたい。鍋は全て小片である。第2段階b型式のものがある。しかし、皿と共に伴するものかどうかはわからない。

瓦器(407~409)は、前述の工房跡周辺出土のもの

鉄釘 大蓮寺跡周辺から出土した鉄釘は、工房跡周辺のものと比べて大小各種のものを認めることができる。369の資料はかなり大形のもので、寺院建築と関連したものなのかも知れない。

火打ち鎌(394) 打撃を加える方の反対側を若干窪ませているものである。県内では南山遺跡(松阪市)・楠ノ木遺跡(玉城町)に類例がある。

鉄鍋(400・401) 今回の調査区からは、鉄鍋と考えられる資料が破片で幾つかみつかっている。そのうちの口縁部に相当する資料を掲載した。2点とも頸部を持たずに洗面器状を呈するものであると考えられる。口縁端部は内側に突出させているものである。鉄製の煮沸用具は、県内では蚊山遺跡(玉城町)^⑨で3点、阿形遺跡(松阪市)^⑩で1点、三宅西条城跡(鈴鹿市)^⑪で1点の、計6例あるのみである。

用途不明鉄製品 用途不明な鉄製品では、円形輪状のもの(391・392)、三叉のもの(395)、蕨手状の基部を持つもの(396)、ヤス状のもの(398・399)、外側に木質が認められるもの(393)がある。

5) 石製品類

石製品では、硯(316)および砥石(286・287)がある。硯は極めて良く使い込まれているものである。286の砥石は細く、小形の削器用ではないかと考えられる。

と、基本的には同じ型式に相当するものであろう。量的にこの調査区に多いのは、この型式の瓦器の時期的ピークが14世紀後半にあることを示すのかも知れない。

陶器は、山茶椀(404)、入子(405)、皿(406)がある。山茶椀は包含層出土で、当調査区の建物の時期を示すものではない。

磁器には、青磁碗(402・403)がある。ともに高台内面にまで釉がかかるものである。402の資料は内面見込みに双魚文のあるもので、現存しているのは赤色をした魚の尾の部分である。

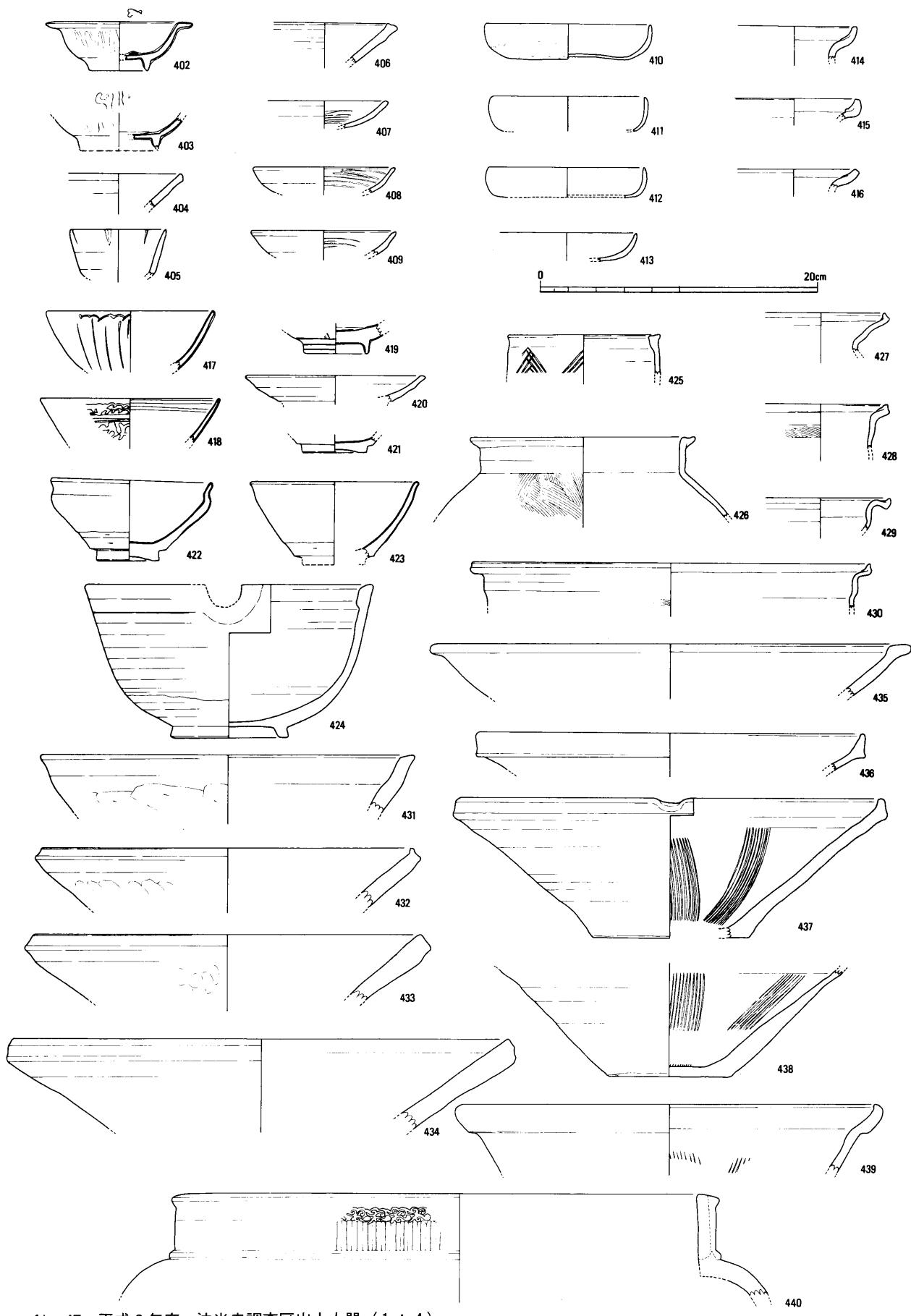


fig.47 平成2年度・法光寺調査区出土土器 (1 : 4)

3. 法光寺調査区の遺物

法光寺調査区からは、土器類・瓦類の他、金属品類が出土している。金属品類は良好なものがなく、図示はしていないが、若干の鉄釘がある。

1) 土器類

土器類では、土師器・陶器・磁器・瓦質土器がある。

土師器 皿・鍋類・茶釜・十能などがあるが、図示できたのは鍋・茶釜のみである。図示した以外のものを含めても、南伊勢系のみである。鍋類(427～430)には、近世以降の焙烙(429)も含まれる。

陶器 陶器には、瀬戸産天目茶碗(421～423)、瀬戸産片口鉢(424)、瀬戸産擂鉢(435～439)、常滑産ねり鉢(432～434)の他、産地不明の皿(420)・鉢(425)・ねり鉢(431)がある。

天目茶碗は、藤澤良祐氏による編年によれば、17世紀後半あたりに比定できそうである。^②

擂鉢は、藤澤良祐氏による編年の大窯Ⅰ期のもの(436～438)、大窯Ⅱ期のもの(425)の他、18世紀前半代のもの(439)がある。

磁器 磁器には青磁(417)と染付(418・419)がある。青磁は外面に蓮弁文を線表現するものである。

瓦質土器 風呂と思われるものがある(440)。口縁端部外面の下にスタンプによる唐草状の模様を表現している。

2) 瓦類

瓦類には、軒丸瓦・軒平瓦・留蓋ないしは鬼瓦・雁振瓦・蟹面戸瓦・丸瓦・平瓦がある。

軒丸瓦(441・442) 右巻きの巴文軒丸瓦である。2個体分を図示したが、同形ないしは同范と考えられる。この形態以外のものは出土していない。完形品がないので、復元図をfig.48に示す。これによれば、瓦当部の直径は約14.8cmである。内区の直径は約12.0cmで、その中に直径約8.1cmの圈線を施している。圈線内には巴文を3尾で構成し、圈線外には珠文を24個配している。巴文は中心で3尾が繋がる形態で、断面は平たいものである。

軒平瓦(443・444) 小片のため、どのような文様構成になるのかは不明である。内区に圈線の認められるもの(444)と認められないもの(443)とがあ

り、2種類存在するのかも知れない。443の資料は、凹面に布目痕が明瞭に認められる。

用途不明瓦(448) 同心円状の模様が施されているが、施文部分は球状ではなく、平坦である。施文はヘラ状工具による。内面にはナデが施されている。留蓋か鬼瓦あるいは露盤の一部と考えられるが、他の瓦と違ってこの個体のみ褐色を呈するもので、全く別のものであることも考えられる。

雁振瓦(447) 内面に布目痕が認められる。

蟹面戸瓦(449) 大蓮寺跡のものとは異なり、丸瓦を真横にカットして製作されているものである。凹面には布目が認められる。

丸瓦(445) 玉縁を持たない形式である。釘穴を有している。丸瓦の出土は、この資料をふくめて2点しかなく、法光寺跡の丸瓦の形式がいわゆる「行基葺」なのかどうかはわからない。

平瓦(446) 凹面には布目痕が認められる資料を図示した。ただし、布目痕のある資料は、法光寺跡でも大勢を占めるわけではなく、ナデ消されているものが多い。なお、法光寺跡の平瓦は、大蓮寺跡と比べて厚さがまちまちである。

(註)

① 繩文土器については、田村陽一氏・穂積裕昌氏（三重県埋蔵文化財センター）のご教示による。

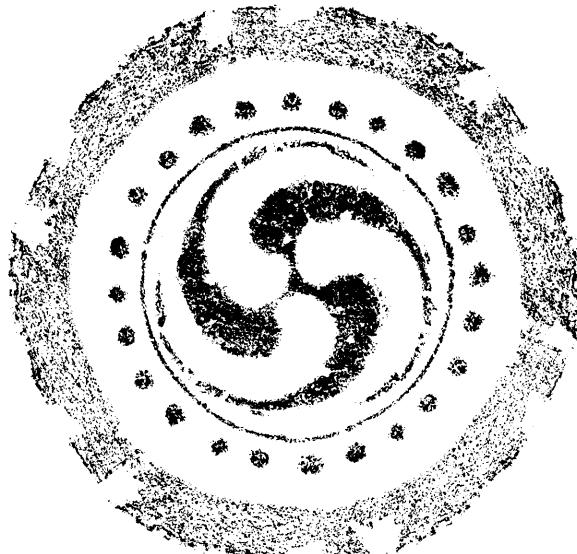


fig.48 法光寺跡出土軒丸瓦復元図 (1 : 2)

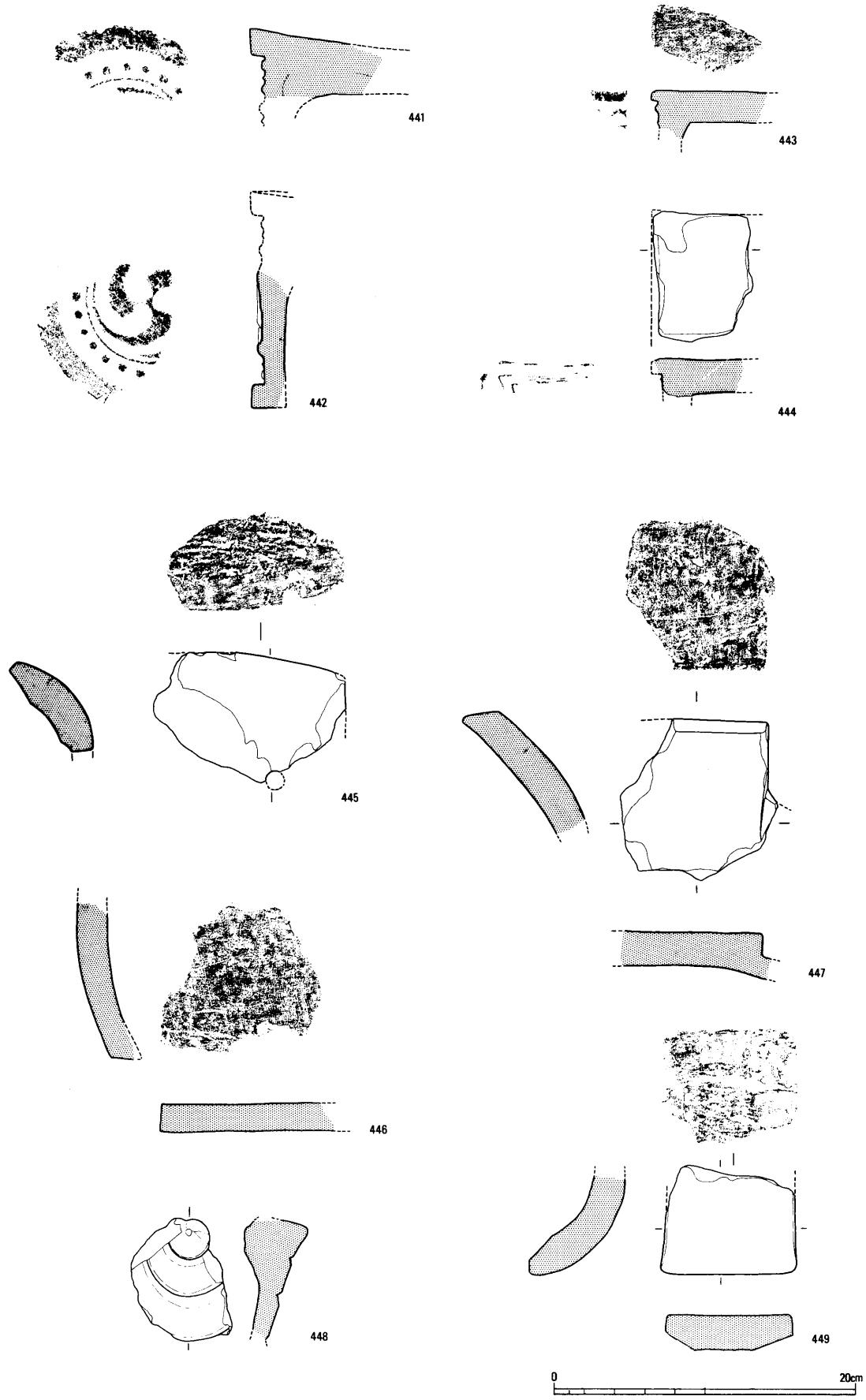


fig.49 法光寺跡出土瓦 (1 : 4)

- ② 伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」（『Miehi story』vol.1 1990）
- ③ 藤澤良祐「瀬戸地方の北部系山茶碗窯」（『尾呂』瀬戸市教育委員会 1990）
- ④ 小坂宜広・前川嘉宏・稻本賢治「度会郡玉城町・蚊山遺跡」（『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査概報』VI 三重県埋蔵文化財センター 1990）
- ⑤ 田村陽一「积尊寺遺跡」（『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告』第1分冊1 三重県教育委員会 1989）
- ⑥ 山田猛「伊賀の瓦器に関する若干の考察」（『中近世土器の基礎研究』II 1986）
- ⑦ 龜井明徳氏（専修大学）のご教示による。
- ⑧ 工房跡周辺出土土器の構成比率は、各遺構および包含層出土土器を、グリットごとでそれぞれカウントする方法によって求めた。土師器類は、口縁部の1/8以上残存しているものを中心に入数えている。したがって、体部片の場合は、1点として数えていない場合が多い。
- ⑨ 文字の判読については、小林秀氏（三重県埋蔵文化財センター）のご教示による。
- ⑩ 藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」（『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』V 1986）
- ⑪ 山田猛「下郡遺跡群出土の擂鉢」（『Miehistory』vol.1 1990）
- ⑫ 龜井明徳氏（専修大学）のご教示による。
- ⑬ 大蓮寺跡周辺出土土器の構成比率の求め方は、南伊勢系の土師器皿類以外は工房跡周辺の方法と同じである。南伊勢系の土師器皿類については、以下の方法で求めた。
- ① 土師器皿類を形態的に類似するものによって、大（D 1・2・3・C 1）・中（C 2・D 4）・小（B 2）とにわける。これは、小片の場合、各形態の異なりが分からないものが多いためである。
- ② 大・中・小のなかで、実測したり、実測はしなかったものの抽出が可能なものの点数をカウントし、それぞれの比率を出す（大：中：小=79：74：43）。百分率では、それぞれ約22・38・40%となる。
- ③ 各グリット単位・各遺構単位で、土師器皿の破片重量を計測し、集計する（総重量約16,096 g）。
- ④ 大・中・小の各資料中における完形品の重量を計測し、その平均値を求める（それぞれ10.5・15.5・27.0 g）。
- ⑤ ②・④の結果から、それぞれの重さの比率を求める（小： $10.5 \times 0.22 = 2.31$ 中： $15.5 \times 0.38 = 5.89$ 大： $27.0 \times 0.40 = 10.8$ $2.31 + 5.89 + 10.8 = 19.0$ $2.31 / 19.0 = 0.12$ （小） $5.89 / 19.0 = 0.31$ （中） $10.8 / 19.0 = 0.57$ （大））。
- ⑥ 総重量に重さの比率を乗じ、それをそれぞれの重さで割る
 $(16,096 \times 0.12 = 1,931.52)$ $1,931.52 \div 10.5 = 184$ （個）（小）
 $16,096 \times 0.31 = 4,989.764$, $989.76 \div 15.5 = 322$ （個）（中） $16,096 \times 0.57 = 9,174.729$, $174.72 \div 27.0 = 340$ （個）（大）。
- 計測データーは、筆者が保管している。
- ⑭ 瓦の観察については、小林謙一・佐川正敏「平安時代～近世の軒平瓦」（『伊河留我』10 法隆寺昭和資材帳編纂所 1989）および『法隆寺の至宝』第15巻 小学館 1992）を参照した。また、乾哲也氏・上原真人氏・駒井正明氏・佐川正敏氏・坪之内徹氏および河北秀実氏・福田哲也氏から数々のご教示を得た。
- ⑮ 瓦の個体数は、丸・平瓦は、前後各端面の隅をそれぞれ数える方法で行い、4隅のうち最も数が多いものの点数とした。したがって、この点数はあくまでも出土最小値である。丸・平瓦以外は、それぞれの出土点数を数えたものである。
- ⑯ 註⑭小林・佐川文献p22 上段114～15
- ⑰ 註⑭小林・佐川文献
- ⑱ 下村登良男「南山遺跡発掘調査概報」I（松阪市教育委員会 1979）
- ⑲ 伊藤裕偉ほか『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査報告』第3分冊 楠ノ木遺跡（三重県埋蔵文化財センター 1991）
- ⑳ 稲本賢治ほか『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査報告』第4分冊 蚊山遺跡所里垣地区（三重県埋蔵文化財センター 1992）
- ㉑ 平成3年度三重県埋蔵文化財センター調査
- ㉒ 伊藤久嗣ほか『三宅西条城跡発掘調査報告』（三重県教育委員会 1983）なお、当報告書ではこれを「不明鉄製品」として扱っているが、形態的に見て、おそらく鉄鍋の「つる」の部分であろう。
- ㉓ 近世の瀬戸産陶器については、藤澤良祐氏による以下の文献に挿った。
「本業焼の研究(2)－赤津村・上水野村を中心に－」（『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』VII 1988）「本業焼の研究(3)－下品野村・下半田川村を中心に－」（『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』VIII 1989）

No.	器種	地区	遺構・層名	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	実測No.
1	縄文 小形注口土器	e 2	S H117 西	(口)9.0	外:ナデ・ミガキ 内:ナデ	粗0.5~2.0mm の小石	良好	灰黄~ オリーブ黒	口縁20		60-1
2	縄文 注口土器	e 2	S H117	-	外:条線のち刺突 内:ナデ	粗0.5~2.0mm の小石,角閃石	良好	淡黄橙	小片		58-5
3	縄文 注口土器	e 2	S H117	-	外:沈線のち充填縄文 内:ナデ	粗0.5~2.0mm の小石,角閃石	良好	黄灰~ 淡黄橙	小片		58-6
4	縄文 注口土器	e 2	S H117	-	外:沈線 内:ナデ	粗0.5~2.0mm の小石,角閃石	良好	灰黄褐	小片		58-7
5	縄文 注口土器	e 2	S H117 p10	-	外:沈線のち円形刺突 内:ナデ	粗0.5~2.0mm の小石,角閃石	良好	淡黄~灰	小片		58-1
6	縄文 深鉢	e 2	S H117	-	外:沈線のち充填縄文 内:ナデ	粗0.5~3.0mm の小石,角閃石	良好	灰黄褐	口縁20	波状口縁	58-3
7	縄文 深鉢	e 2	S H117 p9	(口)18.6	外:沈線のち充填縄文 内:ナデ	粗0.5~2.0mm の小石	良好	淡褐	口縁20		60-3
8	縄文 深鉢?	e 2	S H117 西	-	外:沈線のち充填縄文 内:ナデ	粗0.5~2.0mm の小石	良好	淡黄橙~ 黒褐	小片		59-1
9	縄文 深鉢?	e 2	S H117 西	-	外:沈線のち充填縄文 内:ナデ	粗0.5~3.0mm の小石	良好	淡黄橙	小片		59-2
10	縄文 深鉢?	f 2	S K109	-	外:沈線のち充填縄文 内:ナデ	粗0.5~2.0mm の小石,角閃石	良好	淡黄橙	小片	S H117からの混入	59-4
11	縄文 深鉢?	e 2	S H117 西	-	外:沈線 内:ナデ	粗0.5~2.0mm の小石,角閃石	良好	灰褐	小片	外面に煤付着	58-2
12	縄文 深鉢?	e 2	S H117 西	-	外:沈線 内:ナデ	粗0.5~2.0mm の小石,角閃石	良好	黑褐~橙	小片	外面に煤付着	58-4
13	縄文 深鉢?	e 2	S H117	-	外:沈線 内:ナデ	粗0.5~2.0mm の小石	良好	淡黄橙	小片		59-3
14	縄文 深鉢	e 2	S H117 p2	-	外:ランダムな縄文 内:ナデ	粗0.5~4.0mm の小石,角閃石	良好	淡黄橙	体部片		59-5
15	縄文 深鉢	e 2	S H117東 南東隅柱穴	-	外:ナデのち縄文 内:	粗0.5~2.0mm の小石	良好	灰褐	口縁30	外面に煤付着	60-4
16	縄文 壺	e 2	S H117	(頸) 18.2	外:ミガキ 内:オサエのちナデ	粗0.5~2.0mm の小石	良好	淡褐	頸部25		66-1
17	縄文 壺	e 2	S H117	-	外:ナデ 内:ナデ	粗0.5~3.0mm の小石,角閃石	良好	淡黄橙	小片		60-2
18	縄文 (底部)	e 2	S H117 p13	(底)6.0	外:ナデ 内:ナデ	粗0.5~2.0mm の小石	良好	淡黄	底部25		54-2
19	縄文 (底部)	e 2	S H117 p11,12	(底)5.8	外:ナデのちミガキ 内:ナデのちミガキ	粗0.5~2.0mm の小石	良好	淡橙	底部50		54-1
20	弥生 壺	e17	S K72	(口)16.6	外:ヨコナデのち波状文 内:ヨコナデのち巻状刻み	粗0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄橙	口縁10		56-3
21	弥生 壺	c11	黒褐色土		外:ヨコナデのち波状文 内:ヨコナデのち巻状刻み	粗0.5~1.0mm の小石	良好	橙	口縁5未満		55-1
22	弥生 壺	d15	S K98	(口)12.8	外:ハケメのち刻み目 内:ハケメ	粗0.5~2.0mm の小石	良好	淡橙	口縁12	脚台部かも知れない	54-3
23	弥生 壺	e17	暗褐土	-	外:横描横線文 内:ハケメ	密0.5~3.0mm の小石	良好	橙褐	体部片		56-2
24	弥生 蓋	c 12	黒褐色土	(口)15.4	外:ハケメ 内:ハケメ	粗0.5~2.0mm の小石	良好	黄橙	口縁10		55-2
25	弥生 壺	c 12	S D93	(口)17.0	外:ハケメのち口縁部に 刻み目 内:ハケメ	粗0.5~2.0mm の小石	良好	橙褐	体部12	外面に煤付着	55-3
26	弥生 壺	e17	暗褐土	(口)19.4	外:ハケメのち口縁部に 刻み目 内:ハケメ	粗0.5~3.0mm の小石	良好	黄橙	口縁12		57-2
27	弥生 壺	e17	淡褐土	(口)15.2	外:ハケメのち口縁部に 刻み目 内:ハケメ	粗0.5~3.0mm の小石	良好	淡橙	口縁20	外面に煤付着	57-1
28	弥生 壺	e18	黒褐色土	(口)18.2	外:ヨコナデのちハケメ 内:ヨコナデのちハケメ	粗0.5~2.0mm の小石	良好	淡橙	口縁12		56-1
29	弥生 壺	d15	暗褐土	(口)22.5	外:ヨコナデのちナデ 内:ヨコナデのちハケメ	粗0.5~3.0mm の小石	良好	淡黄橙	口縁5		54-4
30	弥生 壺	e17	淡褐土	(口)25.6	外:ハケメのちヨコナデ 内:ハケメのち横部ハケメのち 横部の刻み目 内:ハケメ	粗0.5~4.0mm の小石	良好	淡褐	口縁12	外面に煤付着	61-1
31	弥生 壺	e17	淡褐土	(底)5.0	外:オサエのちナデ 内:ナデ	粗0.5~2.0mm の小石	良好	淡黄橙	底30	外面に煤付着	56-5
32	弥生 壺?	e17	淡褐土	(底)5.6	外:オサエのちナデ 内:ナデ	粗0.5~2.0mm の小石	良好	淡橙	底25		56-4
33	弥生 壺	d12	淡褐土	(底)4.2	外:ハケメ・ナデ 内:ナデ	粗0.5~1.0mm の小石	良好	淡橙	底100		54-5
34	弥生 壺	e17	暗褐土	(脚台) 7.2	外:ナデのちハケメ 内:ナデ	粗0.5~3.0mm の小石	良好	淡黄橙	脚台25		57-4
35	土師器 小皿 (A1)	d22	p i t 21	(口)7.0 (高)0.8	外:オサエのちナデ 内:ナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	灰黄褐	100		13-2
36	土師器 小皿 (A1)	d21	p i t 20	(口)7.6 (高)1.0	外:オサエのちナデ 内:ナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	淡黄	80		12-7
37	土師器 小皿 (A1)	d22	黒褐色土	(口)7.6 (高)1.0	外:オサエのちナデ 内:ナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄橙	50		10-2
38	土師器 小皿 (A1)	d22	S K66	(口)7.8 (高)1.0	外:オサエのちナデ 内:ナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄灰	33		5-3
39	土師器 小皿 (A1)	c 21	黒褐色土	(口)7.9 (高)1.1	外:オサエのちナデ 内:ナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄	33		7-2
40	土師器 小皿 (A1)	e23	S K11東	(口)7.8 (高)0.9	外:オサエのちナデ 内:ナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	淡黄灰	66		2-1

tab. 5 出土土器観察表(1)

No	器種	地区	遺構・層名	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	実測No
41	土師器 小皿(A1)	d21	S K 67	(口)7.2 (高)0.9	外:オサエのちナデ 内:ナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡橙	100		5-7
42	土師器 小皿(A1)	e22	S K 20	(口)7.2 (高)0.9	外:オサエのちナデ 内:ナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	淡橙	100		2-9
43	土師器 皿(B1)	f 22	S K 11 石組裏込め	(口)10.5 (高)2.5	外:オサエのちナデ 内:ナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	淡黄灰	33		2-6
44	土師器 皿(B1)	e21	p i t 5	(口)11.2	外:オサエのちナデ 内:ナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄灰	33		12-3
45	土師器 皿(B1)	d21	p i t 15	(口)11.2 (高)3.1	外:オサエのちナデ 内:ナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	淡白茶	100	内面に工具痕跡 外面に煤付着物	12-1
46	土師器 皿(B1)	d22	p i t 21	(口)11.0 (高)2.8	外:オサエのちナデ 内:ナデ	粗0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄灰	40	外面底に板状圧痕	13-3
47	土師器 皿(B1)	d21	p i t 23	(口)11.1 (高)2.7	外:オサエのちナデ 内:ナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄灰	20		13-4
48	土師器 皿(B1)	d21	p i t 15	(口)11.0 (高)2.4	外:オサエのちナデ 内:ナデ	粗0.5~2.0mm の小石	良好	淡黄橙	25		12-5
49	土師器 小皿	d21	p i t 23上	(口)7.4 (高)2.0	外:オサエのちナデ 内:ナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	淡黄	30	いわゆる「へそ皿」 大和產か?	13-5
50	土師器 小椀?	d21	S K 66	(口)8.7	外:ナデのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄灰	口縁20	系統・产地不明	5-2
51	土師器 皿	d21	S K 67	(口)12.6	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄橙	50	系統・产地不明 内面に朱?	6-3
52	瓦器 梗	e21	p i t 3	-	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちミガキ	密0.5~2.0mm の小石	良好	灰白~暗灰	5未満	伊賀型の系統?	12-2
53	土師器 杯	d16	黒褐土	(底)3.4	外:オサエのちナデ 内:ナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡橙	100		9-8
54	土師器 杯	c 23	S Z 10	(口)17.9	外:ナデのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	褐灰	口縁12		1-4
55	陶器 小杯	d21	黒褐土	(口)4.0 (高)1.5	外:ロクロナデのち糸切り 内:ロクロナデ	密0.5~1.0mm の小石	堅緻	釉黒褐 淡灰	30	瀬戸産	9-9
56	陶器 梗	c 22	黒褐土	(口)13.0	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密0.5~5.0mm の小石	堅緻	灰白	口縁12	山茶梗 瀬戸産	9-4
57	陶器 梗	e20	S K 48	(口)13.2	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密0.5~4.0mm の小石	堅緻	灰白	口縁12	山茶梗 瀬戸産	4-4
58	陶器 梗	d20	S K 74	-	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密0.5~3.0mm の小石	堅緻	灰白	5未満	山茶梗 瀬戸産	6-4
59	陶器 梗	c 22	黒褐土	(底)5.7	外:ロクロナデのち糸切り 内:ロクロナデ	密0.5~4.0mm の小石	堅緻	灰黄	底部60	山茶梗 高台に粗穀痕	9-7
60	陶器 梗	c 22	黒褐土	(底)5.6	外:ロクロナデのち糸切り 内:ロクロナデ	密0.5~1.0mm の小石	堅緻	灰白	底部30	山茶梗 瀬戸産	7-3
61	陶器 梗	e22 e23	S K 11北	(底)6.8	外:ロクロナデのち糸切り 内:ロクロナデ	粗0.5~2.0mm の小石	堅緻	灰黄	底部25	山茶梗 瀬戸産	2-5
62	陶器 梗	c 22	黒褐土	(底)6.8	外:ロクロナデのち糸きり 内:ロクロナデ	密0.5~6.0mm の小石	堅緻	灰白	底部100	山茶梗 瀬戸産	9-5
63	磁器 梗	d21	S K 77	(口)15.0	外:蓮弁文	密	堅緻	釉-淡緑灰 器-明褐灰	口縁10	青磁	6-5
64	磁器 梗	e20	黒褐土	(口)15.8	外:蓮弁文	密	堅緻	釉-淡緑灰 器-灰白	口縁10	青磁	7-6
65	磁器 梗	d21	S K 67	-	外:蓮弁文	密	堅緻	釉-明緑灰 器-灰白	底部20	青磁	6-6
66	磁器 梗?	d21	黒褐土	-	内:陰刻花文	密	堅緻	釉-淡青白 器-灰白	体部10?	白磁 景德鎮産?	10-1
67	陶器 茶梗	e19	S K 30	(口)11.6	外:ロクロナデのちケズリ 内:ロクロナデ	密0.5~1.0mm の小石	堅緻	釉-淡赤褐 器-淡黄橙	口縁25	天目茶梗 瀬戸産	4-1
68	陶器 茶梗	d22 d23	黒褐土	(口)12.0 (高)6.3 高台3.6	外:ロクロナデのちケズリ 内:ロクロナデ	密0.5~1.0mm の小石	堅緻	釉-黒褐 器-暗灰	20	天目茶梗 中国産	11-2
69	陶器 茶梗	d20	S K 59	(口)10.8	外:ロクロナデのちケズリ 内:ロクロナデ	密0.5~1.0mm の小石	堅緻	釉-暗褐土 器-淡黄橙	口縁12	天目茶梗 瀬戸産	5-4
70	陶器 ねり鉢	c 22	S K 12	-	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	粗0.5~2.0mm の小石	堅緻	暗灰	口縁5未満		2-7
71	陶器 皿	d21	p i t 16	(口)11.9 (高)3.0	外:ロクロナデのち糸切り 内:ロクロナデ	粗0.5~1.0mm の小石	堅緻	釉-淡緑黃 器-灰白	口縁12	縁釉皿 瀬戸産 内面にトチン跡	12-6
72	陶器 梗	c 22	S K 63	(口)14.8	外:ロクロナデのち糸切り 内:ロクロナデ	密0.5~1.0mm の小石	堅緻	釉-淡緑黃 器-灰白	口縁12	平梗 瀬戸産	5-6
73	陶器 梗	e22 e23	S K 11	(口)16.6 (高)6.2 高台5.2	外:ロクロナデのちケズリ 内:ロクロナデ	密0.5~3.0mm の小石	堅緻	釉-淡黄灰 器-淡灰	口縁33 高台100	平梗 瀬戸産 内面にトチン跡	4-5
74	陶器 盤	d22	p i t 14	(口)31.1	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	粗0.5~1.0mm の小石	堅緻	釉-淡緑黃 器-灰白	口縁10	瀬戸産	12-4
75	陶器 盤	d22 d23	黒褐土	(口)27.0	外:ロクロナデのちケズリ 内:ロクロナデ	密0.5~1.0mm の小石	堅緻	釉-淡緑黃 器-灰白	口縁10	瀬戸産	10-5
76	陶器 壺	e24 e25	S Z 9	-	外:ロクロナデのち押印 内:ナデ	密0.5~1.0mm の小石	堅緻	釉-綠白 器-灰白	体部片	瀬戸産	1-3
77	陶器 鉢皿	d22 d23	黒褐土	(口)17.0	外:ロクロナデのち糸切り 内:ロクロナデのち鉢目	密0.5~2.0mm の小石	堅緻	釉-淡黄 器-灰白	口縁66	瀬戸産	11-1
78	土師器 鍋	c 22	黒褐土	-	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡褐	口縁5		9-6
79	土師器 鍋	d20	S K 61	(口)20.8	外:ナデのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	粗0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄褐	口縁10	外面に煤付着	5-5
80	土師器 鍋	e20	S K 48	(口)21.7	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	粗0.5~1.0mm の小石	良好	淡橙	口縁10		4-3

tab. 6 出土土器観察表(2)

No.	器種	地区	遺構・層名	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	実測No.
81	土師器 鍋	e 19	S K71	(口)23.0	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	粗0.5~1.0mm の小石	良好	灰褐	口縁10	外面に煤付着	7-5
82	土師器 鍋	d 21	S K67	(口)27.0	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄	口縁10		6-2
83	土師器 鍋	c 21	黒褐土	(口)27.6	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	粗0.5~1.0mm の小石	良好	淡褐	口縁10		7-4
84	土師器 鍋	e 22 f 23	S K11南	-	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	粗0.5~2.0mm の小石	良好	淡黄灰	口縁5		2-3
85	土師器 鍋	c 22	S K12	-	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	灰黄褐	口縁5		2-8
86	土師器 鍋	c 20	黒褐土	(口)19.6	外:ハケメのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	淡黄橙	口縁20		7-1
87	土師器 鍋	d 22	S K66	(口)27.7	外:ハケメのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	黄褐	口縁25	外面に煤付着	5-1
88	土師器 鍋	e 24	黒褐土	(口)31.9	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	淡黄	口縁10	外面に煤付着	9-2
89	土師器 鍋	d 22	pit14	(口)31.6	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	粗0.5~2.0mm の小石	良好	灰黄褐	口縁10	外面に煤付着	13-1
90	土師器 鍋	e 24	黒褐土	(口)31.9	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	淡黄	口縁10	外面に煤付着	9-1
91	土師器 鍋	c 22 d 23	S K34	(口)27.2	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	粗0.5~2.0mm の小石	良好	灰黄褐	口縁10	外面に煤付着	4-2
92	土師器 鍋	e 24 e 25	S Z 9	(口)25.8	外:ハケメのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	淡黄橙	口縁10	外面に煤付着	1-2
93	土師器 鍋	e 22	S K11南	-	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密0.5~3.0mm の小石	良好	淡黄橙	口縁5		2-2
94	土師器 鍋	d 20	S K59	(口)25.0	外:ヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	淡黄褐	口縁10	外面に煤付着	6-1
95	土師器 鍋	d 21	黒褐土	(口)30.1	外:ヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	粗0.5~2.0mm の小石	良好	淡黄	口縁12	外面に煤付着	9-3
96	土師器 鍋	c 23	S Z 10	(口)30.3	外:ハケメのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡茶灰	口縁12	外面に煤付着	1-1
97	土師器 鍋	d 22 d 23	黒褐土	(口)33.8	外:ナデのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	粗0.5~2.0mm の小石	良好	淡黄橙	口縁10	外面に煤付着	10-3
98	土師器 鍋	d 22 d 23	黒褐土	(口)28.0	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	粗0.5~1.0mm の小石	良好	淡灰褐	口縁10		10-4
99	土師器 鍋	c 21 c 22	S K25	(口)37.7	外:ナデのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	粗0.5~2.0mm の小石	良好	淡黄	口縁12	外面に煤付着	3-2
100	瓦質土器 鍋	d 22	S K75	-	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡灰	小片	畿内産の瓦質土器	6-7
101	陶器 壺		黒褐土	(口)20.8	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	粗0.5~1.0mm の小石	堅緻	釉-淡赤褐 器-褐灰	口縁20	常滑産	19-1
102	土師器 羽釜	e 24	黒褐土	-	外:ナデのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	粗0.5~3.0mm の小石	良好	淡黄	口縁10		8-1
103	土師器 羽釜	e 22 f 23	S K11南	-	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	粗0.5~2.0mm の小石	良好	淡灰褐	口縁5		2-4
104	土師器 羽釜	d 21	pit25	(口)31.6	外:ナデ・ハケメのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	粗0.5~3.0mm の小石	良好	淡黄橙	口縁20	鈎部以下に煤付着	14-1
105	土師器 羽釜	e 20	S K30	(口)30.6	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	粗0.5~3.0mm の小石	良好	淡黄	口縁12		3-3
106	土師器 羽釜	e 20	S K30	(口)33.5	外:ナデのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	粗0.5~4.0mm の小石	良好	淡灰褐	口縁10	鈎部以下に煤付着	3-1
107	土師器 羽釜	e 24	黒褐土	(鉢)39.4	外:ナデ・ハケメのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	粗0.5~3.0mm の小石	良好	淡茶灰	鉢部12	鈎部以下に煤付着	8-3
120	土師器 小皿 (A1)	c 2	S K97	(口)7.0 (高)0.7	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	粗0.5~2.0mm の小石	良好	淡黄橙	40		17-3
121	土師器 小皿 (A1)	c 2	S K97	(口)7.0 (高)0.8	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄橙	33		17-2
122	土師器 小皿 (B2)	c 2	S K97	(口)7.5 (高)1.6	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄橙	33		17-1
123	土師器 小皿 (B2)	c 2	S K97	(口)7.7 (高)1.7	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	淡黄橙	100	口縁部に油煙痕	17-4
124	土師器 小皿 (B2)	c 2	S K97	(口)7.9	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	淡黄橙	50	口縁部に油煙痕	17-6
125	土師器 皿 (D2)	c 2	S K97	(口)15.0 (高)2.3	外:ナデのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~3.0mm の小石	良好	淡黄橙	25	外面に煤付着	17-5
126	磁器 梵	e 6	S K174	(高台) 3.9	外:横線の染付 内:	密	堅緻	釉-青灰・ 明灰	高台50	染付 中国産	50-8
127	土師器 皿 (B1)	e 6	S K174	(口)8.0 (高)1.7	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄橙	66		49-2
128	土師器 皿 (D2)	e 6	S K174	(口)14.0	外:ナデのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡茶灰	15	外面に板目状圧痕	49-3
129	磁器 人形	a 9	S D184上	-	外:上着と帯の表現 内:布目	密	堅緻	白	小片	中国産	46-3
130	土師器 鍋	a 9	S D184	-	外:ハケメのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	淡黄橙	口縁5	外面に煤付着	50-1
131	土師器 鍋	a 9	S D184	(口)27.8	外:ナデのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡茶灰	口縁10		50-5
132	土師器 鍋	a 9	S D184	(口)26.2	外:ナデのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄橙	体部20	外面に煤付着	64-1

tab. 7 出土土器観察表(3)

No.	器種	地区	遺構・層名	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	実測No.
133	土師器 小皿(B2)	b 11	S K102 p8	(口)6.2 (高)1.4	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄橙	100	内面に半円形のアタリ痕あり貝か?	20-9
134	土師器 小皿(B2)	b 11	S K102 p19	(口)6.6 (高)1.2	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄橙	40	内面に半円形のアタリ痕あり貝か?	20-10
135	土師器 小皿(B2)	b 11	S K102 p14	(口)6.2 (高)1.3	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡淡橙	66	内面に半円形のアタリ痕あり貝か?	21-2
136	土師器 皿(C1)	b 11	S K102 p5	(口)8.6 (高)1.1	外:ナデのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	淡橙	60	内面に半円形のアタリ痕あり貝か?	20-13
137	土師器 皿(C1)	b 11	S K102 p11	(口)8.6 (高)1.4	外:ナデのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄橙	66		20-6
138	土師器 皿(C1)	b 11	S K102 p2	(口)8.4 (高)1.5	外:ナデのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄橙	60	口縁部に油煙痕	20-12
139	土師器 皿(C1)	b 11	S K102 p16	(口)8.6 (高)1.4	外:ナデのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	淡黄橙	40		20-11
140	土師器 皿(C1)	b 11	S K102 p6	(口)8.8 (高)1.4	外:ナデのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	淡橙	80		20-4
141	土師器 皿(C1)	b 11	S K102 p21	(口)8.6 (高)1.5	外:ナデのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄橙	50		20-5
142	土師器 皿(D3)	b 11	S K102 p9	(口)10.6 (高)1.9	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	淡茶灰	33		20-8
143	土師器 皿(D3)	b 11	S K102 p7	(口)10.8 (高)2.0	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	淡黄橙	95	内面に半円形のアタリ痕あり貝か?	20-1
144	土師器 皿(D2)	b 11	S K102 p23	(口)11.0 (高)2.1	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄橙	66	外面に煤付着	20-7
145	土師器 皿(D2)	b 11	S K102 p4	(口)11.4 (高)2.3	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	淡黄橙	75		20-3
146	土師器 皿(D2)	b 11	S K102 p20	(口)12.0	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄橙	37		21-1
147	土師器 皿(D2)	b 11	S K102 p22	(口)12.8 (高)2.5	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	淡黄橙	66	口縁部に油煙痕	20-2
148	磁器 皿	d 6	S K152 p8	-	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	堅緻	灰白	口縁5	白磁 端反皿	33-3
149	磁器 皿	d 6	S K152	(高台)8.0	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	堅緻	灰白	高台12	白磁 端反皿	33-4
150	陶器 茶碗	d 6	S K152 p6	(口)12.0	外:ロクロナデのちケズ 内:ロクロナデ	密0.5~2.0mm の小石	堅緻	釉-淡赤褐 器-淡灰	口縁15	瀬戸産 天目茶碗	32-7
151	土師器 小皿(D4)	d 6	S K152 p4	(口)8.0 (高)1.5	外:ナデのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	淡茶灰	100		32-4
152	土師器 小皿(D4)	d 6	S K152 p7	(口)7.9 (高)1.4	外:ナデのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄橙	75		32-3
153	土師器 皿(D3)	d 6	S K152 p2	(口)9.6 (高)1.8	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	淡黄橙	100	外面に煤付着物	32-1
154	土師器 皿(D3)	d 6	S K152 p3	(口)10.1 (高)2.3	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄橙	100	外面底に板状圧痕	32-2
155	土師器 鍋	d 6	S K152 p1	(口)20.6	外:ナデのちヨコナデ・ ケズリ内:同	密0.5~3.0mm の小石	良好	淡褐	33	外面に煤付着	32-5
156	土師器 小皿(B2)	c 13	S K101	(口)6.0 (高)1.6	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	淡黄橙	50	内面に半円形のアタリ痕あり貝か?	27-4
157	土師器 小皿(B2)	c 12	S K101	(口)6.2 (高)1.7	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	淡黄橙	100		27-7
158	土師器 小皿(B2)	c 13	S K101	(口)6.5 (高)1.6	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡茶	100		27-8
159	土師器 小皿(C2)	c 13	S K101	(口)8.0 (高)1.5	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡橙	50		26-1
160	土師器 小皿(C2)	c 13	S K101 (SK87)	(口)8.1 (高)1.3	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	明褐灰	60		26-2
161	土師器 小皿(D4)	c 13	S K101	(口)8.6 (高)1.4	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	淡黄橙	80		27-3
162	土師器 小皿(D4)	c 13	S K101 (SK87)	(口)8.6 (高)1.6	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡橙	40		27-5
163	土師器 皿(D1)	c 13	S K101	(口)17.4 (高)3.7	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡褐	25		26-7
164	土師器 皿(SK87)	c 13	S K101 (SK87)	-	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	茶灰	5未満	南伊勢系の系統か	26-6
165	磁器 梵	c 13	S K101 (SK87)	-	外:蓮弁文	密0.5~1.0mm の小石	堅緻	釉-淡綠器-淡灰	5未満	青磁	26-5
166	陶器 茶碗	c 13	S K101 (SK87)	(口)13.1	外:ロクロナデのちケズリ 内:ロクロナデ	密0.5~1.0mm の小石	堅緻	釉-褐器-淡橙	40	天目茶碗 瀬戸産 銘釉	27-1
167	陶器 茶碗	c 13	S K101 (SK87)	(口)12.6 (高)6.4 (高台)4.2	外:ロクロナデのちケズリ 内:ロクロナデ	密0.5~2.0mm の小石	堅緻	釉-褐-黒器-淡灰	40	天目茶碗 瀬戸産 銘釉	27-2
168	土師器 小皿(B2)	c 14	S K83	(口)6.5 (高)1.4	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	淡黄橙	50	内面に半円形のアタリ痕あり	15-2
169	土師器 小皿(B2)	c 14	S K83 p36	(口)6.4 (高)1.4	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	粗0.5~1.0mm の小石	良好	淡橙	90		15-4
170	土師器 小皿(B2)	c 14	S K83	(口)6.4 (高)1.5	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡橙	100		15-3
171	土師器 小皿(B2)	c 14	S K83	(口)6.2 (高)1.4	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡橙	100	内面に半円形のアタリ痕あり	15-1
172	土師器 小皿(B2)	c 14	S K83 p14	(口)6.3 (高)1.6	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	明褐	100		15-5

tab. 8 出土土器観察表(4)

No	器種	地区	遺構・層名	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	実測No.
173	土師器 小皿 (C2)	c 14	S K83 p18	(口)8.0 (高)1.4	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	淡橙	50		15-6
174	土師器 小皿 (C2)	c 14	S K83 p13	(口)7.8 (高)1.4	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡橙	20		15-7
175	土師器 皿 (D3)	c 14	S K83 p7	(口)9.0 (高)1.5	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	淡橙	50		15-8
176	土師器 皿 (D3)	c 14	S K83 p35	(口)9.9 (高)1.7	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	淡黄橙	60		16-2
177	土師器 皿 (D3)	c 14	S K83 p34	(口)9.6 (高)1.7	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡橙	75		15-9
178	土師器 皿 (D3)	c 14	S K83 p15	(口)9.9 (高)1.7	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄~明褐	100		16-3
179	土師器 皿 (D3)	c 14	S K83 p35	(口)9.9 (高)1.7	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄橙	60		16-4
180	土師器 皿 (D3)	c 14	S K83 p6	(口)10.1 (高)1.7	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄橙	60		16-1
181	土師器 皿 (D3)	c 14	S K83 p33	(口)9.9 (高)1.3	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄橙	85		15-10
182	土師器 皿 (D3)	c 14	S K83	(口)10.1 (高)2.2	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	橙	90		15-11
183	土師器 皿	c 14	S K83	-	外:ナデのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	黄灰	口縁5	南伊勢系の系統か?	16-7
184	磁器 小杯	c 14	S K83	(口)6.9	外:釉 内:釉	密	堅緻	釉-白 器-灰白	口縁30	白磁 盆	16-8
185	陶器 茶椀	c 14	S K83	(口)11.5	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密0.5~2.0mm の小石	堅緻	釉-赤黒灰 器-灰白	口縁40	瀬戸産 天目茶椀	16-6
186	陶器 壺	c 14	S K83 p24	(口)13.2	外:ナデのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	堅緻	淡灰	口縁20	常滑産	16-5
187	土師器 小皿 (D4)	e13	S Z90 p35	(口)8.7 (高)1.2	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄橙	40		17-8
188	土師器 小皿 (D4)	e13	S Z90 p26	(口)8.6 (高)1.5	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄橙	95		17-7
189	土師器 小皿 (D4)	e13	S Z90 p10	(口)8.0 (高)1.4	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄橙	50		17-9
190	土師器 皿 (D3)	e13	S Z90 p37	(口)10.1 (高)1.9	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄橙	85		17-10
191	陶器 梵	e13	S Z90 p25	(口)11.8 (高)6.4	外:ロクロナデのち櫛状 工具による施文	密0.5~1.0mm の小石	堅緻	釉-淡白綠 器-灰白	高台100	瀬戸産 丸楓 貼り付け高台	18-1
192	陶器 茶椀	e13	S Z90 p16	(口)12.0	外:ロクロナデのちケズリ 内:ロクロナデ	密0.5~2.0mm の小石	堅緻	釉-黑褐 器-淡茶灰	25	瀬戸産 天目茶椀	38-2
193	陶器 水注	e13	S Z90 p20	(底)5.8	外:ロクロナデのち糸切り 内:ロクロナデ	密0.5~1.0mm の小石	堅緻	釉-暗青灰 器-灰白	底50	瀬戸産	38-1
194	陶器 撥鉢	e13 c14 d15	S Z90p24 22 S K83 床土	(口)26.4	外:ロクロナデ 内:ロクロナデのち櫛目	密0.5~3.0mm の小石	堅緻	釉-暗紫灰 器-淡茶灰	口縁50	瀬戸産	34-1
195	土師器 鍋	e13	S Z90 p11	(口)28.3	外:ハケメのちヨコナデ 内:ハケメのちヨコナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	淡黄橙	15	外面に煤付着	18-3
196	土師器 蓋	c9	S K191 p1	(口)16.2 (高)2.2	外:ナデのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	淡茶灰	40	外面に煤付着 摘部分は貼り付け	48-2
197	土師器 鍋	c9	S K191 p2	(口)30.5	外:ハケメのちヨコナデ・ケ ズリ内:ナデのちヨコナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	淡黄橙	体部40	外面に煤付着。	48-1
198	陶器 茶椀	d15	S K103	(口)12.1	外:ロクロナデのちケズリ 内:ロクロナデ	密0.5~2.0mm の小石	堅緻	釉-褐 器-灰白	口縁10	瀬戸産 天目茶椀	22-6
199	陶器 茶椀	d15	S K103上	(高台4.5	外:ロクロナデのちケズリ 内:ロクロナデ	密0.5~2.0mm の小石	堅緻	釉-褐 器-暗灰	高台50	中国産 天目茶椀	22-7
200	土師器 皿 (D3)	d15	S K103 p15	(口)9.7 (高)1.8	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	淡橙	85		22-3
201	土師器 皿 (D3)	d15	S K103	(口)9.7 (高)1.9	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~3.0mm の小石	良好	淡黄橙	90	外面底部に板状压痕	22-1
202	土師器 皿	d15	S K103	(口)9.9 (高)1.6	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	淡黄橙	45		22-2
203	陶器 鉢	d15	S K103	(底)10.3	外:ロクロナデのち糸切り 内:ロクロナデ	密0.5~2.0mm の小石	堅緻	釉-暗紫灰 器-淡茶灰	底30	瀬戸産	22-4
204	陶器 壺	d15	S K103 p7	(底)10.8	外:ナデ 内:ナデ	粗0.5~3.0mm の小石	堅緻	淡茶~黄灰	底30	常滑産 底部に砂付く	22-5
205	土師器 十能	d15	S K103 p3	-	外:ナデのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	淡黄橙	注口部 100		23-2
206	土師器 鍋	d15	S K103 p4,8	(口)33.3	外:ハケメのちヨコナデ 内:ケズリ内:板ナデの ちヨコナデ・ケズリ	密0.5~1.0mm の小石	良好	灰黄褐	口縁20	外面に煤付着	23-1
207	陶器 ねり鉢	d15	S K103	(口)36.0	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~3.0mm の小石	堅緻	暗灰褐~橙	口縁20	常滑産	24-2
208	陶器 ねり鉢	d15	S K103	(底)16.2	外:オサエのちヨコナデ 内:ヨコナデ	密0.5~3.0mm の小石	堅緻	橙褐	底20	常滑産 内・外面に煤付着	24-1
209	陶器 壺	d15	S K103	(口)59.2	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密0.5~2.0mm の小石	堅緻	赤褐~淡褐	口縁15	常滑産	25-1
210	土師器 小皿 (D4)	d13	S Z88	(口)8.1 (高)1.6	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄橙	85	口縁部に鉄分付着	29-6
211	土師器 小皿 (D4)	d13	S Z88	(口)8.4 (高)1.3	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄橙	100		30-2
212	土師器 小皿 (D4)	d13	S Z88	(口)8.3 (高)1.3	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	淡橙~淡黄	100	口縁部に油煙痕	30-1

tab. 9 出土土器観察表(5)

No.	器種	地区	遺構・層名	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	実測No.
213	土師器 小皿(D4)	d13	S Z 88	(口)8.0 (高)1.3	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡茶灰	75		29-2
214	土師器 小皿(D4)	d13	S Z 88	(口)8.1 (高)1.6	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	粗0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄澄	100		30-6
215	土師器 小皿(D4)	d13	S Z 88	(口)8.4 (高)1.4	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄澄	65	口縁部に油煙痕	29-4
216	土師器 小皿(D4)	d13	S Z 88	(口)8.7 (高)1.5	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄澄	50	外面底部に板目圧痕	29-5
217	土師器 皿(D3)	d13	S Z 88	(口)9.3 (高)1.7	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄澄	75	口縁部に油煙痕	30-4
218	土師器 皿(D3)	d13	S Z 88	(口)10.0 (高)1.7	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄澄	33		30-7
219	土師器 皿(D3)	d13	S Z 88	(口)9.8 (高)1.9	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄澄	99	外面底部に板目圧痕	29-3
220	土師器 皿(D3)	d13	S Z 88	(口)10.2 (高)1.7	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄澄	85	外面底部に板目圧痕	29-8
221	土師器 皿(D3)	d13	S Z 88	(口)9.6 (高)2.0	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡澄	100	口縁部に油煙痕	30-3
222	土師器 皿(D3)	d13	S Z 88	(口)10.0 (高)1.7	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄澄~灰黄	20		29-1
223	土師器 皿?	d13	S Z 88	-	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡茶灰	底の破片	外面に墨書	44-5
224	土師器 皿(D3)	d13	S Z 88	(口)10.0 (高)1.7	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	淡茶灰	99	外面に墨書「あいん」か?	30-5
225	土師器 皿(D3)	d13	S Z 88	(口)10.2 (高)1.8	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄澄	30	外面に墨書「前尔う」か?	29-7
226	磁器 皿	b9	S K 186	(口)13.7	外:口縁端部をケズり 内:口縁端部に沈線	密	堅緻	釉-綠灰 器-暗灰	口縁15	青磁 稲花皿	31-3
227	陶器 皿	b9	S K 186	(口)12.0 (高)2.5 高台7.4	外:ロクロナデのちケズ 内:ロクロナデ	密0.5~2.0mm の小石	堅緻	釉-灰綠 器-淡灰	口縁15	瀬戸産 折縁皿	31-4
228	陶器 撥鉢	c9	S K 185	(底)12.0	外:ナデのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~3.0mm の小石	堅緻	釉-暗青灰 器-灰	底部40	瀬戸産	31-2
229	土師器 鍋	b9	S K 185	(口)20.0	外:ハケメのちヨコナデ 内:ハケメのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄澄	口縁25	外面に煤付着	31-1
230	土師器 鍋	c9	S K 185	(口)32.4 (高)13.4	外:内:ナデのちヨコナ デ・ケズリ	密0.5~1.0mm の小石	良好	黄灰褐	口縁50	外面に煤付着	91-1
231	土師器 小皿(B2)	c4	礫群内(黄褐色)	(口)6.2 (高)1.5	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄澄	83	口縁部に油煙痕	35-10
232	土師器 小皿(B2)	c4	礫群内(黄褐色)	(口)6.0 (高)1.3	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡澄	99	口縁部に油煙痕	35-6
233	土師器 小皿(C1)	c4	礫群内(黄褐色)	(口)8.0 (高)1.0	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡澄	25		35-8
234	土師器 小皿(D4)	c4	礫群内(黄褐色)	(口)8.2 (高)1.2	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄澄	50		35-11
235	土師器 皿(D3)	c4	礫群内(黄褐色)	(口)9.4 (高)1.8	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡澄	50		35-9
236	土師器 皿(D2)	c4	礫群内(黄褐色)	(口)13.0	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄澄	25		35-5
237	陶器 皿	c4	礫群内(黄褐色)	(口)10.0	外:ロクロナデのちヨコナ デ・ロクロナデ	密0.5~1.0mm の小石	堅緻	釉-綠灰 器-白灰	口縁15	瀬戸産	35-12
238	土師器 鍋	c4	礫群内(黄褐色)	(口)18.5	外:内:ナデのちヨコナ デ・ケズリ	密0.5~2.0mm の小石	良好	暗灰黄	40	外面に煤付着	36-2
239	土師器 鍋	c4	礫群内(黄褐色)	(口)33.7	外:ナデのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	淡黄澄	15	外面に煤付着	37-2
240	土師器 鍋	c4	礫群内(黄褐色)	(口)37.6	外:ハケメのちヨコナデ 内:ハケメのちヨコナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	灰褐~淡褐	15	外面に煤付着	48-5
241	土師器 皿(D3)	c14	S K 81 p1	(口)9.8 (高)1.9	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	淡澄	62		39-3
242	土師器 皿(D2)	c15	S K 82	(口)11.0	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	淡黄灰	50		50-6
243	土師器 小皿(D4)	c8	S K 172 p1	(口)8.2 (高)1.4	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄澄	95		48-4
244	土師器 小皿	c3	S X 176	(口)8.4	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~2.0mm の小石	堅緻	淡澄	33		50-3
245	土師器 皿(C1)	f2	S D 112	(口)10.1 (高)1.5	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~2.0mm の小石	堅緻	淡黄澄	80		40-3
246	土師器 皿(D1)	e14	S K 170	(口)16.1	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	堅緻	淡黄澄	口縁25	外面に煤付着	51-4
247	土師器 皿	e14	S Z 163	-	外:ナデ・ミガキ・ケズリ 内:ナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡茶灰	破片	外面に墨書	44-3
248	瓦質土器 火舎	d6	S K 169	-	外:ナデ・ミガキ・ケズリ 内:ナデ	粗0.5~1.0mm の小石	良好	暗灰	破片	方形の火舎	51-6
249	陶器 梗	c11	S K 93	(口)11.2 (高)3.8	外:ロクロナデのちヨコナ デ・シブ文 内:ロクロナデ	密0.5~1.0mm の小石	堅緻	釉-淡綠灰 器-淡灰	高台15	瀬戸産	18-2
250	磁器 盤	e8 d7	S K 166 p7	高台)9.0	外:削り出し高台 内:スタンプ文	密	堅緻	釉-綠灰 器-白灰	高台12	青磁	53-7
251	磁器 皿	e14	S K 163	(口)11.0	外:横線・波涛文・芭蕉 葉文 内:横線	密	堅緻	釉-白・青 器-灰白	口縁10	青花染付	46-5
252	土師器 鍋	e15	S K 99 p1	(口)29.4	外:ハケメのちヨコナデ 内:板ナデのちヨコナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	淡褐~黄澄	口縁33	外面に煤付着	51-1

tab.10 出土土器観察表(6)

No	器種	地区	遺構・層名	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	実測No.
253	陶器 播鉢	c3 d4	碟群下 SK183	(口)29.9 (高)12.8 (底)12.8	外:回転ナデ 内:回転ナデのち捲目	密0.5~5.0mm の小石	堅緻	茶灰	口縁25	信楽産	47-1
254	土師器 小皿 (B2)	c3	碟群下	(口)5.8 (高)1.4	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄橙	100	口縁部に油煙痕	35-1
255	土師器 小皿 (B2)	c3	碟群下 黒褐土	(口)6.3 (高)1.5	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄橙	85		35-3
256	土師器 小皿 (B2)	c4	黒褐土 p2	(口)6.3 (高)1.3	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~2.0mm 小石	良好	淡橙	85		35-2
257	土師器 小皿 (B2)	d4	碟群内	(口)6.4 (高)1.3	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄橙	90		35-14
258	土師器 小皿 (B2)	d4	碟群内	(口)6.5 (高)1.3	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄橙	99		36-5
259	土師器 小皿	d5	灰褐土	(口)7.0 (高)1.7	外:ナデ・オサエ 内:ナデ・ヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄橙	15	大和産? いわゆる「へそ皿」	42-3
260	土師器 梗?	d6	床土下	(口)10.0	外:ナデ・オサエ 内:ナデ・ヨコナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	灰黄	口縁25	南伊勢系とは異なる	35-4
261	土師器 皿 (D3)	c4	碟群内	(口)10.1 (高)2.1	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡橙	60		35-7
262	土師器 皿	d4	碟群内	(口)10.0	外:ナデ・オサエ 内:ナデ・ヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄	12	南伊勢系とは異なる	35-13
263	土師器 皿	c3	碟群下 黒褐土	(口)11.5 (高)1.7	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄橙	口縁33	南伊勢系とは異なる	39-2
264	磁器 皿	d4	碟群下 黒褐土	(口)10.4 (高)2.3	外:横線・牡丹唐草文 内:横線・瑞鹿文?	密	堅緻	釉・白・青 器・灰	口縁15	青花染付	43-3
265	磁器 皿	d6	碟群内	(口)10.6 (高)2.8	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	堅緻	灰白	口縁12	白磁 端反皿	46-4
266	磁器 皿	c4	碟群下	(口)11.1 (高)3.2	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	堅緻	釉・淡灰白 器・白	口縁40	白磁 端反皿	43-2
267	陶器 茶椀	c3 c4	碟群下	(口)12.4 (高)5.3	外:ロクロナデのちケズリ 内:ロクロナデ	密0.5~1.0mm の小石	堅緻	釉・褐 器・淡茶灰	高台90	瀬戸産 天目茶椀	45-3
268	陶器 茶椀	c4	碟群内	(口)11.6 (高)6.1	外:ロクロナデのちケズリ 内:ロクロナデ	密0.5~1.0mm の小石	堅緻	釉・赤黒 器・淡黄橙	口縁25	瀬戸産 天目茶椀	46-6
269	陶器 茶椀	c4	碟群内	(口)11.8 (高)6.6	外:ロクロナデのちケズリ 内:ロクロナデ	密0.5~1.0mm の小石	堅緻	釉・暗褐 器・淡茶灰	口縁50	瀬戸産 天目茶椀	45-6
270	陶器 茶椀	c4	碟群内	(口)12.4 (高)6.0	外:ロクロナデのちケズリ 内:ロクロナデ	密0.5~1.0mm の小石	堅緻	釉・赤黒 器・淡茶灰	口縁50	瀬戸産 天目茶椀	45-1
271	陶器 茶椀	c4	碟群内	(口)12.4	外:ロクロナデのちケズリ 内:ロクロナデ	密0.5~1.0mm の小石	堅緻	釉・赤褐 器・淡茶灰	口縁25	瀬戸産 天目茶椀	45-2
272	陶器 茶椀	d4	碟群上 pl	(口)11.4 (高)6.0	外:ロクロナデのちケズリ 内:ロクロナデ	密0.5~1.0mm の小石	堅緻	釉・黒褐 器・淡茶灰	口縁50	瀬戸産 天目茶椀	43-1
273	陶器 皿	c4	碟群内	(口)11.6 (高)2.9	外:ロクロナデのち貼り 付け高台	密0.5~1.0mm の小石	堅緻	釉・淡綠灰 器・淡灰	口縁33	瀬戸産 端反皿	36-4
274	陶器 皿	c3	床土下	(口)10.8 (高)3.0	外:ロクロナデのち削り 出し高台	密0.5~2.0mm の小石	堅緻	釉・赤褐 器・淡茶灰	口縁50	瀬戸産 丸皿 内面にトチン跡	45-4
275	陶器 皿	c4	碟群内	(口)11.6 (高)2.7	外:ロクロナデのち削り 出し高台 内:スタンプ	密0.5~1.0mm の小石	堅緻	釉・淡灰綠 器・灰黃	口縁40	瀬戸産 端反皿	36-3
276	陶器 水差?	d4	碟群上 p3	(口)13.0	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密0.5~1.0mm の小石	堅緻	釉・暗赤褐 器・淡茶灰	口縁25	瀬戸産	45-5
277	瓦質土器 播鉢	d4 e4	床土下	(口)33.0	外:オサエ・ハケメのち ヨコナデ 内:ナデのち捲目	密0.5~3.0mm の小石	良好	内外・灰白 二重 断面・暗灰	口縁12	大和産 瓦質播鉢	49-1
278	陶器 ねり鉢	c3	碟群下 黒褐土	(口)31.0	外:オサエ・ヨコナデ 内:ナデ	密0.5~2.0mm の小石	堅緻	淡赤褐	口縁10	常滑産	41-1
279	陶器 ねり鉢	d6	床土下	(口)37.2	外:オサエ・ヨコナデ 内:ナデ	密0.5~10.0mm の小石	やや軟	淡黄橙	口縁12	常滑産	41-2
280	土師器 茶釜	d4	碟群内	(口)12.0	外:ハケメのちヨコナデ 内:ハケメのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	やや軟	淡茶灰	口縁50	外面に煤付着	36-1
281	土師器 茶釜	d5	灰褐土	(口)14.8	外:ハケメのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	淡茶灰	口縁33		42-2
282	土師器 鍋	c3	碟群下 黒褐土	(口)21.0	外:内:ナデのちヨコナ デ・ケズリ	密0.5~2.0mm の小石	良好	淡黄橙	35	外面に煤付着	40-2
283	土師器 鍋	d5	灰褐土	(口)31.6	外:内:ハケメのちヨコ ナデ・ケズリ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄灰	体部25	外面に煤付着	42-1
284	土師器 鍋	d4	碟群内	(口)38.0	外:ハケメのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡橙	口縁10	外面に煤付着	37-1
285	土師器 鍋	村道 西	床土下	(口)37.4	外:ハケメのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡茶灰	口縁15	外面に煤付着	39-1
288	土師器 鍋	c9	碟混じり淡 褐色土	-	外:ヨコナデ 内:ハケメのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄橙	口縁5	外面に煤付着	50-4
289	土師器 皿	d7	碟混じり黒 褐色土	(口)12.6 (高)2.4	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	粗0.5~2.0mm の小石	良好	淡茶灰	口縁60	南伊勢系とは異なる 外面に煤付着	44-1
290	陶器 播鉢	b9	黒褐土	-	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密0.5~2.0mm の小石	堅緻	淡黄灰	口縁5	信楽産	51-3
291	瓦質土器 播鉢	d8	碟混じり黒 褐色土	(底)4.4	外:ナデのち糸切り 内:磨滅	粗0.5~2.0mm の小石	やや軟	外・暗灰 内・白灰	底部40	大和産 瓦質播鉢	51-5
292	陶器 播鉢	d8	黒褐土	(底)10.2	外:回転ナデ 内:回転ナデのち捲目	密0.5~2.0mm の小石	堅緻	釉・褐灰 器・茶灰	底部50	瀬戸産	33-1
293	土師器 小皿 (B2)	e15	淡褐混碟土	(口)6.1 (高)1.5	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡橙	65		50-2
294	土師器 小皿 (D4)	e15	石組付近褐 色土	(口)8.0 (高)1.4	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡茶灰	85		18-5

tab.11 出土土器観察表(7)

No	器種	地区	遺構・層名	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	実測No.
295	土師器 小皿(D4)	e15	石組付近褐色土	(口)8.3 (高)1.3	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡茶灰	80		18-6
296	土師器 小皿(D4)	e15	石組付近褐色土	(口)8.0 (高)1.4	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡茶灰	100		18-4
297	土師器 皿	c15	褐~暗褐色土	(口)13.2	外:オサエのちヨコナデ 内:ヨコナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	淡黄	20	南伊勢系と手法は同じ	48-3
298	土師器 皿	d15	炭混じり褐色土	-	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡茶灰	小片	外面に墨書	44-4
299	土錘	c13	焼土混じり褐色土	長さ2.8 最大径0.9	外:ナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡橙	一部欠損	重さ1.6g 土師質	28-3
300	陶器 茶椀	c13	焼土混じり褐色土	(口)9.1	外:ロクロナデのちケズリ 内:ロクロナデ	密0.5~1.0mm の小石	堅緻	釉-褐器-淡茶灰	20	瀬戸産 天目茶椀	27-6
301	陶器 茶椀	e14	石組付近褐色土	(口)11.6 (高)6.3	外:ロクロナデのちケズリ 内:ロクロナデ	密0.5~2.0mm の小石	堅緻	釉-暗赤褐色器-淡茶灰	10	瀬戸産 天目茶椀	26-4
302	陶器 皿	c13	焼土混じり褐色土	(口)9.2 (高)2.1	外:ロクロナデのち削り 出し高台	密0.5~1.0mm の小石	堅緻	釉-淡綠灰器-淡灰	口縁20	瀬戸産 端反皿 高台内面にトチン跡	28-2
303	陶器 皿	d14	褐色土	(口)10.5 (高)2.5	外:ロクロナデのち糸切り のち貼り付け高台	密0.5~2.0mm の小石	堅緻	釉-淡黃器-灰白	口縁20	瀬戸産 端反皿	26-3
304	磁器 梗	c13	焼土混じり褐色土	(口)12.0	内:横線	密	堅緻	釉-白・青器-白灰	口縁30	染付	46-1
305	陶器 撥鉢	c12	焼土混じり黒褐色土	-	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密0.5~2.0mm の小石	堅緻	暗赤灰	口縁5	瀬戸産	32-8
306	陶器 撥鉢	c13	焼土混じり褐色土	(口)30.2	外:ロクロナデ 内:ロクロナデのち播目	密0.5~2.0mm の小石	堅緻	黒褐色器-黄澄	口縁15	瀬戸産	24-3
307	陶器 撥鉢	e14	石組付近褐色土	(口)27.2	外:ロクロナデのち播目	密0.5~2.0mm の小石	堅緻	暗茶灰器-灰茶	口縁15	瀬戸産	32-6
308	陶器 撥鉢	e15	淡褐泥礫土	(底)10.4	外:ロクロナデ 内:ロクロナデのち播目	密0.5~2.0mm の小石	堅緻	褐灰	底部50	瀬戸産	33-1
309	土師器 鍋	c13	焼土混じり褐色土	(口)27.2	外:ハケメのちヨコナデ ・ケズリ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡橙	口縁20	外面に煤付着	28-1
310	土師器 鍋	c12	焼土混じり黒褐色土	(口)37.6	外:ハケメのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	明褐灰	口縁12	外面に煤付着	40-1
311	土師器 鍋	d15 付近	重機掘削	(口)44.6	外:ハケメのちヨコナデ ・ケズリ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡褐	口縁20	外面に煤付着	44-2
312	磁器 小杯	d8	pit2	(高台)2.6	外:ロクロナデのち削り 出し高台	密	堅緻	釉-白器-淡灰	高台60	白磁	52-2
313	土師器 皿(D3)	e7	pit3	(口)10.1 (高)1.8	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黃澄	20		52-4
314	陶器 皿	d7	pit3	(口)11.7 (高)2.5	外:ロクロナデのちケズリ 内:ロクロナデ	密0.5~1.0mm の小石	堅緻	釉-淡綠灰器-淡茶灰	35	瀬戸産 端反皿	46-2
315	磁器 梗	e7	pit3	(口)13.2	外:ケズリのち蓮弁文 内:ロクロナデ	密	堅緻	釉-淡綠灰器-灰白	口縁20	青磁	52-3

平成2年度調査区出土土器類

402	磁器 小碗		表土	(口)10.7 (高)3.6	外:蓮弁文 内:魚の浮文	密	堅緻	釉-淡綠灰器-淡灰	口縁20	青磁双魚文は赤い方が残る	98-1
403	磁器 梗		pit40	-	外:蓮弁文 内:陰刻	密	堅緻	釉-淡青白器-淡灰	高台上20	青磁	99-1
404	陶器 梗		pit	-	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密0.5~3.0mm の小石	良好	白灰	口縁10	山茶椀 濑戸産	99-3
405	陶器 入子		試掘	(口)7.0	外・内:ロクロナデのち輪花	密0.5~1.0mm の小石	堅緻	淡灰	口縁25	瀬戸産	98-9
406	陶器 皿?		包含層	-	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密0.5~1.0mm の小石	堅緻	釉-淡綠灰器-淡茶灰	口縁5	瀬戸産	99-5
407	瓦器 梗		包含層	-	外:ナデのちヨコナデ 内:ナデのちミガキ	密0.5~3.0mm の小石	良好	黒灰~白灰	口縁5	伊賀型の系統?	99-2
408	瓦器 梗		包含層	(口)10.3	外:ナデのちヨコナデ 内:ナデのちミガキ	密0.5~1.0mm の小石	良好	暗灰	口縁25	伊賀型の系統?	98-5
409	瓦器 梗		pit40	(口)10.6	外:ナデのちヨコナデ 内:ナデのちミガキ	密0.5~1.0mm の小石	良好	黑灰	口縁20	伊賀型の系統?	98-3
410	土師器 皿(B1)		pit27	(口)12.2 (高)2.6	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	淡茶灰	口縁40		98-2
411	土師器 皿(B1)		pit	(口)11.5	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄灰	口縁20		98-8
412	土師器 皿(B1)		pit21	(口)11.5	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡茶灰	口縁20		98-7
413	土師器 皿(B1)		pit40	-	外:剥離 内:剥離	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡茶灰	口縁10		98-4
414	土師器 鍋		pit34	-	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	粗0.5~2.0mm の小石	良好	淡茶灰	口縁5	外面に煤付着	99-4
415	土師器 鍋		pit5	-	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	粗0.5~1.0mm の小石	良好	淡茶灰	口縁5	外面に煤付着	98-6
416	土師器 鍋		包含層	-	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	粗0.5~2.0mm の小石	良好	茶灰	口縁5	外面に煤付着	99-6

法光寺調査区出土土器類

417	磁器 梗	c 9	第1テラス斜面	(口)12.0	外:蓮弁文	密	堅緻	釉-綠灰器-灰白	口縁15	青磁	67-4
418	磁器 梗	13	第1テラス集石内	(口)13.0	外:横線・波渦文ほか 内:横線	密	堅緻	釉-白・青器-白灰	口縁15	染付	68-5

tab.12 出土土器観察表(8)

No	器種	地区	遺構・層名	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	実測No
419	磁器 梗	d7	第2テラス 灰褐色	高台)4.7	外:横線 内:釉かきとり	密	堅緻	釉-白・青 器-白灰	高台50	染付	68-4
420	陶器 皿	c5	第2テラス 表土	(口)13.2	外:ロクロナデのちケズ リ内:ロクロナデ	密0.5~1.0mm の小石	堅緻	釉-灰黄 器-灰白	口縁5	瀬戸産?	72-1
421	陶器 茶碗	d13	第1テラス 集石内	高台)4.6	外:削り出し高台 内:ロクロナデ	密0.5~1.0mm の小石	堅緻	釉-黑褐 器-灰白	高台100	瀬戸産 天目茶碗	67-5
422	陶器 茶碗	d13	第2テラス 集石内	(口)11.6 (高)5.8	外:ロクロナデのちケズ リ内:ロクロナデ	密0.5~1.0mm の小石	堅緻	釉-明褐 器-淡黄	高台100	瀬戸産 天目茶碗 底部に糸切り痕あり	68-2
423	陶器 茶碗	d13	第1テラス 集石内	(口)12.0	外:ロクロナデのちケズ リ内:ロクロナデ	密0.5~1.0mm の小石	堅緻	釉-褐 器-淡黄	口縁12	瀬戸産 天目茶碗	68-1
424	陶器 片口鉢	b6	第1テラス 集石内	(口)20.9 (高)11.2	外:ロクロナデのちケズ リ内:ロクロナデ	密0.5~2.0mm の小石	堅緻	釉-灰黄 器-灰白	高台95	瀬戸産	67-3
425	陶器 鉢	d13	第1テラス 集石内	(口)11.0	外:ロクロナデのちヘラ 描き施文	密0.5~1.0mm の小石	堅緻	釉-黄褐 器-灰黄	口縁30	瀬戸産?	67-2
426	土師器 茶釜	d13	第1テラス 集石内	(口)16.5	外:ハケメのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	淡茶灰	口縁15		73-2
427	土師器 鍋	d13	第1テラス 集石内	-	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	淡茶灰	口縁5		73-4
428	土師器 鍋	c14	集石内	-	外:ハケメのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	淡褐	口縁5	外面に煤付着	72-2
429	土師器 焙烙	d6	第2テラス 灰褐色	-	外:ナデのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~2.0mm の小石	良好	明褐	口縁5		73-2
430	土師器 鍋	d13	第1テラス 集石内	(口)29.3	外:ハケメのちヨコナデ 内:ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mm の小石	良好	淡黄橙	口縁10	外面に煤付着	73-3
431	陶器 ねり鉢	d4	第2テラス 灰褐色	(口)27.2	外:ヨコナデのちケズリ 内:ヨコナデ	密0.5~3.0mm の小石	堅緻	黄橙	口縁12	信楽産?	70-1
432	陶器 ねり鉢	d13	第1テラス 集石内	(口)28.1	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデ	粗0.5~4.0mm の小石	堅緻	黄橙	口縁10	常滑産	70-2
433	陶器 ねり鉢	c14	集石内	(口)28.6	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデ	粗0.5~4.0mm の小石	堅緻	橙	口縁10	常滑産	70-3
434	陶器 ねり鉢	e7	第2テラス	(口)37.0	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデ	粗0.5~3.0mm の小石	堅緻	黄橙	口縁12	常滑産	69-2
435	陶器 播鉢	d13	第1テラス 集石内	(口)35.0	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密0.5~2.0mm の小石	堅緻	釉-暗紫灰 器-茶灰	口縁10	瀬戸産	69-1
436	陶器 播鉢	d13	第1テラス 集石内	(口)28.0	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密0.5~2.0mm の小石	堅緻	釉-淡赤灰 器-茶灰	口縁12	瀬戸産	68-3
437	陶器 播鉢	b10 b6	第2テラス 礫群内	(口)31.2 (高)10.2	ロクロナデのち糸切りの ち播目	密0.5~2.0mm の小石	堅緻	釉-暗青灰 器-茶灰	口縁30	瀬戸産	71-1
438	陶器 播鉢	d13	第1テラス 集石内	(底)9.1	ロクロナデのち糸切りの ち播目	密0.5~3.0mm の小石	堅緻	釉-暗青灰 器-茶灰	底部70	瀬戸産	71-2
439	陶器 播鉢	e7	第1テラス	(口)32.2	ロクロナデのち播目	密0.5~2.0mm の小石	堅緻	釉-茶灰 器-灰白	口縁10	瀬戸産	67-1
440	瓦質土器 風炉	b7	礫群内	(口)77.6	外:ナデのちスタンプ	粗0.5~1.0mm の小石	良好	外面灰 断面茶灰	口縁10		72-3

tab.13 出土土器観察(9)

番号	名称	地区	層位・遺構	岩質	備考	実測No	番号	名称	地区	層位・遺構	岩質	備考	実測No
108	転用品	e21	黒褐土	滑石	石鍋の転用。	8-2	116	砥石	c22	黒褐土	砂岩		63-5
109	砥石	d21	黒褐土	流紋岩	鉄滓が付着。	62-5	117	砥石	e23	混礫土	砂岩		63-2
110	砥石	e19	SK30	細粒砂岩		63-6	118	砥石	e21	pit5	砂岩		62-6
111	砥石	d21	黒褐土	粘板岩		62-3	119	砥石	e22	SK11	砂岩		63-1
112	砥石	d21	pit2・SK67	粘板岩		62-1,2	286	砥石	d5	暗褐土	泥岩系		50-7
113	砥石	e21	pit11	泥岩		62-4	287	砥石	d5	検出中	砂岩		64-2
114	砥石	b24	黒褐土	火山岩系		63-3	316	硯	d8	pit2	泥岩系	中国製?	52-1
115	砥石	c19	黒褐土	流紋岩		63-4							

tab.14 出土石製品観察表

番号	地区	層位・遺構	直径	元材	成形	登録No	番号	地区	層位・遺構	直径	元材	成形	登録No
317	b9	褐色混黒褐土	1.6	陶器	敲打	52-5	322	c13	SK101	3.6	常滑鉢	研磨	52-7
318	c5	床土下	5.0	常滑鉢	敲打	53-3	323	e14	SK163	4.6	瀬戸 播鉢	敲打	53-2
319	c11	SK93	5.6	陶器	研磨	52-8	324	b9	SK185	5.1	陶器	敲打	52-6
320	d14	褐色土	4.9	瓦	研磨	53-6	325	c14	SK83 p27	6.7	瓦	敲打	53-1
321	d14	焼土混褐色	4.0	瓦	敲打	53-5	326	c3	床土下	7.5	瓦	研磨	53-4

tab.15 円形加工土器片観察表

番号	地区	出 土 地 点	点 数	形 態	備 考	番号	地区	出 土 地 点	点 数	形 態	備 考
1	e1	礫混じり黒褐色土	1	?		5	d8	礫混じり暗褐色土	1	?	草木の模様あり
2	d6	床土下	1	?		6	c9	S K185	1	?	
3	c8	焼土混じり黒褐色土	1	皿		7	c13	S K1011	皿	?	
4	d8	黄色粘土混じり黒褐色土	1	?		8	e13	S Z901	皿		

tab.16 漆器出土地点一覧表

	形 態	地区	遺構・層名	調整・技法の特徴	胎 土	焼 成	色 調	法量(cm)	備 考	実測No
327	軒丸瓦	d4	崖法面	丸瓦凸面-ナデ・凹面-布目のちナデ 巴文	粗0.5~3.0mm の小石	良好	暗灰			81-2
328	軒丸瓦	d4	礫群内	裏面-ナデ 巴文	粗0.5~2.0mm の小石	良好	灰			81-1
329	軒丸瓦	c8	礫混じり黒褐色土	丸瓦凸面-ナデ・凹面-布目のちナデ 巴文	粗0.5~4.0mm の小石	良好	灰		挿入によって丸瓦を取 り付ける	97-1
330	軒丸瓦	d6	S K152	丸瓦凸面-ナデ・ミガキ、凹面-ナデ 引っ掛け	粗0.5~3.0mm の小石	良好	灰	幅13.0		90-1
331	軒平瓦	c4	礫群内	平瓦部凸・凹面-ナデ 引っ掛け 菊花唐草文 水返し	粗0.5~5.0mm の小石	良好	灰			85-1
332	軒平瓦	d4	礫群内	平瓦部凸・凹面-ナデ 菊花唐草文	粗0.5~3.0mm の小石	良好	灰			84-3
333	軒平瓦	d4	崖法面	平瓦部凸・凹面-ナデ 水返し 菊花唐草文	粗0.5~4.0mm の小石	良好	灰			97-2
334	鬼瓦	d4	崖法面	外:ヘラ書き区画内にスタンプ状に円 形文を押す 内:ケズリ	粗0.5~3.0mm の小石	良好	灰		335と同一個体であろ う	80-1
335	鬼瓦	d4	礫群下 黒褐色土	外:ヘラ書き区画内にスタンプ状に円 形文を押す内:ケズリ	粗0.5~3.0mm の小石	良好	灰		向かって右隅的部分	80-2
336	伏鉢?	d4	礫群内	外:ミガキ 内:端面に板目痕跡・内面にケズリ	粗0.5~4.0mm の小石	良好	灰	直径34.0		79-1
337	雁振瓦	c4	礫群内	凹面-布目痕のちナデ 凸面-ナデ のちミガキ 端面をケズリ	粗0.5~3.0mm の小石	良好	灰			77-1
338	雁振瓦	d15	S K103 p6	凹面-布目痕のち糸切りのちナデ 凸面-ナデのちミガキ 端面をケズリ	粗0.5~1.0mm の小石	良好	灰			78-1
339	丸瓦	c4	礫群内	凹面-布目・吊り紐痕跡のち各部をケ ズリ 凸面-ミガキ	粗0.5~4.0mm の小石	良好	灰青	長さ28.0 幅12.6		88-1
340	丸瓦	d4	礫群内	凹面-布目・吊り紐痕跡のち各部をケ ズリ 凸面-ミガキ	粗0.5~3.0mm の小石	良好	灰青	幅12.6		87-1
341	平瓦	d4	崖法面	凹面-ナデ 凸面-板ナデ 端面をケズリのちナデ	粗0.5~3.0mm の小石	良好	淡灰	幅19.0		82-1
342	平瓦	c4	礫群内	凹面-ナデ 凸面-板ナデ 端面をケズリのちナデ	粗0.5~3.0mm の小石	良好	淡灰			83-1
343	二の平瓦	c4	礫群内	凹面-ナデ 凸面-板ナデ・ハナレ砂 平瓦の端面を削って製作	粗0.5~6.0mm の小石	良好	淡灰			89-1
344	平瓦?	c5	礫群内	端面をケズリ 両面をナデ 焼成前に釘穴を設定	粗0.5~2.0mm の小石	良好	灰		釘が収まっていたこと が、錆からわかる。	77-3
345	隅切瓦	c4	礫群内	端面をケズリ 両面をナデ	粗0.5~3.0mm の小石	良好	灰		平瓦である	81-3
346	蟹面戸瓦	d4	礫群内	凹面-布目痕のち面取り 凸面-ミガ キ 丸瓦の製作枠を利用?	粗0.5~2.0mm の小石	良好	灰		凸面側からみて、右上 方が鋭角になる	86-1
347	蟹面戸瓦	d4	崖法面	凹面-布目痕のち面取り 凸面-ミガ キ 丸瓦の製作枠を利用?	粗0.5~3.0mm の小石	良好	暗灰		凸面側からみて、左上 方が鋭角になる	92-1
348	蟹面戸瓦	b9	焼土混じり 褐色土	凹面-布目痕のち面取り 凸面-ミガ キ 丸瓦の製作枠を利用?	粗0.5~4.0mm の小石	良好	灰		凸面側からみて、左上 方が鋭角になる	84-1
441	軒丸瓦	d13	第1テラス 集石内	巴文 丸瓦部凸面:ナデ・凹面:ナデ 瓦当部裏面:ナデ	粗0.5~3.0mm の小石	良好	淡灰		瓦当面に煤付着	75-1
442	軒丸瓦	d3	灰褐色土	巴文 瓦当部裏面:ナデ	粗0.5~3.0mm の小石	良好	淡灰			74-1
443	軒平瓦	e7	第2テラス 灰褐色土	文様不明 平瓦部 凹面-布目痕 平瓦部凸面-板ナデ	粗0.5~2.0mm の小石	良好	灰			76-1
444	軒平瓦	d6	第2テラス 表土	文様不明 平瓦部凹面:ナデ 平瓦部凸面:ナデ	粗0.5~2.0mm の小石	良好	淡灰			74-2
445	丸瓦	d13	第1テラス 集石内	凹面-布目痕のち面取り 凸面:ナデ	粗0.5~2.0mm の小石	良好	淡灰		釘穴は焼成前穿孔	75-3
446	平瓦	d7	第2テラス 灰褐色土	凹面-布目痕 凸面-板ナデ 端面:面取り	粗0.5~1.0mm の小石	良好	淡灰黄			74-3
447	雁振瓦	e7	第1テラス	凹面-布目痕・糸切り 凸面-ミガキ 端面:面取り	粗0.5~2.0mm の小石	良好	淡灰			76-2
448	用途不明瓦	b6	礫群内	外面:弧状の削り出し施文 内面:ナデ	粗0.5~2.0mm の小石	良好	茶灰			97-3
449	蟹面戸瓦	d13	第1テラス 集石内	凹面-布目痕のち面取り 凸面:ナデ 端面:面取り	粗0.5~2.0mm の小石	良好	淡灰	40		75-2

tab.17 出土瓦観察

番号	地区	層位・遺構	点数	番号	地区	層位・遺構	点数
1	c3	蝶群内	1	7	d14	焼土混じり黒褐色土	3
2	c8	S K172	1	8	d15	炭混じり褐色土	1
3	c11	S K93	1	9	g20	黒褐色土	1
4	c12	焼土混じり黒褐色土	1	10	d21	pit16	1
5	c13	S K101	1	11	d21	S K67	1
6	e13	S Z90	2				

tab.18 鉄滓出土地点一覧表

番号	名称	地区	層位・遺構	国	初鑄年代	登録No	番号	名称	地区	層位・遺構	国	初鑄年代	登録No
349	開元通寶	d21	pit18	唐	武徳4年(621)	65-17	359	元豊通寶	d21	pit16	北宋	元豊元年(1078)	65-13
350	祥符通寶	d5	pit5	北宋	大中祥符2年(1009)	65-6	360	元豊通寶	d21	pit16	北宋	元豊元年(1078)	65-15
351	景祐元寶	c4	床土下	北宋	景祐元年(1034)	65-3	361	大觀通寶	d21	pit16	北宋	大觀元年(1107)	65-14
352	景祐元寶	b9	SK186	北宋	景祐元年(1034)	65-1	362	政和通寶	c6	床土下	北宋	政和元年(1111)	65-5
353	景祐元寶	d21	黒褐色土	北宋	景祐元年(1034)	65-18	363	慶元通寶	d7	pit6	南宋	慶元元年(1195)	65-9
354	至和元寶	d21	pit16	北宋	至和元年(1054)	65-12	364	永樂通寶	c6	床土下	明	永樂6年(1408)	65-8
355	嘉祐通寶	d14	暗褐色土	北宋	嘉祐元年(1056)	65-11	365	永樂通寶	b9	SK186	明	永樂6年(1408)	65-2
356	治平元寶	d21	pit16	北宋	治平元年(1064)	65-16	366	宣德通寶	c6	床土下	明	宣德8年(1433)	65-4
357	熙寧元寶	d21	pit16	北宋	熙寧元年(1068)	65-15	367	朝鮮通寶	d7	pit6	李氏朝鮮	世宗5年(1423)	65-10
358	熙寧元寶	d5	SZ178	北宋	熙寧元年(1068)	65-7							

tab.19 出土銹貨一覧表

番号	名称	地区	層位・遺構	質	備考	登録No	番号	名称	地区	層位・遺構	質	備考	登録No
368	小椀?	d21	pit9	銅	高坏の可能性あり。	94-6	385	釘	e3	SK123	鉄		96-9
69	釘	d6	SK152 il	鉄		95-1	386	釘	c14	褐色土	鉄		96-1
370	釘	c14	褐色土	鉄		95-6	387	釘	d7	pit3	鉄	(長)4.6	96-3
371	釘	c21	黒褐色土	鉄		95-7	388	釘	e3	SK123	鉄		96-5
372	釘	c22	pit4	鉄		95-8	389	不明	c21	SK45	鉄	棒状	95-2
373	釘	d3	蝶群下黒褐色土	鉄		96-4	390	不明	e21	pit2	鉄	フック状	94-2
374	釘	e19	SK30	鉄	(長)7.7	95-9	391	不明	d22	pit21	鉄	環状	94-4
375	釘	d5	蝶群下黒褐色土	鉄		95-11	392	不明	d7	pit3	鉄	環状	95-4
376	釘	c14	褐色土	鉄		96-2	393	不明	d6	SK152 wl	鉄	外部に木質	95-3
377	釘	c13	焼土混褐色土	鉄		96-12	394	火打ち鎌	d6	床土下	鉄	(長)10.4	94-1
378	釘	c11	SK93	鉄		95-12	395	不明	d6	SK149	鉄	三叉状。刃はない	94-3
379	釘	c13	SZ88	鉄		95-10	396	不明	b9	SK186	鉄	歯手。	94-5
380	釘	b9	褐色混黒褐色土	鉄		96-10	397	不明	b9	褐色混黒褐色土	鉄	棒状。刃はない	95-5
381	釘	e3	SK123	鉄		96-6	398	不明	b9	SK186	鉄	ヤス状。	94-7
382	釘	c13	焼土混褐色土	鉄		96-11	399	不明	b9	SK186	鉄	ヤス状。	94-8
383	釘	e3	SK123	鉄	(長)4.1	96-8	400	鍋	e14	SD128	鉄	(口)26.8	93-2
384	釘	e3	SK123	鉄		96-7	401	鍋	d4	蝶群下黒褐色土	鉄	(口)37.9 外面に煤付着	93-1

tab. 20 出土金属製品観察表

V. 調査のまとめと検討

前章までにみてきたように、今回の調査成果は、今後の美杉村地内における歴史学的検討のための多くの成果を挙げることができたといえよう。そのなかでも、中世における北畠氏影響下の特殊空間であ

る「多気」を考察するための資料としての重要性は多言を要しない。ここでは、「中世多気」における問題を中心に、いくつかの検討を行っておこう。

1. 出土土器に見る多気

今回の調査においては、およそ14世紀後半から16世紀後半にかけての土器類が多く出土している。この時期は、まさに北畠氏が多気を拠点として独自の権力基盤形成のための活動を行っていた時期に相当する。すなわち、この時期における出土遺物には、当該時期における北畠氏拠点下の土器相を反映しているものと見なすことができる。今回の調査によって明らかになった事例について、見ておこう。

a. 土器の構成

事例としては、大蓮寺跡とそれに伴う工房跡の土器群がある。工房跡と大蓮寺跡の各土器構成とを見比べると、いくつかの共通点とともに相違点を見出すことができる。

共通点は、両群ともに土師器の比率が90%ほどを占め、圧倒的に多いことである。また、陶器・磁器の構成比率も決してかけ離れた数値ではない。この数値から読み取れるのは、土師器がかなりの頻度で用いられていたことである。土師器の場合、陶器・磁器類に比べて破損の度合いが高く、この数値がある時間枠のなかでの構成比率を示しているものではないことは言うまでもないが、破損度の高い土師器を通常で良く用いるような環境にあったことは確かであろう。

相違点としては、土師器構成内の異なりがある。工房跡では鍋の消費頻度が極めて高いのに対し、大蓮寺跡では皿類がそれを大幅に凌駕している。これは、両群の環境的相違によるものと考えられる。すなわち、大蓮寺跡の場合、広義の生活空間ないしは宗教的空間と見なすことができるのに対し、工房跡の場合生活空間としての要素以上に生産空間としての意味が高いものである。このような理解は、工房

跡では墨書き土器が全く認められること、大蓮寺跡からは硯の出土が確認されること、などからも推察されよう。

b. 多気における土器流通・搬入

次に、多気における土器流通ないしは搬入経路を考察するために、両土器群全体に認められる生産地の状況を見てみよう。

土師器 土師器類を見てみると、南伊勢系のもの、大和系のもの、その他ものの3者を認めることができる。このなかで最も出土頻度の高いのは南伊勢系のものであり、これ以外のものは極めて少ない出土に止まっている。この事実から、多気における消費品目としての土師器は、ほぼ南伊勢系土師器によって構成されていたことを示すものと理解してよいであろう。

注意を要するのは、中・北勢地域に広範囲な出土を認めることができる土師器類（ここでは「中北勢系土師器」と仮称しよう）が、全くといってよいほど認められないことである。中北勢系土師器の可能性があるのは、289の皿ぐらいであり、他は小片といえども認めることができなかった。

中北勢系土師器は、多気からは八手俣川沿いに約16kmほど下流の家野遺跡（白山町）では、かなりの出土量を認めることができるし、白口峠を越えた中村川流域（嬉野町）でも出土している。地理的に見た場合、多気に中北勢系土師器が流入することは充分に想定できるのである。担当者もまた幾らかの資料が出土することを想定していたのであり、この結果は予想外といわざるを得ない。

さて南伊勢系土師器に目を向けてみると、当該土器は、中世後期に至ると北畠氏との関連が想定され

ることが指摘されている^④。すなわち、北畠氏という領主権力と関わることによって、その土器の流通範囲が拡大している状況を見出すことができるのである。このような状況を考慮に入れれば、多気における土師器流通に関しては、北畠氏という領主権力側の何らかの規制的状況が働いているのではないかと考えることができよう。

すなわち、多気の土師器流通に関しては、南伊勢系土師器に対して何らかの特権的保護が与えられているとともに、中北勢系土師器を含めたそれ以外の土師器には何らかの規制が働いていた可能性を考えることができよう。

これに関しては、興味深い伝承が残っている。現在の上多気字町屋地区の東端にあたる地区に、「ホウロクマチ」という地名が口承伝承として残っている^⑤。「ホウロク」とは土師器に認められる「焙烙」と考えてよいであろう。南伊勢系土師器の文献史学的検討を行った小林秀氏の研究によれば、「焙烙」という呼称は15世紀末には確実に成立している。また、中世後期における南伊勢系土師器の「焙烙」が南伊勢系鍋のことを指していることはおそらく間違いない。したがって、先述の土師器構成における南伊勢系土師器の圧倒的優位な状況を鑑みれば、この「ホウロクマチ」が南伊勢系土師器と関わっている地名であることが充分想定されるのである。

さて、「マチ」という呼称からは、「焙烙」を販売していた「町屋」が存在していたという推定のほかに、「焙烙」を生産していた場所であるという推定も可能である。南伊勢系土師器は、本拠地としては有爾郷（明和町・玉城町）であることはほぼ確実であるが、その集団の一部が北畠氏と関わることによって多気にも生産地を設定している可能性も大いにある。今後の検討課題としては極めて興味深いものといえる。

瓦質土器 大蓮寺跡付近からは火舎・鍋・擂鉢などの瓦質土器が出土しているものの、全体的には極めて少ないといわざるを得ない。鍋・擂鉢は、おそらく大和地域からの搬入品なのである。このような日常雑器の範疇で捉えられる鍋・擂鉢などの瓦質土器は伊勢地域にはほとんど認めることができない。伊賀南部地域および大和宇陀地域を領有していた北

畠氏の性格と絡み、本来の消費地域でない場所へと搬出されていることが想定されよう。

瓦器 大蓮寺跡付近および平成2年度調査区において若干出土している。伊賀型の系統でその末期的型式と考えられるが、このような資料も伊勢地域ではあまり認めることができないものである。

陶器 陶器類では、瀬戸・常滑・信楽の製品を認めることができる。しかし、越前・備前などの製品は全く認められなかった。今後の調査によって変化することもあるが、大勢としては陶器類の需要は比較的近接した地域によって賄われていたとみるとことができよう。

なお、鎌倉時代あたりの陶器としては、瀬戸・常滑などの碗（山茶碗）が出土している。当該時期の瓦器碗も少量は認められるが、基本的には山茶碗が主体的に分布する地域であることが推察される。

磁器 磁器類では、青磁・白磁のほか、15世紀後半～16世紀後半にかけては染付を認めることができる。大内氏山口や朝倉氏一乗谷などと、基本的には同様の状態と見なせる。

以上のことから多気における土器の状況を考えてみると、広域分布を示す瀬戸・常滑の陶器類と、南伊勢系土師器・貿易陶磁器によって基本構成がなされていることがわかる。そして、地域的あるいは領域的な背景から、大和・伊賀地域の瓦質土器・土師器および信楽の陶器が少量認められるものと考えられる。これはあくまでも今回の調査範囲における状況であり、以降の調査によって若干の異動はあるものと考えられるが、大きな変動はなかろう。

c. 出土土器の編年的位置づけについて

量的に充実している土師器類と、終末期の様相の一端を窺えそうな瓦器類についてみておこう。

土師器

土師器類では、主に皿類の変化をたどり、中世後期における編年のための材料としよう。

土師器皿類は、基本的な構成器種として小皿と皿がある。このうち、手法的・形態的な系統を考えると、全体としてA～Dの4系統に区分することが可能である。A系統としたものは、小皿についてのみ

認めることができる。B系統は、当初は皿として機能しているのであるが、ある時期を境に小皿へと転化する。C系統は形態的な類似からB・D系統の影響が考えられるものであり、皿を認めることができる。D系統は、その初現的形態をみれば、B系統の流れであることは明らかである。D系統には、小皿・皿がある。

13~14世紀を通じて認めることができたのは、小皿はA系統、皿はB系統（B1）のものであった。この状況は、今回の調査では大蓮寺調査区の工房跡周辺土器群において明確に認めることができる。しかし、大蓮寺跡周辺では、このような単純な土師器皿構成を認めることができず、A~D系統のものによって構成される複雑な様相を呈しているのである。したがって、工房跡が機能を停止してから大蓮寺が完成するまでの間にこのような土師器皿類の器種構成的画期が存在していることを想定することができよう。

B系統は、中世前期において南伊勢系における基本的な皿を構成するものであった。B系統が時期を追うにしたがって次第に口縁部径を縮小させていくものであることはすでに指摘しているが^⑦、今回の調査では工房跡周辺で11~12cmのものが確認された。同様な時期のものとしては、伊勢寺遺跡（松阪市M区SE1^⑧）の資料がある。これが、大蓮寺調査区SK174において8cm前後まで縮小していることが確認された。同様な資料は、ミゾコ遺跡SE7^⑨（多気町）、釈尊寺遺跡SK3・4^⑩（多気町）などにおいても確認できる。これらの資料は、鍋ではおよそ第3段階b形式～第4段階b形式にかけてのものを共伴している。

南伊勢系鍋の第3段階b形式～第4段階b形式の時期については、南所遺跡（津市）における資料の検討時に、15世紀中葉の時期を与えられる可能性を指摘している^⑪。このように、南伊勢系土師器における皿類の転換期は、15世紀中葉あたりの実年代を考えることが現状では最も妥当である。

A系統も、中世前期における小皿を構成する最も基本的な系統である。しかし、大蓮寺跡付近の資料を見てもわかるように、この系統はSK97において認められるのみで、それ以外では全く認めることができ

できない。この系統が小皿を構成する基本的な系統としての性格を消失するのは、やはりB系統の転換期と同様、15世紀中葉の時期を考えることができる。ただし、A系統は御所裏遺跡（度会町）で16世紀代と考えられる遺物とともに出土していることから、系統そのものが途絶えたものと考えることはできない。

C系統は、その初現的な例が釈尊寺遺跡SK4に認められる。形態的にはB系統の一定の流れをくむものと考えられるが、ヨコナデの使用にD系統と同一な動きを見ることが可能である。

D系統は、初現的な例としてはミゾコ遺跡SE7のほか、北畠氏館跡第2次調査整地土内において認めることができる。これらの遺構からはA・B系統も共伴して出土しているため、D系統とA・B系統が時期的には重なるものであることが考えられる。発生当初のD系統は、D1・D2という大形のものを中心としているが、次第に小皿の範疇に含まれるものも存在するようになり、南伊勢系の土師器皿類における器種全体構成する存在となるようである。なお、D系統は露越遺跡（明和町）SD1^⑫の資料から、江戸時代に入っても認めることができるものであることがわかる。

これらの事例を考慮に入れると、I. 工房跡土器群→II.（北畠氏館跡第2次整地土・ミゾコ遺跡SE7）→III. SK97・174（釈尊寺遺跡SK3・4）→IV. SK102・103→V. SK83・88という流れがあることが理解される。これに最も新しい遺物を含んでいるSK185,186をVIとして設定できる。最も大きな変革の時期は、I期とII期の間に存在する。瀬戸産陶器類との伴出例から、IV期あたりが15世紀と16世紀の境目であろう。

これら土器群の全体の流れは、B・D系統における口縁部径の縮小過程によって、段階的な時期区分は比較的厳密にできるようと思われる。しかし、この変化はあくまでも口縁部径の変化のみである。皿・小皿とともに形態的・手法的には構成要素が乏しいものであるため、型式学的な変化はあまり厳密には把握できない現状にある。したがって今回は型式設定を行わずに、変遷過程案を提示するに止めたい。

瓦器

今回の調査では、少量の出土にとどまるものの、その編年の位置づけには興味深いものがあるので若干の指摘を行っておこう。

近年伊賀地域を中心に、終末期の瓦器椀と考えられるものがいくつか出土している。そのなかでも、安田中世墓（青山町）における資料は、報告者が「（山田猛氏の編年でいう）Ⅲ段階第4形式よりもさらに後出的である」（枠内筆者註）としている。山田猛氏はその編年案提示時点における最終型式としたⅢ段階4型式の実年代を「初頭をある程度過ぎた14世紀の内に想定^⑨」している。

このように、伊賀型瓦器椀の系譜については、近年では14世紀代、厳密には「ある程度過ぎた」「初頭」を含まない14世紀代にまで遡れるものであることが想定されているのである。

今回の調査において出土している瓦器は、瓦器小皿が存在している時期とは大きく隔たっており、椀の系譜で考えることが妥当である。特徴的なのは、形態的には皿状を呈すること、口縁端部内面に沈線

状の窪みがあること、内面のヘラミガキは極めて粗いもののまだ同心円状に行おうとする意思があることであろう。資料的に充実していないものどうしを比較することはあまり意味のないことではあるが、安田中世墓のものよりは若干古い要素を考えることもできる。

これらの瓦器椀は、大蓮寺調査区の工房跡からはわずか1点の出土に止まっているものの、平成2年度調査区からは破片を含めて4点出土している。多気における中世遺跡の実質的展開が14世紀後半以降であることを考えれば、あまり積極的な評価は出来ないものの、15世紀前半以前まではこの瓦器椀の系譜が残っている可能性を考えることも可能である。

近年では瓦器椀終末の時期を14世紀中葉あたりに考える傾向にある。多気における伊賀型瓦器の事例も、このような全国的な動向とも絡めて検討していく必要があるが、極めて小さいながらも興味深い事例と考えられる。

2. 中世寺院と瓦について

今回の調査では、大蓮寺跡・法光寺跡を確認するに至ったが、多気にはこの2寺院のほかに、20ほどの寺院が存在していた可能性がある。総合的な評価は今後の調査事例を待つほかないが、この2寺院の調査によって得られた事例から、ある程度の見通しを提示しておこう。

a. 瓦からみた寺院屋根の構造について

大蓮寺跡

大蓮寺跡からは、前述のように軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦・伏鉢？・雁振瓦・蟹面戸瓦・二の平瓦・丸瓦・平瓦がある。

軒丸瓦の凹面玉縁寄りと、軒平瓦の凸面中央下半には、それぞれ滑り止めを認めることができる。これにより、軒先に横棟を設定して引っ掛ける構造であったことがわかる。また、軒平瓦の凹面前方側縁には水返しが認められる。これは、二の平瓦と組み合わせることによってなされる、瓦の滑り落ちを防止する工夫である。さらに、蟹面戸瓦の平面形態が

平行四辺形であることも特徴的である。これは、屋根構造が寄棟で、下り棟にも瓦を用いる形式のものであったことを示すものである。伏鉢の存在は、棟が屋根の頂点に集まる形態であることを示すものである。

大蓮寺跡における一部の建物には、おそらくこういった構造のものが含まれていたものと考えられる。

法光寺跡

法光寺跡からは軒丸瓦・軒平瓦・留蓋ないしは鬼瓦・雁振瓦・蟹面戸瓦・丸瓦・平瓦がある。大蓮寺跡ほどは良好な資料に恵まれないため、屋根構造の復元は困難である。蟹面戸瓦は、平面形が長方形であり、下り棟であったかどうかはわからない。しかし、448の資料を留蓋とするならば、やはり、下り棟構造のものが存在していたのかも知れない。

b. 寺院の建立年代について

大蓮寺跡

大蓮寺跡における瓦の特徴やその他の所属要素から、建立年代を推定してみよう。検討に当たっては、当該時期の寺院調査の例が少ないこともあり、法隆寺の瓦を検討された佐川正敏氏による研究成果^⑨に準拠する。

＜滑り止め＞大蓮寺跡の出土瓦には、前述のように各種の滑り止めがなされている。佐川氏によれば、この特徴は「室町以降」とされる。

＜丸瓦の吊り紐痕＞丸瓦内面の吊り紐痕は、佐川氏の分類では「C型」に相当し、他は認められない。このような特徴は、室町中期Ⅰ～中期Ⅱ（1397～1495）の特徴と考えられる。

＜丸瓦の面取り＞遺物の章で触れた通りである。これらの特徴を総合すると、室町中期Ⅰ～中期Ⅱの特徴と考えられる。

以上のことから、大蓮寺跡については、ほぼ15世紀代の範疇で把握することが可能であろう。

＜工房跡との関連＞大蓮寺跡の建立年代については、隣接する工房跡の意義が重要である。工房跡からは、南伊勢系鍋では第3段階a～b型式のもの、特にb型式のものが主体的に出土する。そして、第4段階a型式をもって終焉している。第3段階a型式の時期的位置づけがややむつかしいが、おおよそ15世紀前半を中心とした時期に盛行し、15世紀半ばで終焉していることと考えて大過ない。この地区は、時期的に単一なこと、焼土混じりの土が多いこと、鉄滓が出土していること、砥石の出土が多いこと、建物周囲に頻繁に円形土坑が掘られていること、などから、一般住居跡とするよりは工房跡と考えるのが妥当であろう。また、先の出土土器の検討で見るように、この工房跡は大蓮寺跡と擦れ違うようにして廃絶を迎えていることも重要である。

このことは、当工房跡が大蓮寺建立に何らかの役割を担っていたのではないかという可能性を示唆するものと考える。瓦の所属年代については、出土土器から推し量ることは可能であるにしても、それはあくまでもそれ以前のものであるということを示すに過ぎない。大蓮寺跡周辺から出土した土器は15世紀後葉以降のものであり、これは大蓮寺の機能開始時期を示しているものに他ならない。工房跡の消滅と大蓮寺の機能開始がほぼ同じ時期に認められる事

実を重視する必要がある。

以上のことから、大蓮寺跡の出土遺物は15世紀後葉以降の時期を示しているが、工房の消滅時期が本来の機能開始時期と積極的に評価し、15世紀中葉かそれ以前に建立が開始されたものと考える。

法光寺跡

法光寺跡の資料は、極めて少ないため、建立時期を考えるにはかなりの無理がある。今回検出した土壇については先述のように16世紀代の築造を考えるのが妥当であろうが、出土した瓦がこの土壇に伴うものと考えるにはあまりにも少ない。また、建物の存在を示すような形跡も認められなかった。したがって、これらの瓦は土壇形成以前にすでに存在していた建物に伴うものと考えるのが妥当である。

大蓮寺跡の瓦と比較してみると、いくつかの相違点はある。それは、平瓦の厚さにばらつきがあること、軒平瓦・平瓦の凹面に布目痕の認められるものがあること、である。また、軒丸瓦の巴文は、大蓮寺跡のものに比べて平坦であるとともに、頭部先端が「Y」字の模様で接続されている点に特徴がある。

これらの諸特徴が果たして後出的要素なのか前出的要素なのか、現状で断定することは差し控えざるを得ない。ただし、出土遺物に瀬戸大窯Ⅰ期のものがあることから、遅くとも16世紀初頭には機能が開始していたものと考えられる。

c. 多気における寺院の意義について

大蓮寺跡・法光寺跡の確認は、色々な意味を持っている。先述の近世文書とも関わるが、近世に作成された「多気古城絵図」と呼ばれるものがいくつか存在している。^⑩これは、これまで何の検討もなされていないまま掲載されているか、あるいは後世の想像がかなり入っているものとして取り扱われないもののどちらかであった。しかし、寺院についていえば、今回の大蓮寺跡・法光寺跡の確認も含めて現地比定できるものがいくつかあり、ある程度信用できることが明らかになった。すなわち、絵図の全ては信用できないが、そのうちの寺院表現についてはある程度信用できるといえるのである。

この事実を踏まえて大蓮寺跡の時期を考えてみる

と、さらに大きな意義があることに気付く。すなわち、近世絵図に描かれた寺院が、結果的には北畠氏・多氣の最終場面であることは言うまでもないことがあるが、その一部の建立が15世紀中葉までは遡ると

いう事実である。これは、「都市・多氣」の性格規定の上で、極めて重要なポイントとなるものである。

3. 大形掘立柱建物とその周辺

平成2年度調査区からは、桁行9間・梁間4間の大形掘立柱建物が検出された。ここでは、この掘立柱建物とそれに伴うと見なされる掘立柱建物の構造を検討しておく。

a. 建物群の企画性

大形掘立柱建物（SB301）とその周辺の掘立柱建物群における企画性を検討するために、fig.50を参照されたい。1尺は30.3cmとして検討する。

SB301は桁行9間・梁間4間で、それぞれの柱間はすべて7尺(2.12m)に統一されている（①）。したがって、桁行は63尺(19.09m)、梁間（⑧）は

28尺(8.48m)である。SA302はSB301東端から8尺のところにある（②）。SB304はSB301の南から4列目の梁間柱通りに合わせられている。SB305・SA306はSB301の南から3列目の梁間柱通りに揃っている。したがって、SB304とSB305・SA306とは平行で、その間に7尺の細長い空間が東西に存在している（③）。この7尺の空間はSA302に突き当たったところで南に折れ、やはり7尺の空間となって存在している（④）。

以上がおよその設定基準であるが、次にそれぞれの建物どうしの距離や間隔を測ってみる。⑤の間隔はおよそ90尺となる。同様に、⑦は65尺、⑥は62

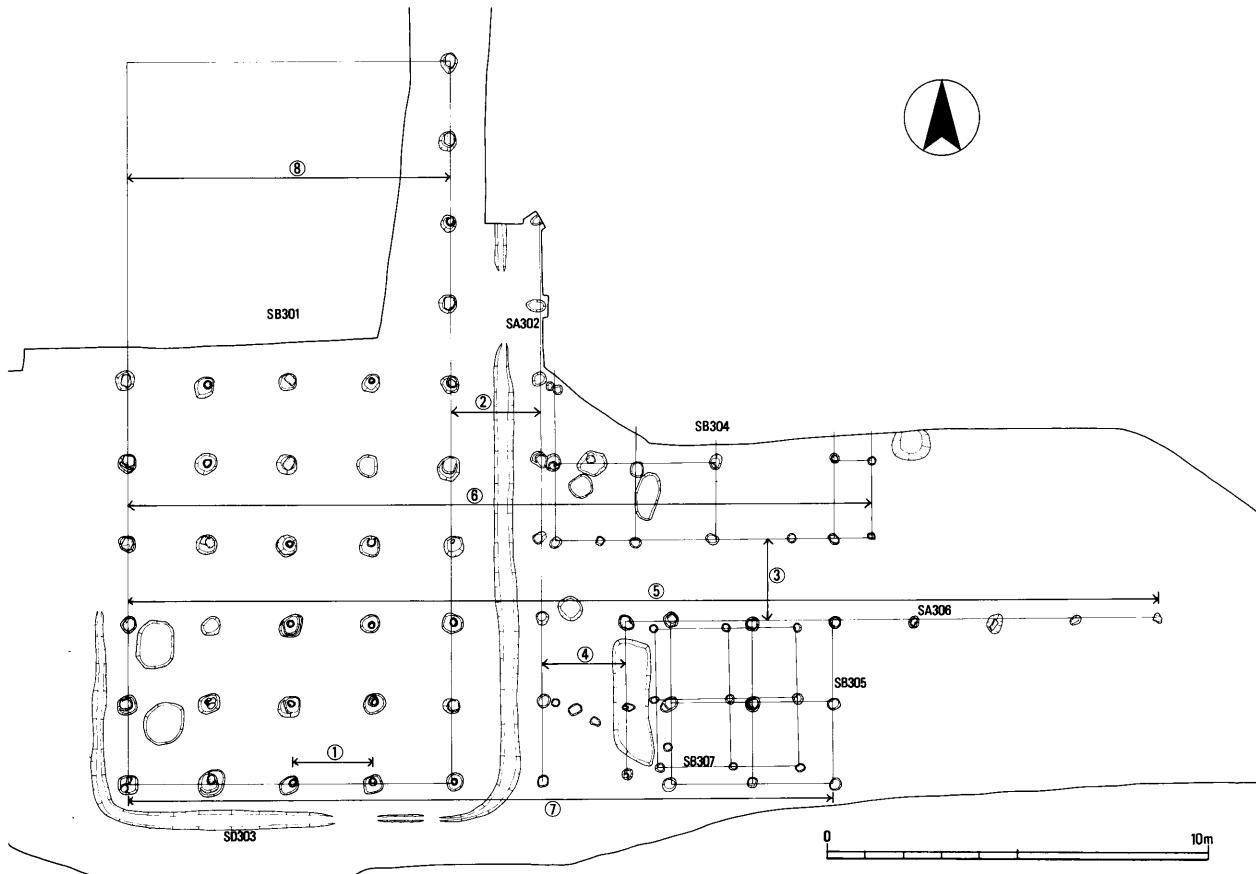


fig.50 大形掘立柱建物SB301と周辺の規格 (1 : 400)

尺となる。⑦のみが少しまとまらない数値となるが、S B301西端を基準とした規格設定を考えることができるのでないだろうか。

また、S B307を除いた建物・柱列は、いずれも「7尺」という一定の規格基準を持っている。この「7尺」という数値は、高橋康夫氏によれば室町時代における「1間」に相当するものである^⑧。当該建物の時期が14世紀後半以降であることとはほぼ符号する。

b. 建物群の性格と空間構造

S B301という規模の大きい建物を基準として、それ以外の建物・柱列が設定されているらしいことが窺われた。これら全体でひとつのものであることは、もはやあきらかであろう。規模を見れば、S B301が「主屋」に相当する。S B304の南柱列はS B301の梁間幅と同じではあるが、ピットの形状が全く異なり、S B301ほどの規模を有するものではないであろう。S B305はいうまでもなく小さい規模のものである。したがって、S B304・305はS B301に付随する建物ではないかと考えられる。

また、S A302・S B304・S B305・S A306の間(③・④)は、7尺という一定の間隔をもっている空間である。積極的に評価すれば、「通路」の機

能を考えるのが妥当であろう。機能的には、東側からの進入を意識したものとも考えられ、S A302に当たって南に折れた後、S B301に至るという経路が想定される。そうした場合、S B301の入口のひとつが南向きに存在していた可能性があろう。しかし、「雨落ち溝」と考えられるS D303とS B301との間隔を見ると、東側が広い。このことは東側に庇を有していた可能性を示唆するものであり、柱列S A302との関係が問題となる。

c. 建物群の性格

当該建物群からの出土遺物は、極めて少ない。それは、包含層に相当する層が削平されていることも考えられようが、ゴミ捨て穴のような土坑についても全く認められないことも注意を要する。

このような規模と企画性および付隨する要素からは、当該建物群に対して「武家屋敷」とすることも可能ではないかと考えられる。しかし、どのような要素によって「武家屋敷」が定義されるのかについては、未だ際立った言及はない。平成2年度調査区における建物群についていえば、1棟が単独で存在するものではないこととともに、複数棟が極めて隣接したり方を示すこと、また、企画的に柱列を配していること、などを挙げることができる。

4. 多気における中世地方政治都市のあり方

以上のことから、今回の調査によって得ることができた極めて限定された資料からも、「多気」の興味深い事例の一端が明らかになったと思う。ここでは、前項までの検討を踏まえたうえで、「都市・多気」についての見通しを述べておく。言うまでもなく、総合的な検討のためには更なる資料の充実を待たねばならない。

a. 北畠氏「多気」の発生と消滅

第2章において見てきたように、「多気」においての興味深い事例が増加するのは、北畠氏という強大な領主権力の入部を契機としている。北畠氏が「伊勢国司」として任せられたのは南北朝時代・14世紀前半であろうが、その時期の文献に北畠氏と多

気とを結び付けるようなものはない。多気に北畠氏が入部したことを示す確実な文献資料は『満済准后日記』の応永22(1415)年5月24日条であるが、『枝葉抄』応永10(1403)年3月29日条に「多気」および「ミカキノ里 伊勢国也 国司管領」とあることから、間接的に「多気」と北畠氏とを結び付けることができる。

北畠氏「多気」が消滅するのは、直接的には織田信長の伊勢攻略によってであるが、本拠地としての多気の機能停止は、織田信長の伊勢攻略に伴って多気が焼亡する時期(永禄12(1569)年)^⑨であろう。したがって多気は、おおよそ170年間にわたって、北畠氏が本拠地としたところであったと考えられる。

b. 多気の「都市整備」

文献によって測り知れる北畠氏「多気」は、15世紀初頭からであった。さて、北畠氏が拠点をこの地に設定する意義を考えてみよう。多気は、後の伊勢本街道として機能を果たす道の途中にあり、ある程度の交通の便を考慮しての配置であったことは想像に難くない。しかし、それにしても多気は山間部で周囲を峻険な山岳によって囲まれており、交通の便が良好とは言い難い。多気と北畠氏が直接関連する初現の文献史料は、北畠満雅が幕府に対して蜂起する時期であり、そのような軍事的要因を多大に内包した拠点設定であったものと考えることができそうである。なお、北畠氏は国司でもあるとともに、実質的な守護大名でもある。したがって、多気が政治的中心としての要素を内包していることは言うまでもない。

このように、地域の統括者=大名権力としての北畠氏は、多気を軍事性・政治性を備えた拠点として機能させようとしているといえる。これはすなわち、この地に一般集落とは異なった属性を具備した場を形成する必要があることを示す。特に、この地が当初軍事的要因を多大に内包して成立したものであるとするならば、大規模な政治的・軍事的性格=一次的な非生産的場を維持するだけの設備と環境が必要となる。すなわち、生産地でない消費地としての場=都市を建設する必要があるのである。その意味で多気は、北畠氏「多気」として発生した当初から都市性を具備している必要があるのである。

北畠氏「多気」の都市的要素は、現象面からは寺院という非生産階級的建造物の多さと土地区画において認めることができる。第Ⅱ章で触れたように、六田地区には明確な土地区画が遺存している。また、大蓮寺調査区における工房跡の建物方向が、現在の田圃の区画方向に揃っていることは、この地に一定の区画が存在していることを物語っている。ただし、土井沖地区における土地区画は地形にかなり制限されているようで、先述のSB301を中心とした「武家屋敷」と工房跡の建物とは方向が揃わない。しかし、今回の発掘調査によって得られた大きな成果のひとつに、大蓮寺調査区における現況地割りと建物方向との一致がある。これは15世紀前半代の工房跡

から認められるものである。すなわち、15世紀前半代には当地の地割りが開始されていることを示唆するものであり、北畠氏・多気の成立が、明らかにこの時期まで遡ることと理解される。

多気における土地区画を、遺存している地割りから想定したのがfig. 3である。この図と近世絵図を比較すると、先述の寺院と同様、ある程度の一貫性を認めることができる。道の区画を最も重視しているのは六田地区であり、この部分に政治的中心が置かれていた可能性が高いであろう。

c. 北畠氏「多気」の史的位置づけ

北畠氏「多気」の位置づけのためには、武家屋敷群と「町屋」群の存在の有無の確認が必要である。果たして、それぞれが別の地点に何らかの閉塞性を有しながら存在しているものかどうかは、歴史学的に位置づけるための大きな問題である。越前朝倉氏の一乗谷は、小野正敏氏によって詳細な検討がなされているが、そこでは、武家屋敷といわゆる「町屋」とがある程度渾然一体となって存在している状況が復元されている。この「町屋」が「店舗」のような機能を果たしていたものかどうかは今なお即断すべきものではないが、小島道裕氏や石井進氏の指摘のように、直属工人と見なすのが妥当であろう。すなわち、近世の「城下町」における商人町とは異なるものと考えるべきであろう。

さて、一乗谷をはじめ、戦国大名といわれる存在を契機として成立した都市は、近年「戦国期城下町」とされている。しかし、一乗谷のような属性を備えている政治都市を「城下町」としてしまうと、その発生は戦国時代はおろか室町時代をも飛び越えて、鎌倉幕府による都市・鎌倉にまで遡ってしまわざるを得ない。すなわち、一乗谷のような都市は、近世における城下町とは同一に扱うべきものではないと考えるのである。

都市としての近世城下町とそれ以前のものとを区分する要素はいくつかあるが、とりあえず多気の状況からいえば、都市としての閉塞性を挙げることができよう。先述の一乗谷にても後北条氏の小田原にしても、山岳と土壘という違いこそあれ、都市域を限定するところにその性格の一端を窺うことがで

きる。しかし、織田氏の安土、豊臣氏の大坂は、一見その都市域を区画しているように見えるものの、強固な区画は本城のみあるいはそれに付随する上級家臣屋敷群のみであり、一般住居地の区画は実質的には存在せず、「町」空間が可能な限り拡大していくことができる。この観点からすれば、北畠氏多気は一乗谷など的一群に含まれるものである。

したがって、北畠氏多気は、室町時代に発生する軍事的要因を多分に含んだ、城下町の系列ではない地方政治都市であるとすることができよう。多気の中世地方政治都市研究の資料としての価値は、当地が遅くとも15世紀前葉あたりから展開していくことからも、また、遺構の状況が極めて良好と推察されることからも、極めて高いものと言っても過言ではない。

(註)

- ① この土器の特徴については、伊藤裕偉「南伊勢系土師器の展開と中世土器工人」(『三重県埋蔵文化財センター紀要』第1号 1992)および同「大里地区内遺跡群」(『平成3年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』第1分冊 三重県埋蔵文化財センター 1992)参照
- ② 服部久士「家野遺跡」(『平成元年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』第1分冊 三重県埋蔵文化財センター 1990)
- ③ 田中喜久雄「上野垣内遺跡」(『昭和54年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1980)
- ④ 伊藤裕偉「南伊勢系土師器の展開と中世土器工人」(『三重県埋蔵文化財センター紀要』第1号 1992)
- ⑤ 地元の奥野友一氏のご教示による。
- ⑥ 小林秀「中世後期における土器工人集団の一形態～伊勢国有爾郷を素材として～」(『三重県埋蔵文化財センター紀要』第1号 1992)
- ⑦ 伊藤裕偉「近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査報告』第3分冊 楠ノ木遺跡 三重県埋蔵文化財センター 1991)
- ⑧ 竹内英昭「伊勢寺遺跡」(『平成2年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』第2分冊 三重県埋蔵文化財センター 1991)
- ⑨ 増田安生「ミゾコ遺跡」(三重県教育委員会 1985)
- ⑩ 田村陽一「釈尊寺遺跡」(『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告』第1分冊1 三重県教育委員会 1989)
- ⑪ 註(1)文献
- ⑫ 小林秀「御所裏遺跡」(『平成2年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』第1分冊 三重県埋蔵文化財センター 1991)
- ⑬ 平成3年度北畠神社調査。なお、宮崎洋史・伊藤裕偉『北畠氏館跡第2次発掘調査略報』(1992)に出土土器を少量掲載している。
- ⑭ 大西素行「斎宮跡・露越遺跡」(『昭和54年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1980)
- ⑮ 森川櫻男ほか『安田中世墓発掘調査報告』青山町教育委員会 1988)
- ⑯ 山田猛「伊賀の瓦器に関する若干の考察」(『中近世土器の基礎研究』II 1986)
- ⑰ 橋本久和「80年代の瓦器椀研究をめぐって」(『博物館学芸員課程年報』第5号 追手門学院大学 1991)・森島康雄「畿内産瓦器椀の併行関係と曆年代」(『大和の中世土器』II 1992)など
- ⑱ 小林謙一・佐川正敏「平安時代～近世の軒丸瓦」(『伊河留我』10 1989)
- ⑲ 藤堂元甫『三国地誌』宝暦13(1763)など
- ⑳ 高橋康夫「中・近世都市の空間と構造—京都を事例として—」(『関西近世考古学研究』III 1992)
- ㉑ 『続群書類從』補遺1 続群書類從完成会 1927
- ㉒ 奈良県教育委員会編『奈良県「歴史の道」調査報告書- 伊勢本街道-』(1985)
- ㉓ 『信長公記』(『新訂増補史籍集覽』臨川書店1967)、「公卿補任」(『新訂増補國史大系』第55巻公卿補任第3篇 1965)ほか
- ㉔ 都市成立の契機については、若林幹夫『熱い都市 冷たい都市』(弘文堂 1992)による。
- ㉕ 小野正敏「越前一乗谷の町割と若干の問題」(『日本海地域史研究』第3輯 1982)
- ㉖ 小島道裕「戦国期城下町の構造」(『日本史研究』257 1984)および石井進「鎌倉の町屋から戦国の町屋へ」(『中世都市と商人職人』名著出版 1992)

P L A T E



多気全景南上空から 1992年7月撮影

大蓮寺調査区

(1)



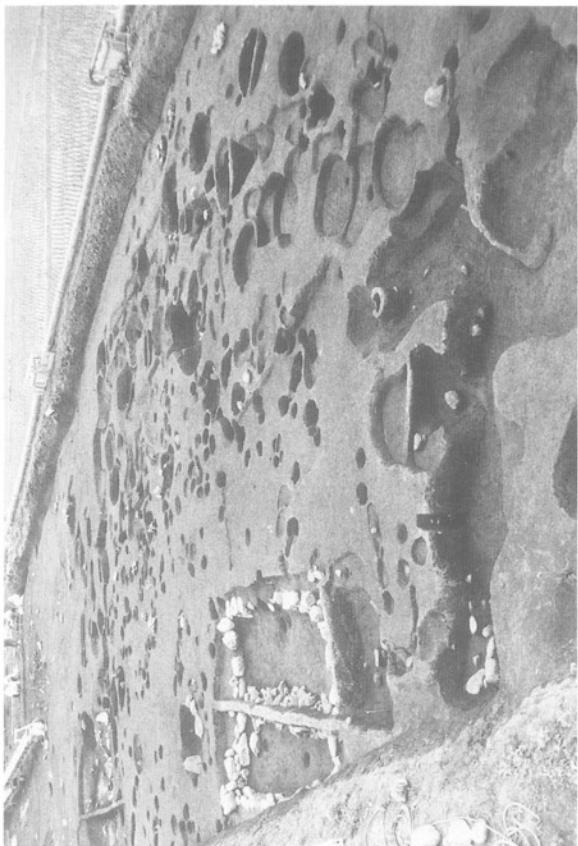
大蓮寺調査区全景（北上空から）



大蓮寺調査区全景（西から）



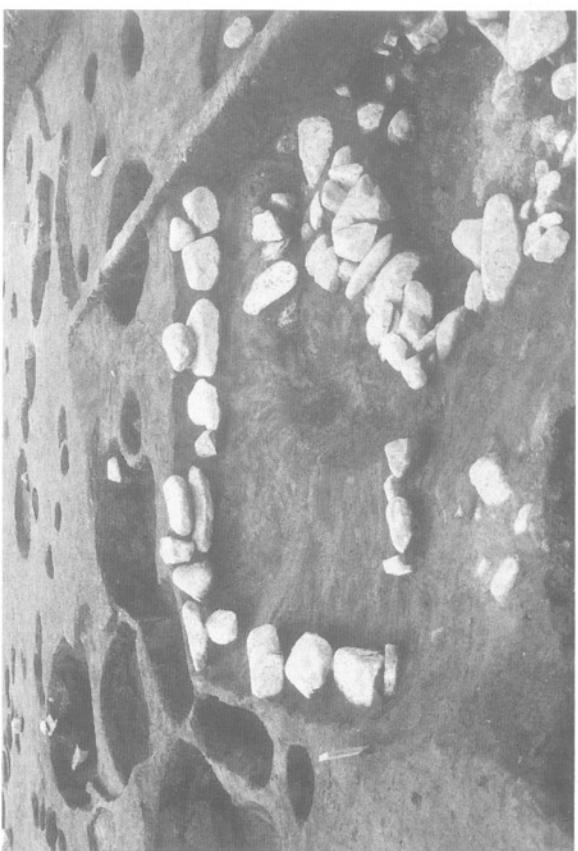
調査風景（西から）



工房跡全景（南西から）



石組遺構 S K 11（北から）中央土坑掘削前



石組遺構 S K 38（南から）



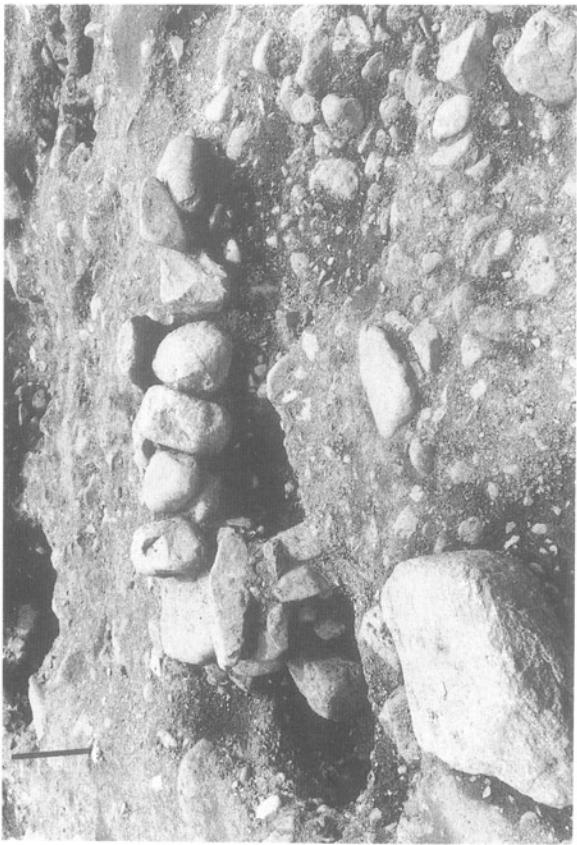
大蓮寺跡付近遠景（東から）



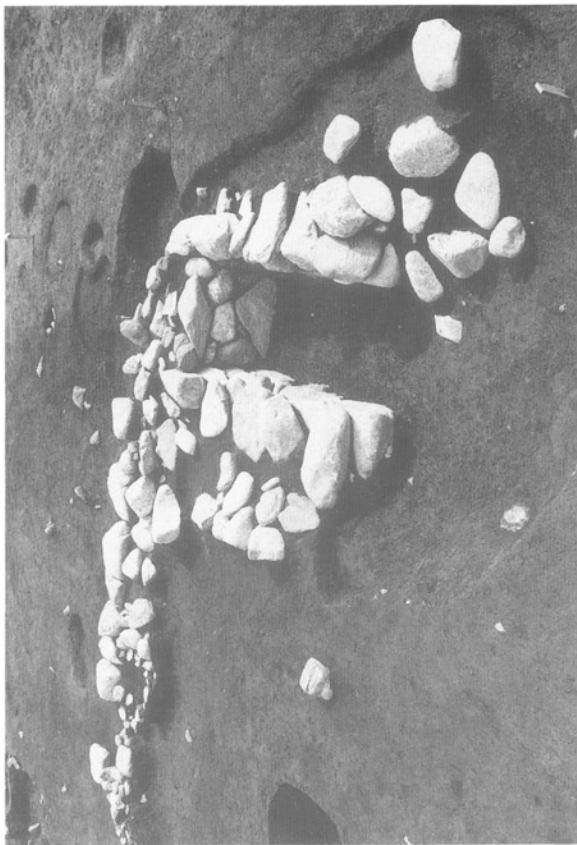
大蓮寺跡付近（東から）



竪穴住居SH117（西から）



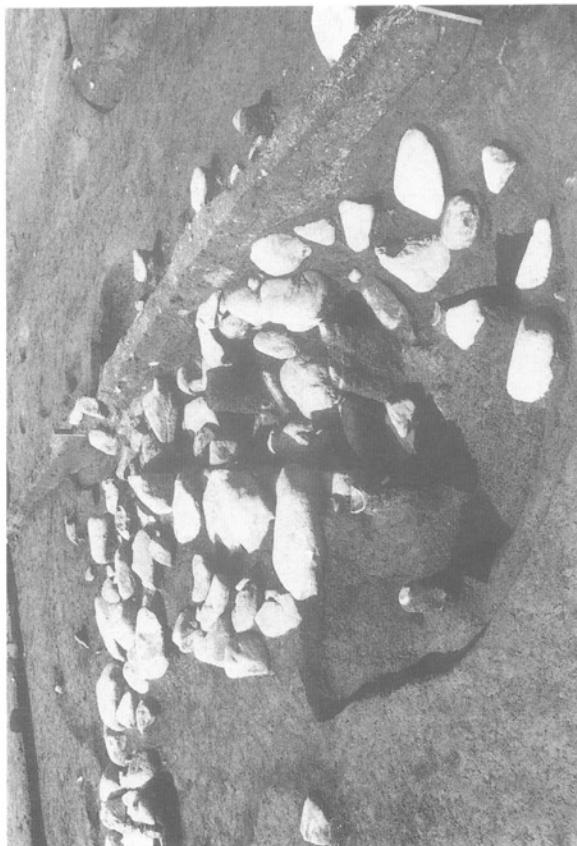
落ち込みSK178（東から）



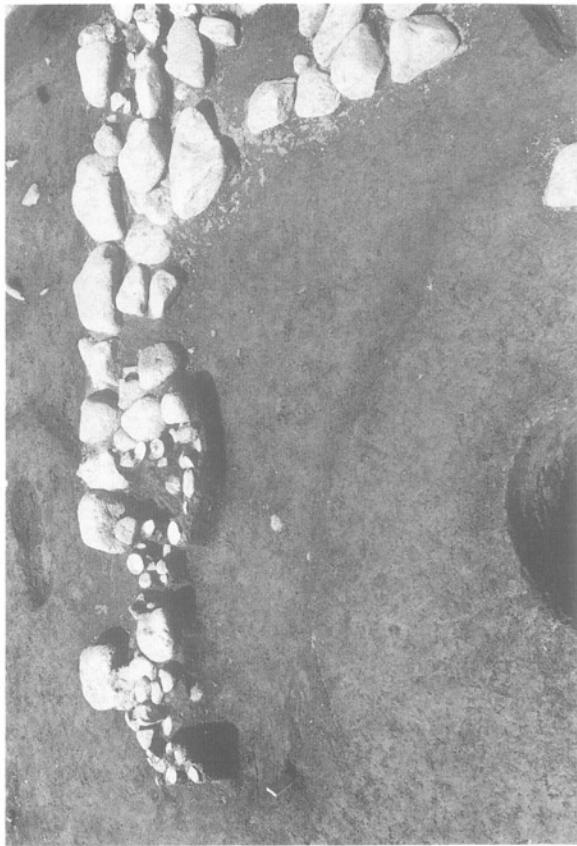
石組遺構 S K101・石列 S Z88 (北から)



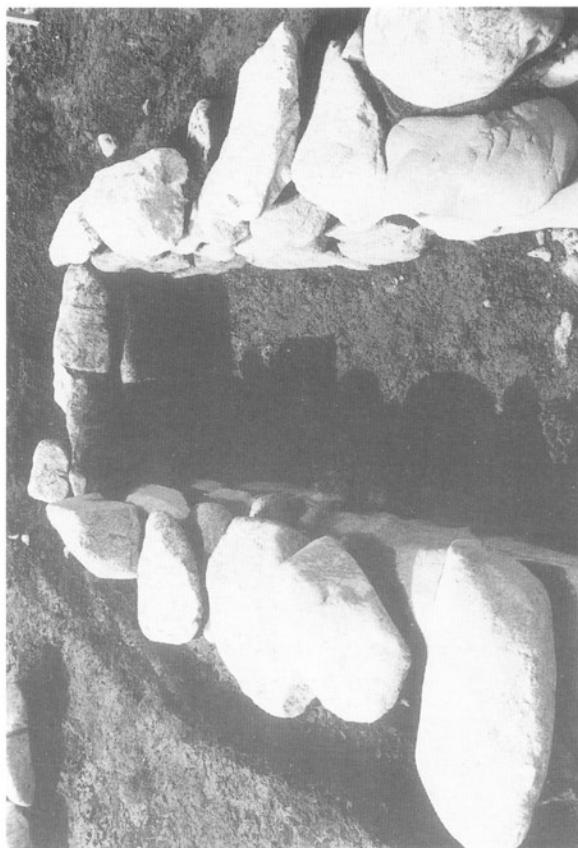
石組遺構 S K101・石列 S Z88 (東から)



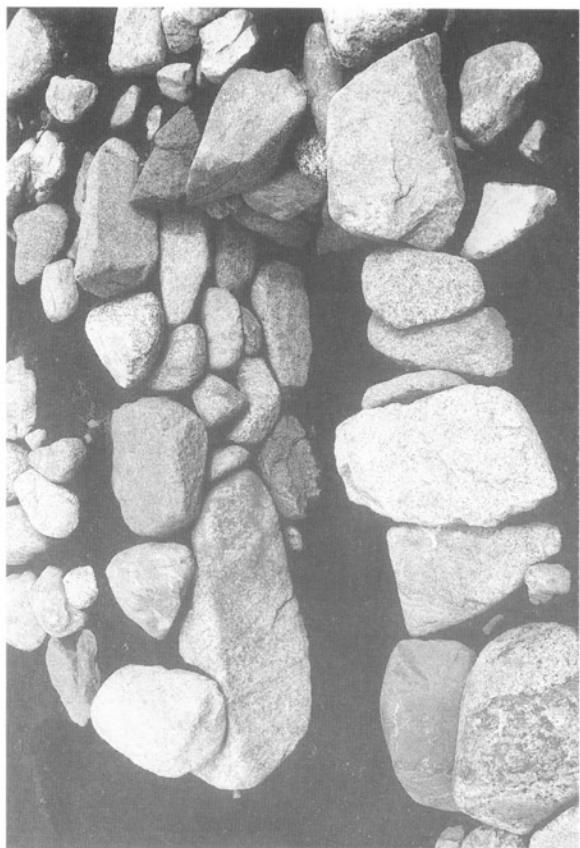
石組遺構 S K101土層 (北東から)



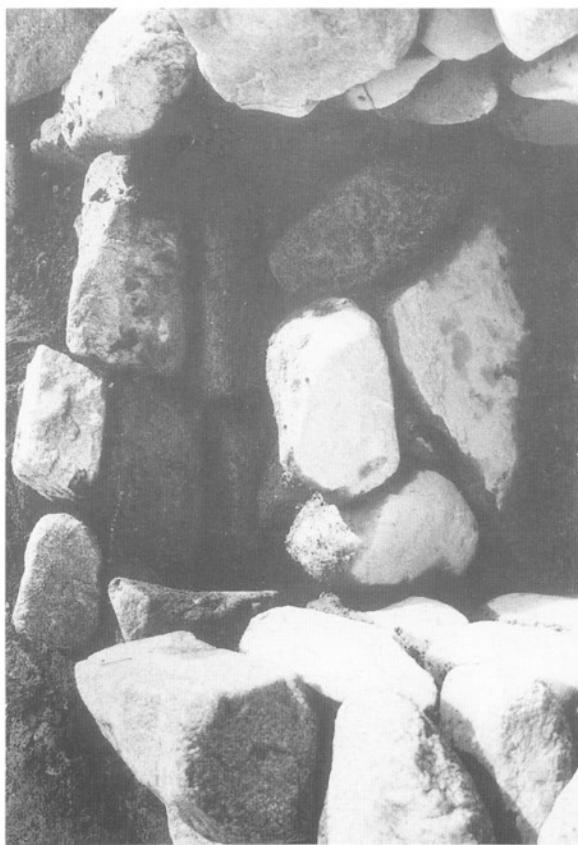
石列 S Z88 (北から)



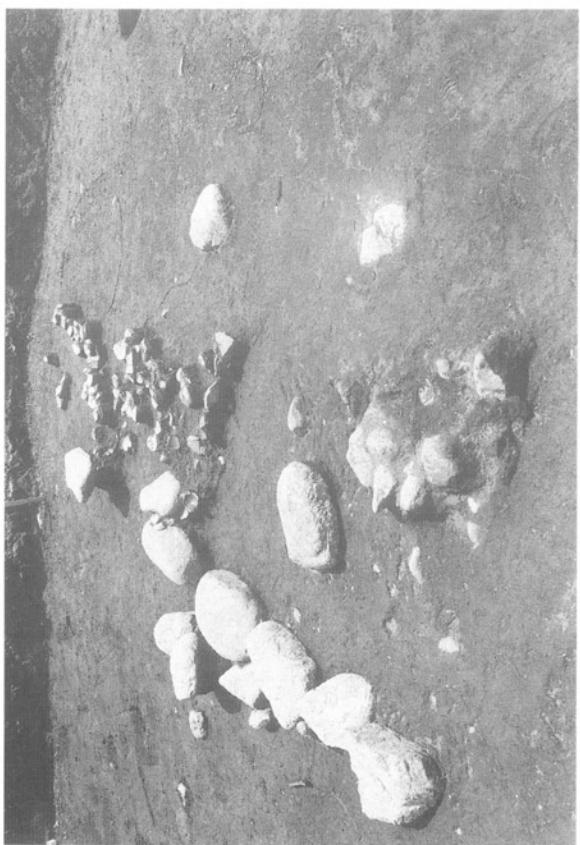
石組遺構 S K 101第1次奥壁（北から）



石組遺構 S K 101東側壁（西から）



石組遺構 S K 101第1次と第2次奥壁との関係



石列 S Z 90（北から）



竪状石組 S K 172 (東から)



竪状石組 S K 172土層 (東から)

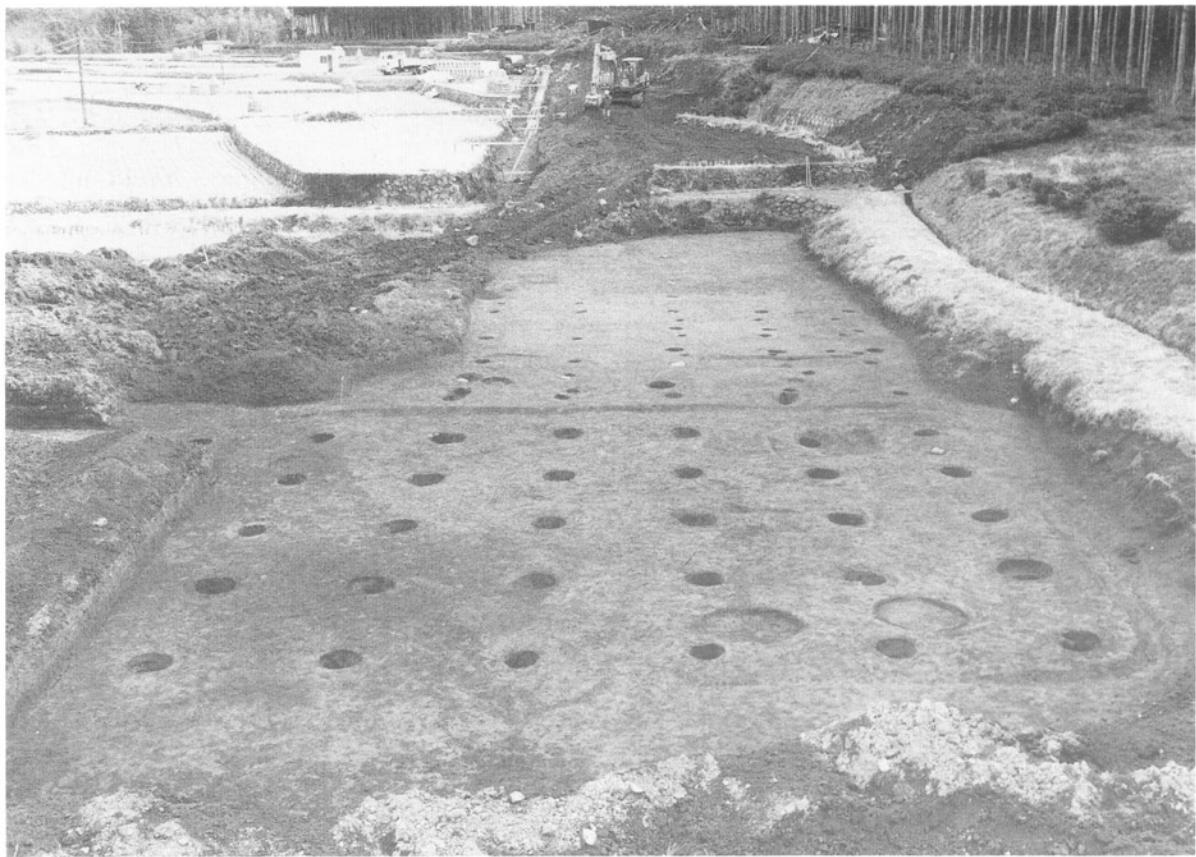


石組遺構 S K 185・186 (北から)



土坑 S K 152遺物出土状況 (北から)

平成2年度調査区
(1)



平成2年度調査区全景（西から）



平成2年度調査区全景（東から）



掘立柱建物 S B 301 (南から)



掘立柱建物 S B 305・307 (北から)



法光寺調査区全景（東上空から）



法光寺調査区全景（東から）



法光寺跡土壇石列（東から）



法光寺跡、土壇東端石列（北から）

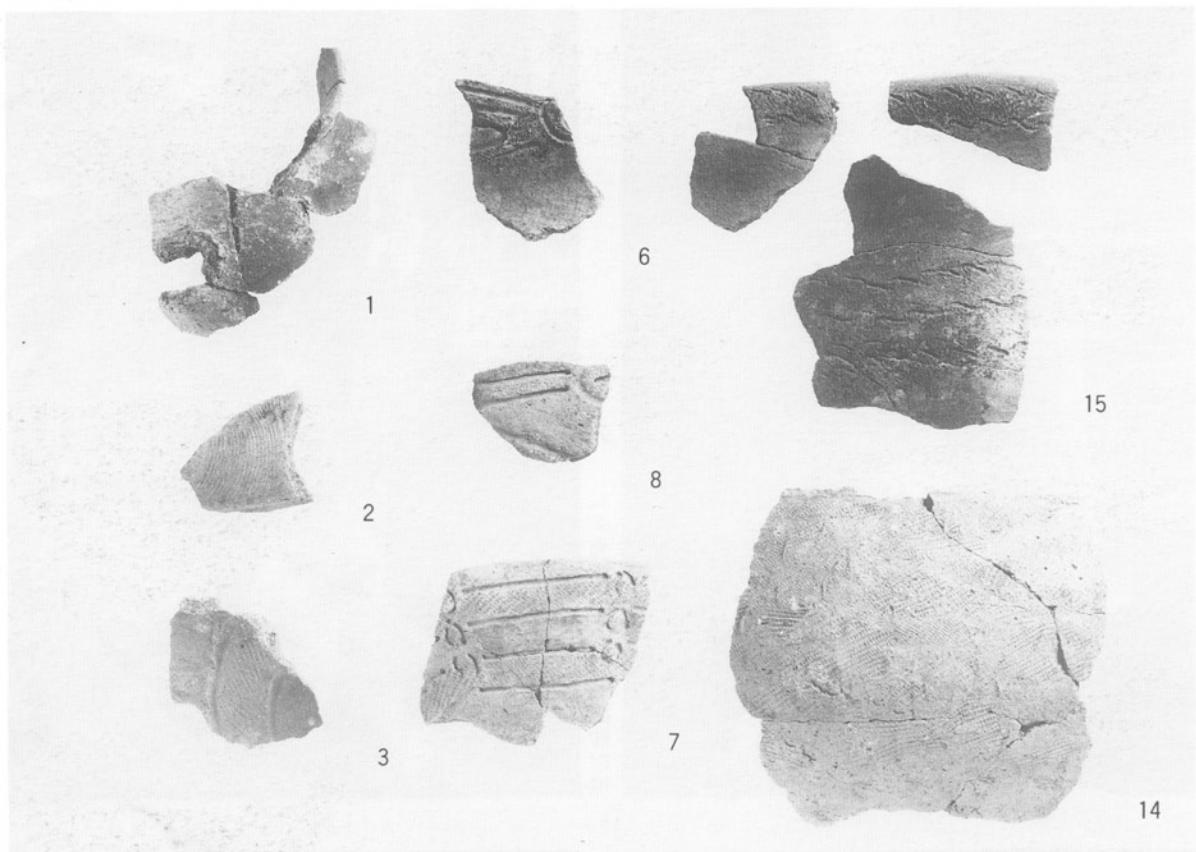


法光寺跡全景（北西から）

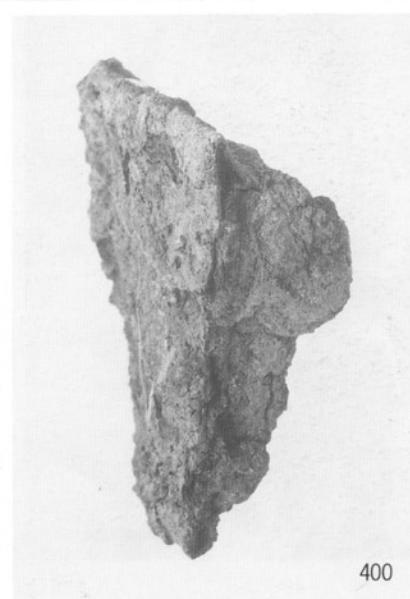
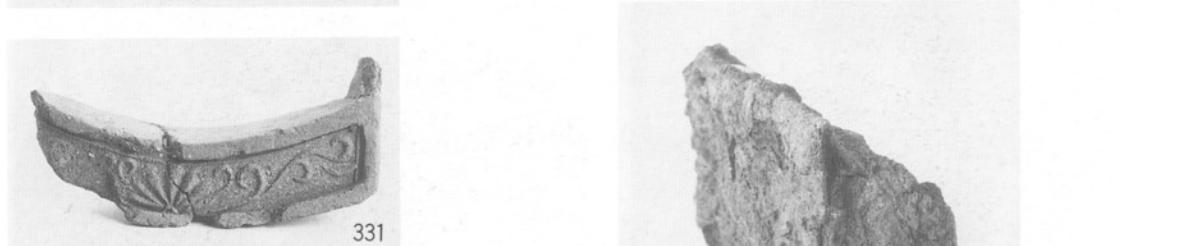
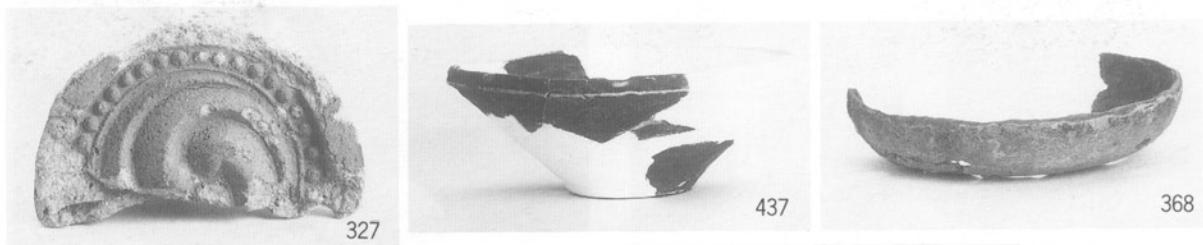


法光寺調査区調査風景（東から）

出土遺物(1)



縄文土器



鉄鍋の口縁部



157



178



167



140



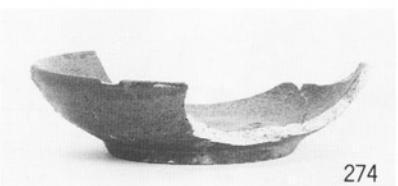
230



271



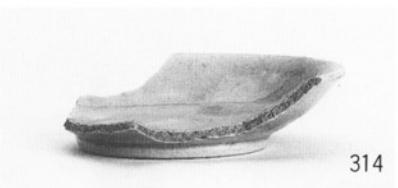
276



274



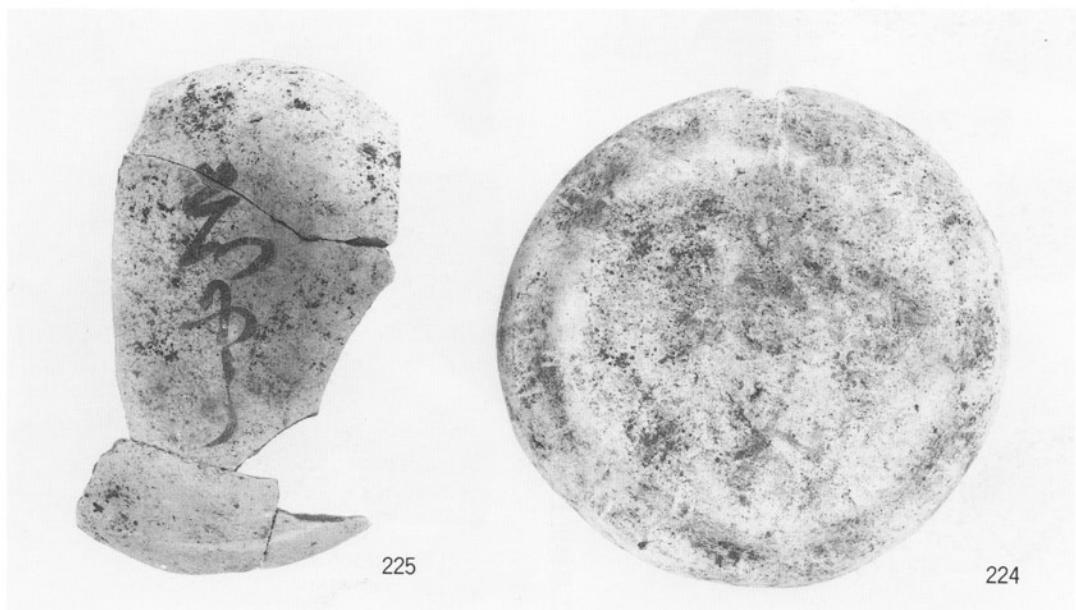
153



314



269

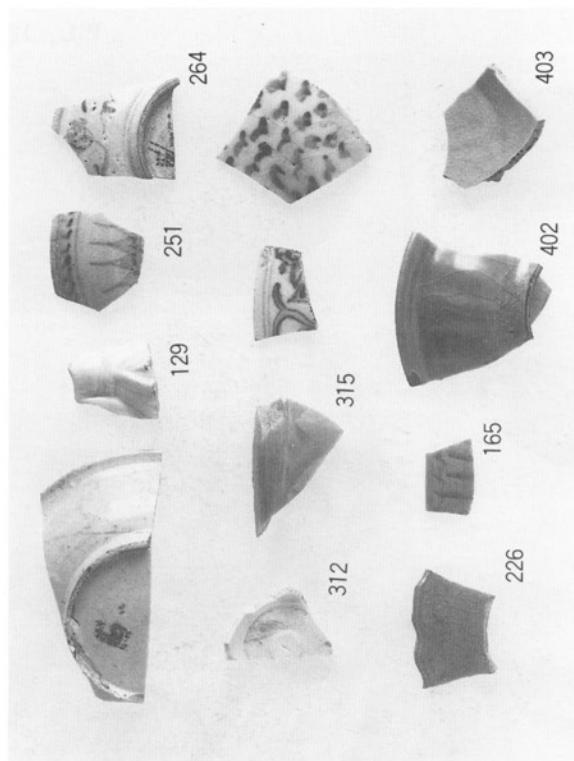


225

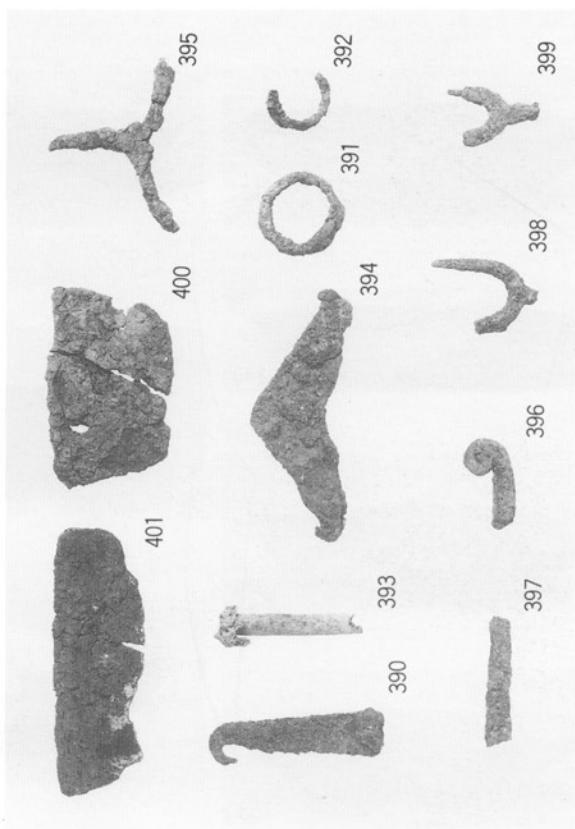


224

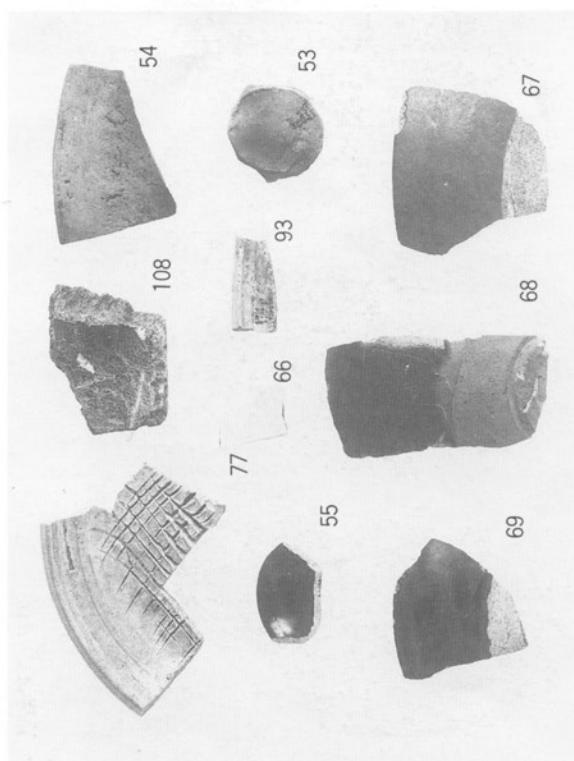
墨書土器 (2 : 3)



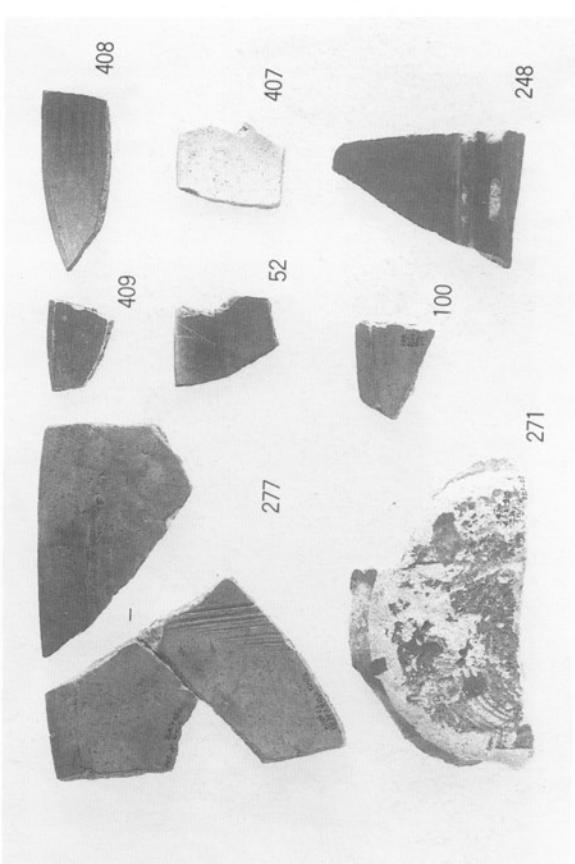
貿易陶磁



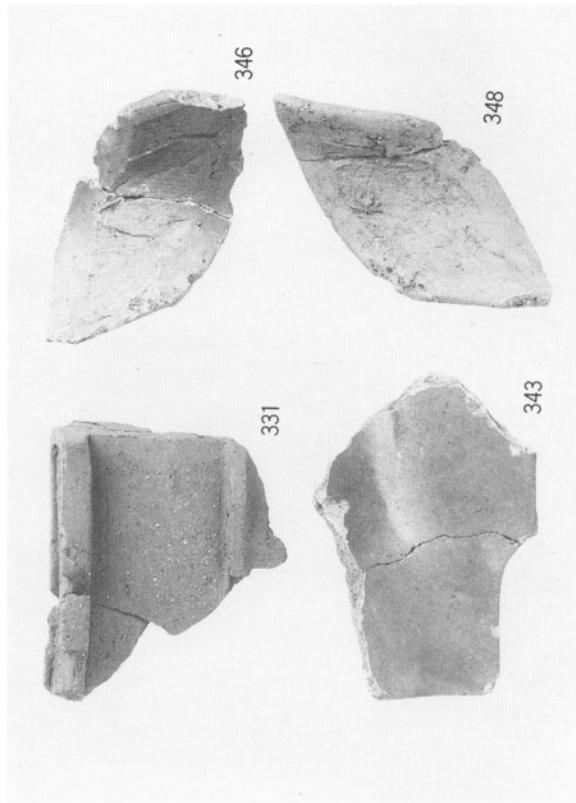
鐵製品類



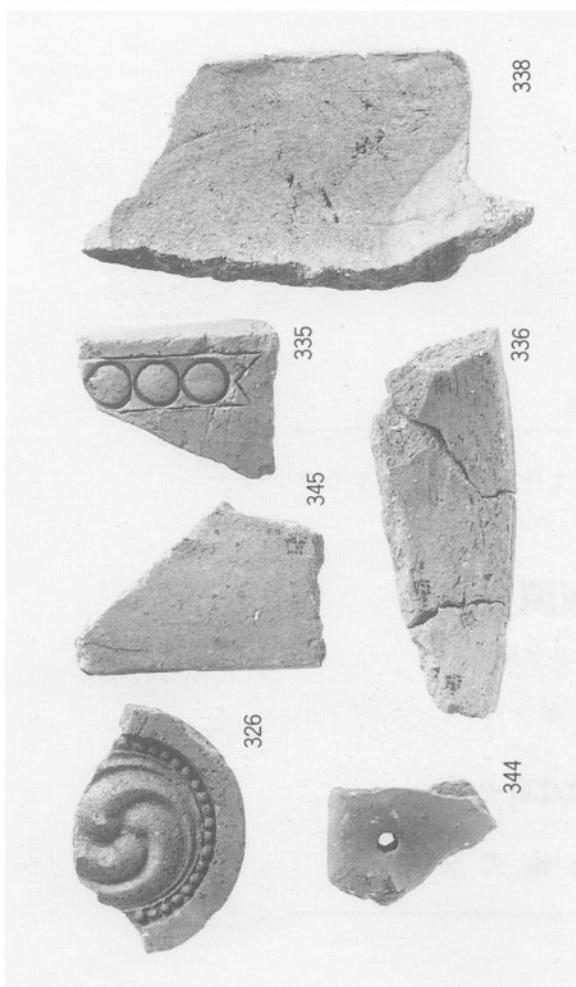
工房跡出土遺物



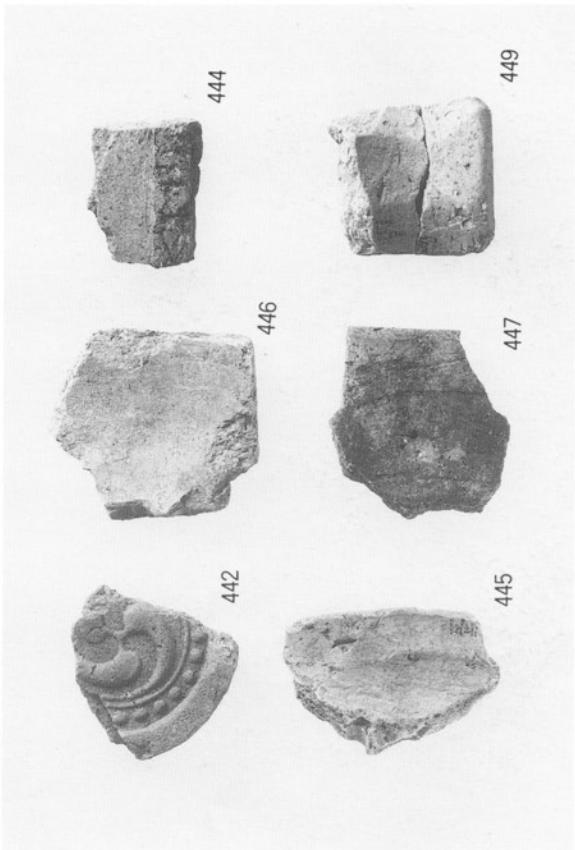
瓦器・瓦質土器



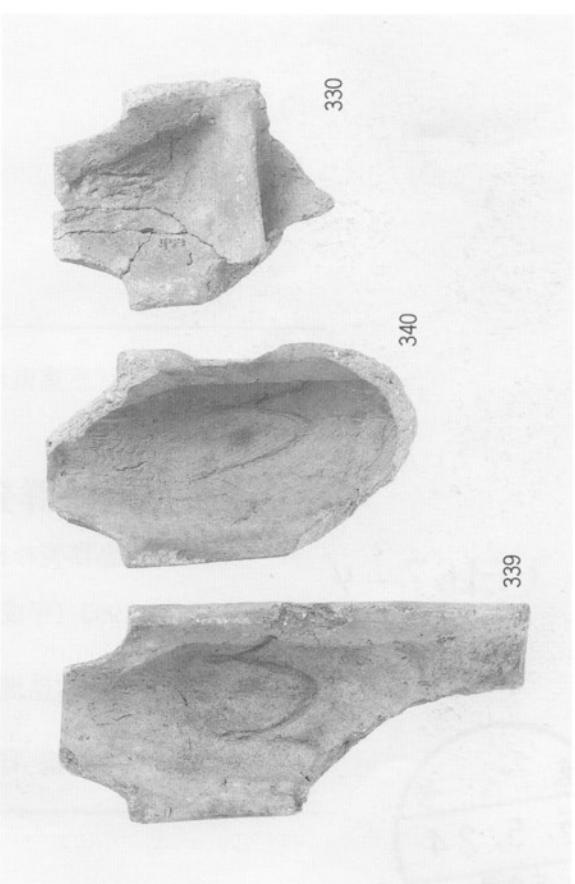
大蓮寺跡出土瓦



大蓮寺跡出土瓦



法光寺跡出土瓦



大蓮寺跡出土瓦

平成 5(1993) 年 3 月に刊行されたものをもとに
平成 19(2007) 年 1 月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 109

た げ
多気遺跡群発掘調査報告

—一志郡美杉村上多気所在—

1993 (平成 5) 年 3 月

編 集 三重県埋蔵文化財センター
発 行

印 刷 東 海 印 刷 株 式 会 社
